和歌山市都市整備公社発掘調査報告書　第５集

田屋遺跡　第６次発掘調査報告書

２０１２

財団法人和歌山市都市整備公社

序　文

和歌山県は、古代より「木の国」と呼ばれ、海や川、そして山に囲まれた山河清祥の地です。

そのなかで和歌山市は、紀伊半島の北西部、大台ヶ原を源とし西流する紀ノ川によって形成された和歌山平野を市域としています。この肥沃な和歌山平野には、太古から人々が生活を営み、長期にわたり歴史を刻んできた多くの遺跡が今も静かに眠っています。

近年では、鳴神貝塚で発掘された縄文時代晩期の人頭骨をもとに復顔像が製作され、約3000年前に生きた人々のイメージが身近なものとなりました。また、約2000年前（弥生時代中期）の建物や鹿を描写した絵画土器が見つかった太田・黒田遺跡、「表」と「裏」のふたつの顔をもつ特異な人物埴輪をはじめ、大王級の壮大な形象埴輪によって約1500年前（古墳時代後期）の精神世界が表現された大日山35号墳など、発掘調査によって明らかとなる遺構や遺物は遠い祖先の歴史を物語る貴重な文化遺産と言えます。

本書に収めた田屋遺跡は、弥生時代から平安時代にかけて紀ノ川北岸に起居した人々の集落跡です。これまでの発掘調査では、60棟以上を数える竪穴建物や掘立柱建物、自然の河川跡などが見つかっています。今回の調査では、古墳時代初頭から前期（約1700年前）の竪穴建物が多数見つかりました。ここにその成果を報告します。

これらの調査成果が地域の歴史認識を豊かにし、埋蔵文化財の記録と活用、そして保存に向けた礎となることを願っております。

最後になりましたが、発掘調査にあたり、ご指導、ご協力いただきました関係者各位ならびに関係機関の皆様に深く感謝します。

平成24年３月16日

財団法人 和歌山市都市整備公社

理事長 垣　本　省　五

例　言

1．本書は、和歌山市道路建設課が和歌山市直川字須井田377番地に計画した直川用地公共的施設区画道路の整備に伴う埋蔵文化財発掘調査の本報告書である。

2．調査は、和歌山市道路建設課の委託事業として財団法人和歌山市都市整備公社が受託し、和歌山市教育委員会文化振興課の指導のもと、対象面積738.2㎡を2010年11月４日から2011年２月18日まで、また遺物整理作業を2011年５月13日から2011年７月26日までの期間で行った。

3．埋蔵文化財発掘調査及び報告書刊行に係わる調査体制は以下の通りである。

○発掘調査（平成22年度）
財団法人和歌山市都市整備公社
事務局　埋蔵文化財班
班長（学芸員）　北野隆亮
主任（学芸員）　藤藪勝則（調査担当）
主任（学芸員）　奥村　薫（庶務担当）

○遺物整理・報告書作成（平成23年度）
財団法人和歌山市都市整備公社
事務局　埋蔵文化財班
班長（学芸員）　北野隆亮
主査（学芸員）　藤藪勝則（報告書担当）
主任（学芸員）　奥村　薫（庶務・遺物整理担当）

4．本報告書掲載の遺跡、遺構及び遺物の写真撮影は藤藪が行った。

5．本書の執筆及び編集は藤藪が行った。

6．本発掘調査において実施した自然科学分析については下記機関に委託した。
ガラス製玉原材産地分析…有限会社遺物材料研究所　　土壌分析…株式会社古環境研究所

7．自然科学分析など業務を委託した報告については、第６章として掲載した。

8．本書の作成にあたり、大亦信夫氏、松下嘉夫氏には、発掘調査に際し土砂仮置場としての土地借用に快諾をいただき多大なるご協力を賜った。また、田中元浩氏（公益財団法人和歌山県文化財センター）、前田敬彦（和歌山市教育委員会）をはじめ、各関係機関の方々には有益なご教示、ご指導を賜った。ここに記し感謝の意を表します。

9．発掘調査及び遺物整理作業において作成した実測図、写真、台帳、出土遺物等はすべて和歌山市教育委員会の所管であり、財団法人和歌山市都市整備公社が収蔵及び管理している。

凡　例

1．遺構平面図の基準線及び土層堆積状況写真の撮影位置に付した座標値は、平面直角座標（第Ⅵ系）に基づき世界測地系とした。また方位は座標北を指す。水準値は国家水準点（T.P.値）を基準とした。

2．土層の色調及び土質の観察は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帳』を用いた。

3．本書で使用した遺構番号は、種別ごとに連番とし、遺構の略号は下記の文献を参考とした。
『発掘調査のてびき－集落遺跡発掘編－』文化庁文化財部記念物課　2010

4．写真図版の遺物に付した数字番号は実測図番号に対応する。

5．遺物の型式及び名称についての参考文献は、遺物観察表の凡例に記した。

6．本書の作成にあたり主に下記の文献を参考とした。
『田屋遺跡発掘調査報告書－一般国道24号（和歌山バイパス）建設工事に伴う発掘調査報告書－』（財）和歌山県文化財センター　1990
『田屋遺跡発掘調査概報』（財）和歌山市文化体育振興事業団　2005
『田屋・小豆島遺跡発掘調査報告書－県道紀伊停車場田井ノ瀬線改良工事に伴う発掘調査－』（財）和歌山県文化財センター　2005

本文目次

第１章　調査に至る経緯と経過……（藤藪勝則）…1
第２章　遺跡の位置と環境……2
　第１節　地理的環境……2
　第２節　歴史的環境……3
　第３節　既往の調査……5
第３章　調査の方法と概要……14
　第１節　調査の方法……14
　第２節　調査の概要……15
第４章　調査の成果……17
第５章　まとめ……33
　第１節　田屋遺跡西端部における微地形と遺構分布……33
　第２節　竪穴建物……37
第６章　自然科学分析……38
　第１節　ガラス玉の蛍光Ｘ線分析による元素分析……38
　第２節　和歌山市田屋遺跡第６次発掘調査における自然科学分析（土壌分析）……40
出土遺物観察表……49
報告書抄録……54

挿　図　目　次

第１図　調査地位置図
第２図　田屋遺跡周辺の遺跡分布図
第３図　田屋遺跡における既往の調査位置図
第４図　調査地周辺における既往の調査位置図
第５図　第２次調査　調査地土層柱状模式図
第６図　遺物実測図１
第７図　遺物実測図２
第８図　第２次調査　第１・３区遺構全体平面図
第９図　第２次調査　ＳＨ－１・２土層断面図
第10図　第２次調査　ＳＤ－８・９土層断面図
第11図　遺物実測図３
第12図　調査地区割図
第13図　第３次調査　調査地土層柱状模式図
第14図　調査地土層柱状模式図
第15図　遺物実測図４
第16図　第６次調査　遺構全体平面図
第17図　ＳＩ－２、ＳＫ－６・７、Ｐ－189・190遺構平面図及び土層断面図
第18図　遺物実測図５
第19図　ＳＩ－８遺構平面図及び土層断面図
第20図　ＳＩ－１・３・６・７、ＳＤ－15・16、Ｐ－261遺構平面図及び土層断面図
第21図　ＳＩ－１、ＳＤ－36～38、ＳＫ－12・19、Ｐ－215～219・221・232土層断面図
第22図　遺物実測図６
第23図　遺物実測図７
第24図　遺物実測図８
第25図　ＳＩ－４、ＳＫ－10、Ｐ－148～151遺構平面図及び土層断面図
第26図　遺物実測図９
第27図　ＳＤ－２、14、20・23・24遺構平面図及び土層断面図
第28図　遺物実測図10
第29図　遺物実測図11
第30図　遺物実測図12
第31図　遺物実測図13
第32図　ＳＫ－８遺構平面図及び土層断面図
第33図　遺物実測図14
第34図　ＳＸ－１土層断面図
第35図　遺物実測図15
第36図　調査地周辺の微地形
第37図　調査地における遺構変遷図
第38図　田屋遺跡第６次調査出土青色ガラス玉NO.459（112669）の蛍光Ｘ線スペクトル
第39図　田屋遺跡第６次調査出土青色ガラス玉のＥＳＲスペクトル
第40図　秋月遺跡出土ガラス玉のＥＳＲスペクトル
第41図　田屋遺跡第６次調査におけるプラント・オパール分析結果
第42図　田屋遺跡第６次調査における花粉ダイアグラム

表　目　次

表１　田屋遺跡における既往の調査一覧表
表２　田屋遺跡第６次調査出土古墳時代前期の青色ガラス玉の化合物元素濃度分析結果
表３　田屋遺跡第６次調査におけるプラント・オパール分析結果
表４　田屋遺跡第６次調査における寄生虫卵・花粉分析結果

図　版　目　次

図版１　調査前の状況
図版２　調査区全景
図版３　調査区全景
図版４　ＳＩ－２（南東から）、ＳＩ－２（南から、左奥ＳＩ－１・３・６・７）
図版５　ＳＩ－２土層堆積状況（北西・北東から）
図版６　ＳＤ－17土層堆積状況（北西から）、ＳＤ－17砥石出土状況（南東から）、ＳＫ－６土層堆積状況（北西から）、Ｐ－189・190土層堆積状況（北西から）、ＳＫ－７（西から）、ＳＫ－７土層堆積状況（西から）
図版７　ＳＩ－８（南西から）、ＳＩ－８（東から）
図版８　ＳＩ－１・３・６・７（北西から）、ＳＩ－１・３・６・７（南西から）
図版９　ＳＩ－１土層堆積状況（南東から）、ＳＩ－１土層堆積状況（北東から）
図版10　ＳＤ－19土層堆積状況（南東・北東から）、ＳＤ－36～38土層堆積状況（南西から）、Ｐ－215・216土層堆積状況（南東から）、ＳＫ－12土層堆積状況（北東から）、ＳＫ－12土層堆積状況（北西から）
図版11　Ｐ－261土層堆積状況（東から）、Ｐ－232土層堆積状況（北西から）、Ｐ－218・221土層堆積状況（南東から）、ＳＫ－12・19・Ｐ－232（北西から）、ＳＤ－38・ＳＫ－18（南西から）、ＳＤ－16（南西から）、ＳＤ－16土層堆積状況（南西から）
図版12　ＳＤ－15（東から）、ＳＤ－15土層堆積状況（西から）、ＳＫ－10（南西から）、ＳＫ－10土層堆積状況（北西から）、ＳＩ－４（南西から、右奥ＳＩ－５）
図版13　ＳＩ－４土層堆積状況（南東・南西から）
図版14　ＳＤ－21土層堆積状況（南東から）、Ｐ－148～151土層堆積状況（南西から）、Ｐ－153・154土層堆積状況（南東から）
図版15　ＳＤ－20・23・24（西から）、ＳＤ－20・23土層堆積状況（西から）、ＳＤ－20・23・24土層堆積状況（西から）、ＳＤ－20土層堆積状況（西から）、ＳＤ－23・24土層堆積状況（西から）
図版16　ＳＤ－14（南東から、手前から土器11・10・８・７）、ＳＤ－14土器出土状況（西から）、ＳＤ－２（西から）、ＳＤ－２土層堆積状況（西から）
図版17　ＳＫ－８土層堆積状況（南東から）、調査区西壁土層堆積状況（東から）・南壁土層堆積状況（北から）
図版18　第２次調査第４・６層出土遺物、第２次調査ＳＤ－８出土遺物
図版19　第２次調査ＳＤ－８・９・12出土遺物、第６次調査第５層出土遺物、ＳＩ－２出土遺物、ＳＤ－17出土遺物

図版20　ＳＩ－１出土遺物、ＳＤ－17・19・22出土遺物、Ｐ－189・261・232出土遺物
図版21　ＳＩ－４出土遺物、ＳＤ－20・23出土遺物、ＳＫ－10出土遺物
図版22　ＳＤ－14出土遺物
図版23　ＳＤ－２・６・11出土遺物、Ｐ－96出土遺物、ＳＸ－１出土遺物
図版24　田屋遺跡第６次調査の花粉・胞子
図版25　田屋遺跡第６次調査のプラント・オパール

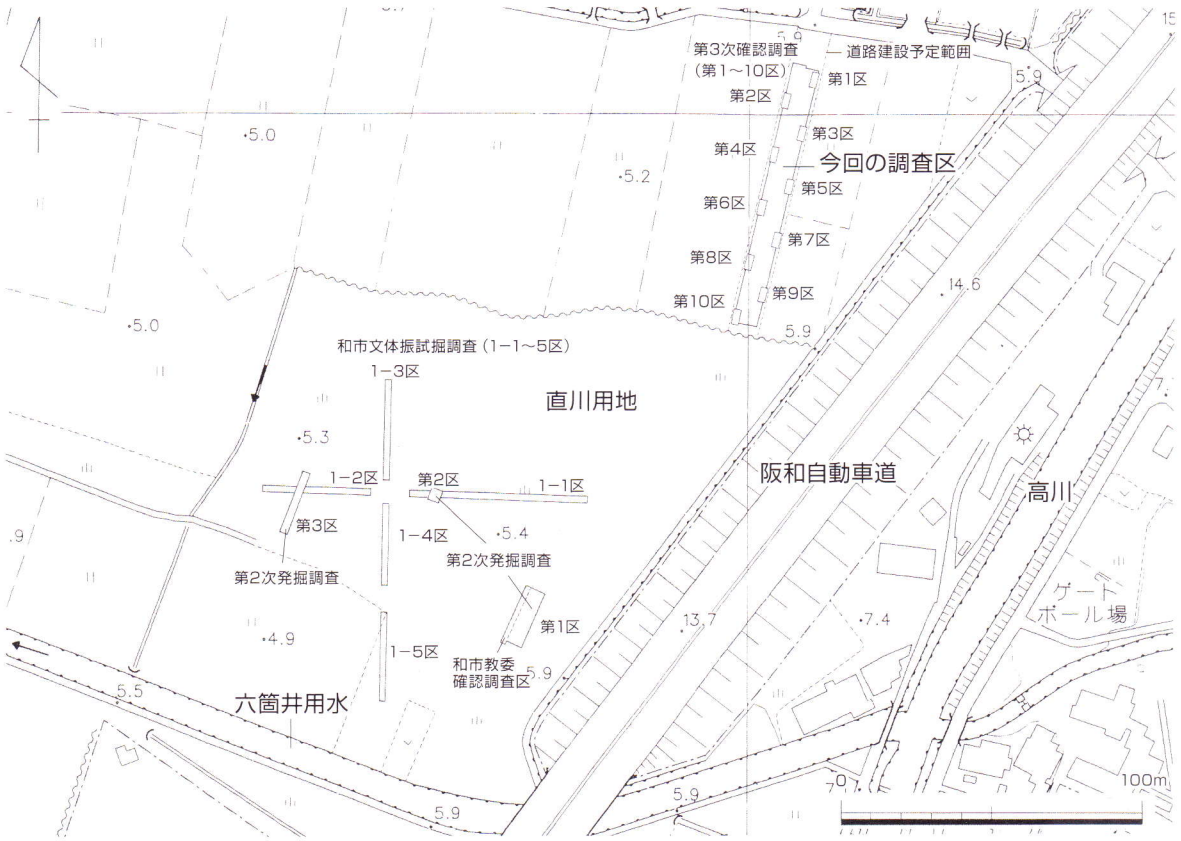
第１章　調査に至る契機と経過

今回の調査地は、阪和自動車道と紀ノ川が交差する地点の北東約700m、阪和自動車道の西側に位置する。調査地周辺は現在、和歌山北インターチェンジの建設や和歌山市の企業誘致に伴う物資集積場及び大規模店舗の建設に伴い旧状が失われつつあるものの、以前は紀ノ川北岸堤防下の水田地帯であった（第１図）。

田屋遺跡は、標高4.5～5.0mの沖積平野に立地する弥生時代から鎌倉時代の集落遺跡である。

調査地周辺における過去の調査では、昭和57～61年に調査地の南東約１㎞地点において社団法人和歌山県文化財研究会が行った一般国道24号（和歌山バイパス）建設に伴う調査があり、この調査では弥生時代後期から古墳時代後期にかけての竪穴建物約60棟の他、掘立柱建物や溝、自然流路、平安時代の掘立柱建物などが検出され田屋遺跡が当該期の集落遺跡であることが明らかとなった（第３図）。また、平成17年には阪和自動車道の西側一帯において財団法人和歌山市文化体育振興事業団が六箇井用水の北及び南側両地域を対象として埋蔵文化財の有無を確認するための試掘調査を行った（第１図１－１～５区）。その結果、六箇井用水の南側一帯は紀ノ川の氾濫原であったものの、北側では直川用地内において奈良時代から平安時代の溝や自然流路が検出されている。この調査結果を受けて、和歌山県教育委員会は田屋遺跡西端の一部範囲変更を行い、現在調査地周辺は田屋遺跡の範囲内である。

その後、平成20年に和歌山市教育委員会が直川用地内において公共施設建設に伴う確認調査を行い古墳時代の溝などを検出したことから、同21年に財団法人和歌山市都市整備公社が第２次発掘調査を実施



第１図　調査地位置図（和市文体振…和歌山市文化体育振興事業団、和市教委…和歌山市教育委員会）

している。この調査では、第１・３区において安定した明黄褐色のシルト質土（第７層）を検出し、その上面において古墳時代前期のものとみられる溝及び土坑、古墳時代中期の掘立柱建物、古墳時代後期に埋没した溝の他、平安時代前期に埋没した大溝、遺構の重複関係から奈良時代から平安時代のものとみられるピットなど多数の遺構が検出され、調査地周辺に古墳時代から平安時代の遺構が高密度に展開している状況が明らかとなった。また第２区周辺は粘質土の堆積が厚く認められ、直川用地の北半部には沼地または湿地が存在するという調査結果である。

さらに同22年には、和歌山市が和歌山市直川字須井田377番地に計画した直川用地公共的施設区画道路の整備に伴い、財団法人和歌山市都市整備公社が遺跡の北側への広がりを確認する目的で第３次確認調査を実施している。この調査では、第２次発掘調査において検出した明黄褐色のシルト質土（第３次調査では第６層）を確認し、第１・２・６～10区の各調査区ではその上面において、古墳時代初頭から前期のものと考えられる竪穴建物や溝、土坑及びピットを多数検出した。また第２～５区では第６層上面の落ち込み（SX－1）と、その上部に堆積した古墳時代前期以降の遺物を一定量含む遺物包含層を確認している。

今回の調査は、和歌山市直川字須井田377番地における直川用地公共的施設区画道路の整備を契機とし、この場所が『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』に記載された周知の遺跡である田屋遺跡（遺跡番号93）の範囲内であり、第３次確認調査結果に基づき本発掘調査を実施した。

調査は、和歌山市道路建設課から財団法人和歌山市都市整備公社が委託を受け、和歌山市教育委員会文化振興課指導のもと行った。調査期間は、平成22年11月４日から平成23年２月18日である。また平成23年１月22日には、現地説明会を開催し、150名の見学者に調査成果の説明を行った。

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

和歌山市は、紀伊半島の北西部に位置し、北は和泉山脈を境とし大阪府泉南郡岬町及び阪南市に、東は和歌山県岩出市及び紀の川市に南は海南市に接し、西は紀伊水道に面している。奈良県の大台ヶ原に源を発する紀ノ川は、本市のほぼ中央を流れて紀伊水道に注いでおり、その沖積作用によって運ばれた土砂によって和歌山平野が形成されている。

紀ノ川流域の地勢は、紀伊半島の北端を東西走（W－15°－S）する中央構造線の内帯と外帯で大きく異なる。内帯に属する紀ノ川北岸には、和泉砂岩層を主体とする和泉山脈が東西走し、外帯に属する紀ノ川南岸には、紀伊山地から派生し、結晶片岩を主体とする龍門山脈が並走する。紀ノ川は、このふたつの山脈に挟まれた河谷を流れる河川となり、言い換えれば中央構造線に沿って流れる河川と言える（第２図）。

紀ノ川北岸の地勢を特徴付ける和泉山脈は、和歌山県側に急峻な断層崖を切り立たせ、この断層崖下には段丘（高位段丘）が形成されている。また和泉山脈から流下して紀ノ川に流れ入る小河川は、この断層崖及び段丘を浸食しその河口に扇状地（下位段丘）を発達させている。

田屋遺跡は、紀ノ川河口から約９㎞遡った紀ノ川北岸の沖積平野に立地する。この沖積平野は、紀ノ川が南へ蛇行した結果、和泉山脈との間に形成された南北幅約1.0～2.0kmを測るもので、その北側には

扇状地によって形成された下位段丘の段丘崖が東西走している。過去の発掘調査において、田屋遺跡が立地する沖積平野は、自然河川が入り組んだ氾濫原や湿地の中に微高地が散在する景観であったと考えられており、この微高地上に多くの遺跡が形成されている。

第2節　歴史的環境

田屋遺跡の周辺に所在する多くの遺跡の立地は、前節において述べたように東西走する和泉山脈に沿うように形成された沖積平野上部及び段丘上部、また和泉山脈から派生する丘陵上部に大きく分けることができる。よって、当然のことながら遺跡分布図をみると東西方向に帯状に分布しているように見える（第2図）。しかしながら、地形や地勢は、遺跡の立地を大きく左右する要素ではあるものの、最大の占地基準は集落及び社寺、古墳など形成される遺跡の性格と考える。よって、以下では遺跡の立地を加味しながらも各時代別に主要な遺跡を種別ごとに概観する。

縄文時代の集落遺跡としては、後期から晩期のものが確認されおり、平野部に立地するものとして川辺遺跡（25）があり、丘陵及び段丘上部に立地するものとして高井遺跡（8）や六十谷遺跡（10）がある。川辺遺跡では、遺跡の東部から中央部において縄文時代後期から晩期中葉の竪穴建物や土器棺墓の他、土坑などが検出されており、多数の土器及び石器が出土している。また標高約14.0mを測る段丘上部に立地する六十谷遺跡では、その西端を南流する千手川の堤防から縄文時代晩期の土器や石棒の頭部が出土した他、同じく段丘上部に立地する高井遺跡では縄文時代のものとみられる凹基式打製石鏃が出土している。

次に弥生時代の集落遺跡としては、前期の集落はきわめて少なく、六十谷遺跡において土器や石器が表採されている他、川辺遺跡において土坑が確認されているのみである。しかしながら中期以降では、山口遺跡（23）、川辺遺跡、宇田森遺跡（4）、北田井遺跡（3）、西田井遺跡（2）、田屋遺跡（1）など平野部の微高地上部に集落遺跡が増加し、この頃に沖積平野が可耕地として開発され始めたものと考えられる。また丘陵上部には、後期に出現する集落遺跡である橘谷Ⅰ遺跡（19）や後期後葉以降では府中Ⅳ遺跡（6）が立地している。

これらのうち川辺遺跡では、楕円形を呈する炉の長軸両端部にピットをもつことを特徴とする中期の竪穴建物（松菊里型）が2棟検出されている。また宇田森遺跡から出土した土器は、和歌山平野における中期の指標土器である。後期後葉の集落としては北田井遺跡や西田井遺跡及び田屋遺跡においてベッド状遺構や貯蔵穴を伴う竪穴建物の他、掘立柱建物、溝、土坑墓や土器棺墓など多種多様な遺構が検出されている。その他、中期後葉から後期前葉にかけては平野部における集落が縮小するのに対し、標高約90mを測る丘陵上部には高地性集落とみられる橘谷Ⅰ遺跡が形成されている。この遺跡では4条の空濠と竪穴建物が検出されており、近接地から銅鐸が出土している。その後、後期後葉では同じく標高約20mを測る丘陵上部に立地する府中Ⅳ遺跡おいて竪穴建物が3棟検出されている。遺物では、紀ノ川の中州（36）から突線紐式袈裟襷文銅鐸が出土している。

古墳時代の集落遺跡は、初頭から前期のものとして半独立丘陵的な高台上部に立地する府中Ⅳ遺跡や高井遺跡がある。府中Ⅳ遺跡では古墳時代前期初頭から前葉の竪穴建物が約14棟検出されており、そのなかで一辺8.6mを測る大型建物は集落の中心的施設として集落構造を知る上で重要な建物である。その他、高井遺跡では前期後葉と中期後葉の2棟の竪穴建物が検出されており、前期の建物はベッド状遺

構をもつものである。中期以降の集落については、平野部において弥生時代後期後葉以降の集落域と重複するものが多く、田屋遺跡をはじめ西田井遺跡などにおいて造り付けカマドをもつ一辺５ｍ前後の竪穴建物が多数検出されている。これらの田屋遺跡や西田井遺跡では古墳時代中期以降に集落の盛行期をむかえる。

古墳時代の集落に居住した人々の墓域としての古墳は、和泉山脈から南に派生する丘陵上部に営まれたとみられ、上野古墳群（20）、八王子山古墳群（18）、直川八幡山古墳群（17）、北山古墳群（16）などがある。そのうち、八王子山古墳群は前方後円墳３基、円墳17基からなる古墳群である。このうち８号墳は直径35ｍの円墳で、鋸歯文鏡、鉄剣、鉄槍、鉄鎌、琴柱型石製品、玉類などが出土しており５世紀前半の築造と考えられる。また平野部にある古墳としては、北田井遺跡において人物埴輪などが出土した埋没古墳が確認されている。

飛鳥時代以降のものでは、紀ノ川北岸の段丘上部を東西走する推定古代南海道の沿線に寺院及び集落が営まれている。そのうち寺院では上野廃寺（21）及び直川廃寺（９）があり、奈良時代に建立された上野廃寺は東西両塔を備えた薬師寺式の伽藍配置である。また府中遺跡（５）は、現在も「府中」とい

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	**田屋遺跡**	**弥生～古墳**	10	六十谷遺跡	縄文～弥生	19	橘谷Ⅰ遺跡	弥生	28	花山古墳群	古墳
2	西田井遺跡	弥生～中世	11	川口遺跡	弥生～古墳	20	上野古墳群	古墳	29	音浦遺跡	古墳
3	北田井遺跡	弥生～古墳	12	西辻遺跡	弥生～古墳	21	上野廃寺跡	白鳳	30	鳴神Ⅳ遺跡	弥生～江戸
4	宇田森遺跡	弥生	13	有功古墳	古墳	22	上黒谷遺跡		31	太田城水攻め堤跡	戦国～江戸
5	府中遺跡	奈良～平安	14	大同寺墳墓	奈良	23	山口遺跡	弥生～平安	32	太田・黒田遺跡	弥生～奈良
6	府中Ⅳ遺跡	弥生～古墳	15	大同寺古墳	古墳	24	山口御殿跡	江戸	33	太田城跡	安土桃山
7	鳥井遺跡		16	北山古墳群	古墳	25	川辺遺跡	縄文～中世	34	友田町遺跡	弥生～平安
8	高井遺跡	縄文～鎌倉	17	直川八幡山古墳群	古墳	26	井ノ口遺跡	古墳～中世	35	有本銅鐸出土地	弥生
9	直川廃寺跡	奈良～平安	18	八王子山古墳群	古墳	27	岩橋遺跡		36	紀ノ川銅鐸出土地	弥生

第２図　田屋遺跡周辺の遺跡分布図

う地名が残るなど紀伊国府跡と推定されており、奈良時代から平安時代のものとみられる菱形叩目文を有する平瓦などが出土している。集落遺跡としては、高井遺跡において平安時代の掘立柱建物が検出された他、緑釉陶器や灰釉陶器、圏脚円面硯などが出土している。また六十谷遺跡では、平安時代から鎌倉時代にかけての屋敷地を区画したと考えられる溝から緑釉陶器や中国製白磁碗が出土している。鎌倉時代以降では、高井遺跡において掘立柱建物や北宋銭15枚が副葬された土葬墓が検出されている。平野部の遺跡では、西田井遺跡において平安時代から鎌倉時代のものとみられる掘立柱建物の他、掘立柱建物群や井戸、池泉などが「コ」の字形の溝によって区画された内部に配される室町時代の屋敷地が検出されている。さらに鳥井遺跡（７）では鎌倉時代から平安時代前期の溝及び土坑の他、中国製白磁碗などが出土している。

最後に江戸時代では、山口御殿跡（24）がある。山口御殿は、『紀伊国名所図絵』にも記載がある紀州徳川家の別邸であり、平成10年に行われた調査によって土塀基礎や礎石建物が検出されている。

第３節　既往の調査

田屋遺跡は、和歌山市田屋及び小豆島地区に広がる遺跡である。遺跡範囲の東部には、西田井遺跡が隣接し、また南東部には小豆島西遺跡が位置し、その大部分を範囲内に含むものである（第３図）。

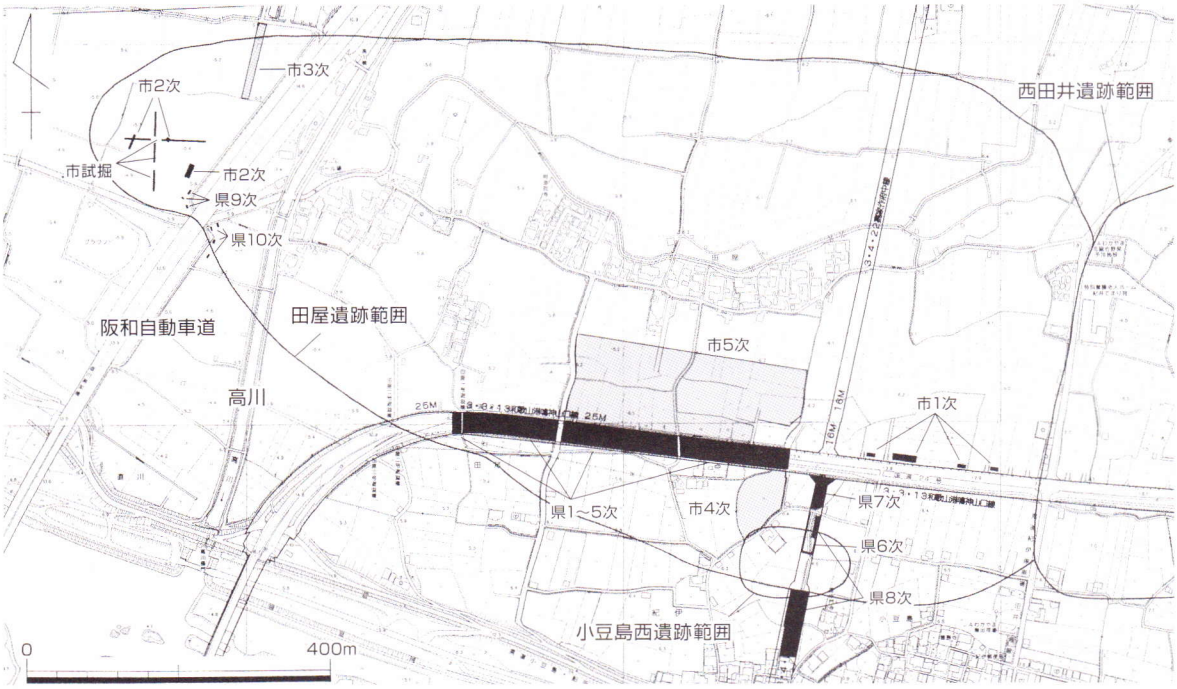
田屋遺跡及び小豆島西遺跡範囲内における過去の調査には、和歌山県関係のものと和歌山市関係のものがある（表１）。県関係の調査のうち、一般国道24号（和歌山バイパス）建設工事に伴う発掘調査（県１～５次）、県道紀伊停車場田井ノ瀬線改良工事に伴う発掘調査（県７・８次）及び、それに先立って行われた道路擁壁工事に伴う発掘調査（県６次）の成果については、財団法人和歌山市文化体育振興事業団が2009年に刊行した『田屋遺跡発掘調査概報』に詳述されている。よってここでは、市関係の市１～５次の調査成果についてその概略を記すとともに、県関係の調査成果については略記する。また県９・10次（確認調査）では遺構が検出されず、遺物も土師器の細片であるためその成果については表１を参照されたい。

【市１次】

財団法人和歌山市文化体育振興事業団が行った大規模店舗建設に伴う発掘調査である。調査は、開発範囲のうち浄化槽設置部分等を対象とし、東側から調査区を４カ所（第１～４区）設定し行われた。調査面積は、合計368.4㎡である。遺構は、第１・２区において古墳時代のものと考えられる水田遺構と畦畔を検出し、第３区では同じく古墳時代の水田遺構を２カ所、それに伴う畦畔の他、溝８条を検出している。また第４区では、古墳時代前期から後期にかけての溝などを検出している。遺物では、特徴的なものとして河内産（生駒西麓産）の土師器がある。

【市２次】

財団法人和歌山市都市整備公社が行った公共施設建設に伴う発掘調査である。調査は、調査対象地のうち浄化槽設置部分及び擁壁設置部分を対象とし、東側から調査区を３カ所（第１～３区）設定し行われた（第４図）。そのうち第１区西壁に沿う東西幅1.0m、南北長21.0mは和歌山市教育委員会による確認調査区である。調査面積は合計201.25㎡である。遺構は、第１区において古墳時代前期の溝１条や土坑、中期の掘立柱建物１棟、後期に埋没した溝２条の他、平安時代前期に埋没した大溝１条などを検出し、第３区では古墳時代のものとみられる溝５条や土坑１基、平安時代前期の溝１条などが検出されて



第３図　田屋遺跡における既往の調査位置図

表１　田屋遺跡における既往の調査一覧表

	遺跡名	調査名（次数）	調査種別	調査期間	面積(㎡)	調査主体	調査成果		文献番号
							主な遺構	主な遺物	
市1次	田屋遺跡	第1次	本発掘	2004.04.15 2004.06.09	368.4	(財)和歌山市文化体育振興事業団	古墳時代の水田・灌漑用水路	縄文土器・土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・国産陶磁器・石器	1
市2次	田屋遺跡	第2次	本発掘	2009.02.21 2009.06.10	201.25	(財)和歌山市都市整備公社	古墳時代前期の溝、中期の掘立柱建物・後期の溝、平安時代前期の大溝	土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・土製品・石器・金属器・銭貨	2
市3次	田屋遺跡	第3次	確認	2009.11.19 2009.12.22	100	(財)和歌山市都市整備公社	古墳時代前期の竪穴建物・溝・土坑	弥生土器・土師器・須恵器・製塩土器・瓦器・石器	3
市4次	田屋遺跡	第4次	確認	2010.06.21 2010.06.24	36.36	和歌山市教育委員会	遺構なし	中世土師器	4
市5次	田屋遺跡	第5次	確認	2010.10.18 2010.11.30	260	(財)和歌山市都市整備公社	古墳時代とみられる溝・土坑・ピット、自然流路	弥生土器・土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・国産陶磁器・石器	5
県1～5次	田屋遺跡	第1～5次	本発掘	1982.01～ 1986	13,440	(社)和歌山県文化財研究会	縄文時代の土坑、弥生時代後期から古墳時代後期の竪穴建物60棟・溝・土坑、自然流路	弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・国産陶磁器・輸入陶磁器・石器・石製品・土製品・木製品	6
県6次	田屋遺跡・小豆島西遺跡		本発掘	2002.02 2002.03	419.5	和歌山県教育委員会	古墳時代の竪穴建物状遺構、古代から中世の溝		7
県7次	田屋遺跡	第1次	本発掘	2001.09.19 2001.11.20	942	(財)和歌山県文化財センター	古墳時代の竪穴建物・溝、奈良・平安時代の溝・流路、中世の畦畔状遺構	土師器・須恵器・瓦器・土錘	7
県8次	田屋遺跡・小豆島西遺跡	第2次	本発掘	2002.09.24 2003.01.29	1,818	(財)和歌山県文化財センター	中世の礎石建物・井戸・区画溝・石垣状遺構	陶磁器・瓦・石造物	7
県9次	田屋遺跡	第1次	確認	2007.12.10 2007.12.11	22.4 (1～3トレンチ)	和歌山県教育委員会	遺構なし	土師器	8
県10次	田屋遺跡	第2次	確認	2008.10.06 2008.10.09	33 (4～7トレンチ)	和歌山県教育委員会	遺構なし	土師器(中世)	9
市試掘		直川地区	試掘	2005.01.31 2005.02.25	374.6 (1-1～5区)	(財)和歌山市文化体育振興事業団	奈良時代野溝、平安時代の溝・土坑	土師器・須恵器・黒色土器・国産陶磁器・瓦・石製品	10

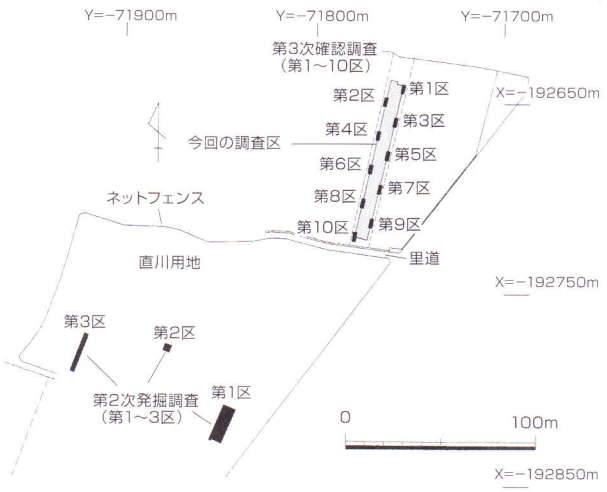
参考文献

1『田屋遺跡発掘調査概報』（財）和歌山市文化体育振興事業団　2005
2『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報－平成20年度（2008年度）－』（財）和歌山市都市整備公社　2011
3『和歌山市内遺跡発掘調査概報－平成21年度－』和歌山市教育委員会　2011
4『和歌山市内遺跡発掘調査概報－平成22年度－』和歌山市教育委員会　2012
5『和歌山市内遺跡発掘調査概報－平成22年度－』和歌山市教育委員会　2012
6『田屋遺跡発掘調査報告書－一般国道24号（和歌山バイパス）建設工事に伴う発掘調査報告書－』（財）和歌山県文化財センター　1990
7『田屋・小豆島遺跡発掘調査報告書－県道紀伊停車場田井ノ瀬線改良工事に伴う発掘調査－』（財）和歌山県文化財センター　2005
8『和歌山県埋蔵文化財調査年報－平成19年度－』和歌山県教育委員会　2009
9『和歌山県埋蔵文化財調査年報－平成20年度－』和歌山県教育委員会　2010
10『和歌山市内遺跡発掘調査概報－平成16年度－』和歌山市教育委員会　2006

いる。その他、第２区では遺構が検出されていない。遺物では、河内産（生駒西麓産）の土師器が出土している。

【市３次】

財団法人和歌山市都市整備公社が行った直川用地公共的施設区画道路の整備に伴う確認調査である。調査は、道路計画範囲内に２ｍ×５ｍの調査区を10カ所設定し行ったもので、今回の調査（第６次発掘調査）に伴う事前の確認調査である。調査区は北側から第１～10区とし、調査面積は100㎡である。遺構は、各調査区において古墳時代前期のものとみられる竪穴建物及び溝、土坑、ピットを多数検出している。また調査対象地北半部において、大規模な落ち込みとその上部に堆積した古墳時代前期以降の遺物を一定量含む遺物包含層を検出している。



第４図　調査地周辺における既往の調査位置図

【市４次】

和歌山市教育委員会が行った集合住宅建設に伴う確認調査である。調査は開発範囲内において５カ所の調査区を設定し行ったもので、調査面積は36.36㎡である。この調査は、県１～５次及び県６・７次において検出されている弥生時代後期後葉から平安時代にかけての遺構群の南及び西側への広がりを確認する目的で行われた。調査の結果、中世土師器を含む希薄な包含層を検出したものの遺構は確認されなかった。

【市５次】

財団法人和歌山市都市整備公社が行った大規模店舗建設に伴う確認調査である。調査は調査対象地内において26カ所の調査区を設定し行ったもので、調査面積は合計260㎡である。この調査は、県１～５次において検出された弥生時代後期後葉から平安時代にかけての遺構群の北側への広がりを確認する目的で行われたものである。調査の結果、各調査区において古墳時代中期から後期にかけての溝、土坑、ピットの他、県１～５次において検出された自然流路などを確認し、遺構群が北側に展開することが明らかとなった。

【県１～５次】

社団法人和歌山県文化財研究会が行った調査である。遺構は縄文時代晩期後葉の土坑、弥生時代後期後半の竪穴建物３棟、古墳時代初頭の竪穴建物８棟、古墳時代中期から後期の竪穴建物43棟の他、古墳時代以降の掘立柱建物20棟、自然流路などが検出されている。

【県６次】

和歌山県教育委員会が行った道路擁壁工事に先立つ調査である。調査面積は419.5㎡である。遺構は、古墳時代の竪穴建物状遺構の他、古代から中世の溝を検出している。

【県７次】

財団法人和歌山県文化財センターが行った調査である。調査面積は942㎡である。遺構は、古墳時代前期の竪穴建物の他、奈良時代から平安時代にかけての溝、流路、中世の水田遺構と畦畔状遺構などを

検出している。

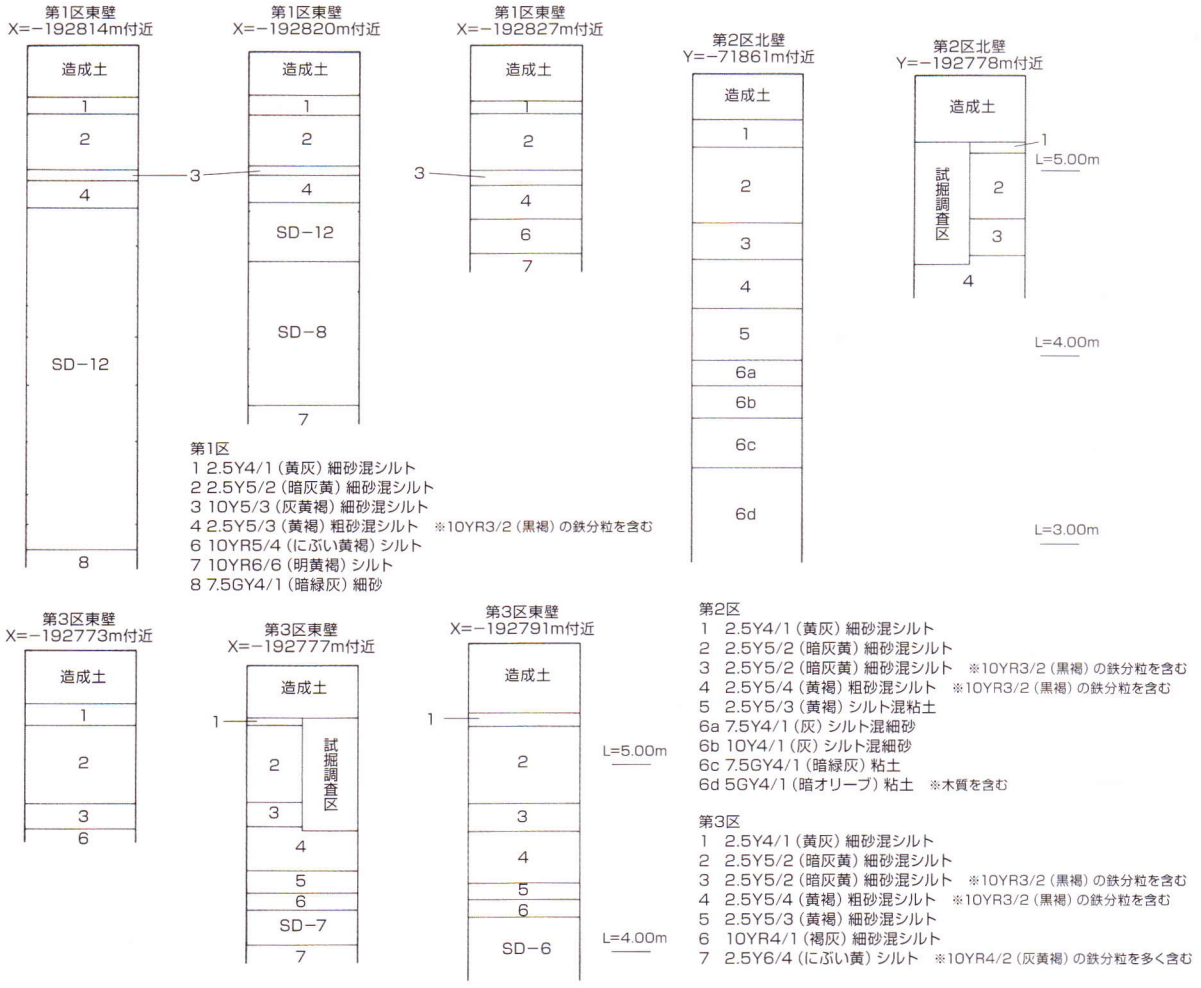
【県８次】

財団法人和歌山県文化財センターが行った調査である。調査面積は1,818㎡である。遺構は、古墳時代の方形の竪穴建物状遺構及び土坑、10世紀前半頃と見られる溝７条などの他、石造物や瓦などが出土したことから15世紀前半頃の寺院関連施設とみられる区画溝、礎石建物、井戸２基、石垣状遺構、また近世末頃のものとみられる溝10条以上、柱穴や土坑などを多数検出している。

以上、田屋遺跡における既往の調査成果について、概略を述べてきた。これらの調査のうち、遺構検出面の標高や検出遺構、出土遺物など今回の調査と密接に関連するものとして、市関係の調査である市２次（第２次発掘調査）の調査成果がある。よって、以下にその概要を記述する。

【和歌山市関係・第２次発掘調査成果】（第５～11図、図版18・19）

調査地における基本層序については、包含される遺物の時期及び土質から大きく１～８層に細分した（第５図）。まず現表土として調査地全面に30～40cmの厚さで造成土が堆積しており、この造成土を除去した下面が現代の耕作土（第１層）である。第２層は、層序から江戸時代の耕作土と考えられるもので、鉄分の沈着面によって６単位に細分が可能である。第３層は、江戸時代から室町時代にかけての耕



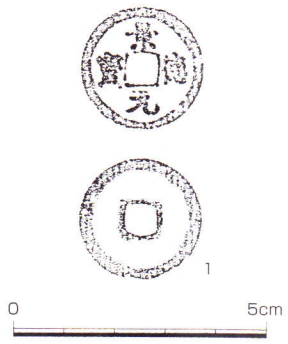
第５図　第２次調査　調査地土層柱状模式図

作土とみられるもので、黒褐色の鉄分粒を含む暗灰黄色の粗砂混シルトである。この第３層も鉄分の沈着面によって２～３単位に細分が可能である。第１区では、この第３層が灰黄褐色の細砂混シルトとなる。第４層は、鎌倉時代の耕作土とみられるもので、鉄分の沈着面によって１～３単位に細分が可能である。第５層は、平安時代の遺物を含む黄褐色の細砂混シルトであり、第１区では認められず第２区では粘質土となる。この第５層も鉄分の沈着面によって１～２単位に細分が可能である。第６層は、各調査区によって様相が異なり第１区ではにぶい黄褐色のシルトであり、第３区では平安時代前期の遺物包含層とみられる褐灰色の細砂混シルトとなる。また第２区では、灰色から暗オリーブ色系のシルト混細砂及び粘土が４単位（第６ａ～６ｄ層）堆積している。このうち第６ａ～６ｃ層には土師器の細片が含まれており、第６ｄ層には木質が含まれる。この第６層上面においては、第３区で平安時代の溝１条を検出した。第３区における第６層上面の標高は、調査区北端部で約4.7m、同じく南端部で約4.3mを測り北から南に向かって低く傾斜する。

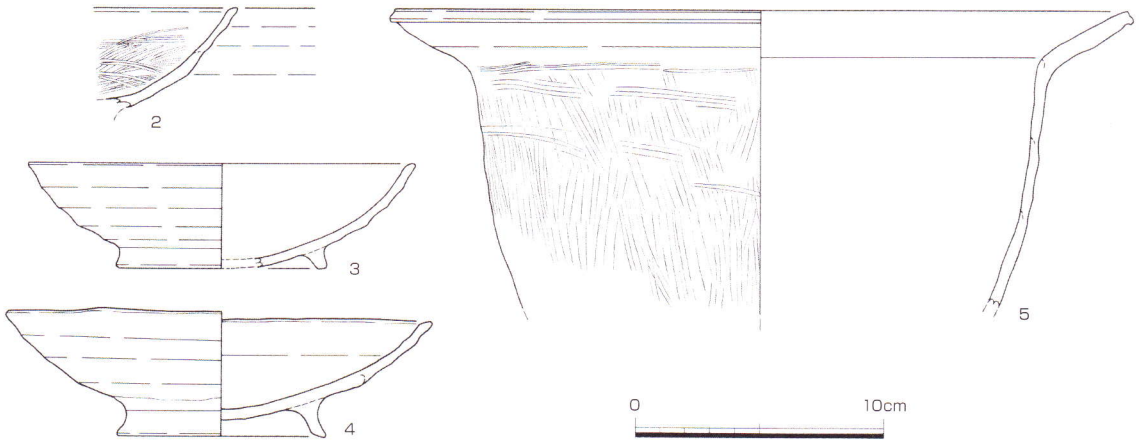
次に第７層は、第１区では明黄褐色のシルトであり、第３区ではにぶい黄色のシルトとなる。また第２区では確認することができなかった。この第７層上面は、第１・３区において古墳時代前期から平安時代前期の遺構を検出した遺構面出面である。遺構検出面の標高は第１区で約4.8m、第３区で約4.2mを測る。よって、第７層上面は調査地の東から西に向かって低く傾斜すると考えられる。さらに第８層は、第１区東壁面において確認した暗緑灰色の細砂である。これらの第７・８層は、遺物を含まない無遺物層である。

第１～６層から出土した遺物のうち、注目されるものとしては第３区第４層から北宋銭の『景徳元寶』（1004～1007）が１枚出土している（第６図１）。また同じく第３区の第６層から出土した遺物として、平安時代前期から中期のものとみられる土師器がある（第７図２～５）。２～４は轆轤を利用した回転によるヨコ方向のナデを施す杯であり、高台を有する。また２は内面の調整にヘラミガキが施されている。５は甕であり、体部外面に粗いハケが施されている。

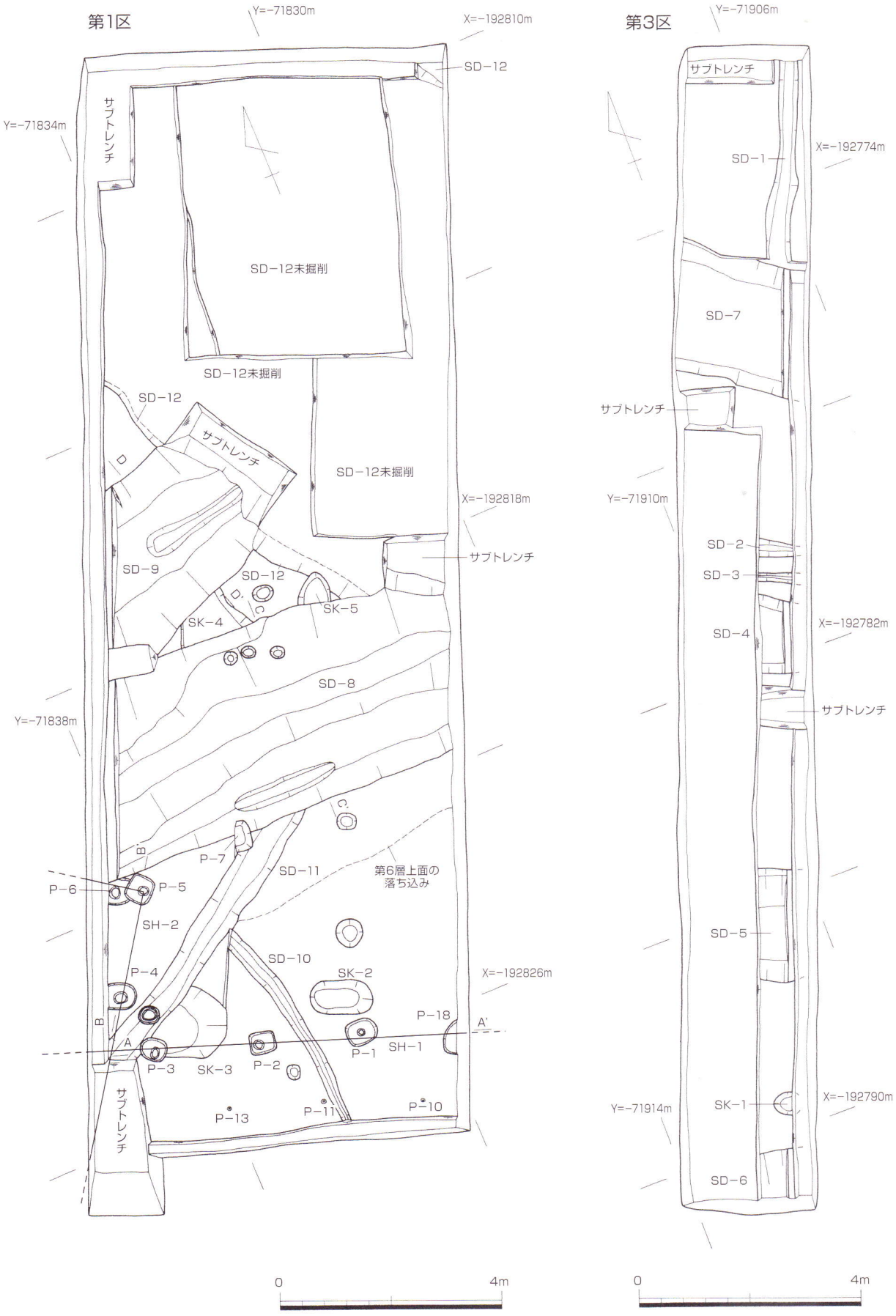
遺構は、第１・３区第７層上面及び第３区第６層上面において検出した。



第６図　遺物実測図１



第７図　遺物実測図２



第8図　第2次調査　第1・3区遺構全体平面図

第７層上面では、古墳時代前期から平安時代前期にかけての掘立柱建物や土坑及び溝などを検出し、第６層上面では平安時代の溝を検出した。また第２区は、各堆積土の状況から判断して第５層以下は、低湿地内部（微低地）に位置するものとみられ遺構を確認することができなかった。

[第１区検出の遺構]（第８図）

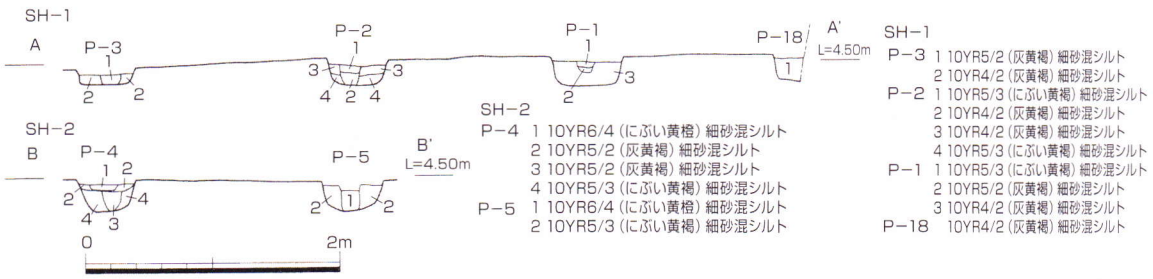
第１区では、第７層上面において古墳時代前期のものとみられる溝（SD－11）及び土坑（SK－３・４）、古墳時代中期の掘立柱建物とみられる（SH－１・２）、古墳時代後期に埋没した溝（SD－８・９）の他、平安時代前期に埋没した大溝（SD－12）及び、遺構の重複関係から奈良時代から平安時代のものとみられるピット（Ｐ－７）などを検出した。遺構検出面の標高は、調査区北端部において4.8mを測り、調査区南端部では4.5mを測ることから北から南に向かって低くなる。以下、古い時期のものから主な遺構及び遺物について説明する。

[SD－11]

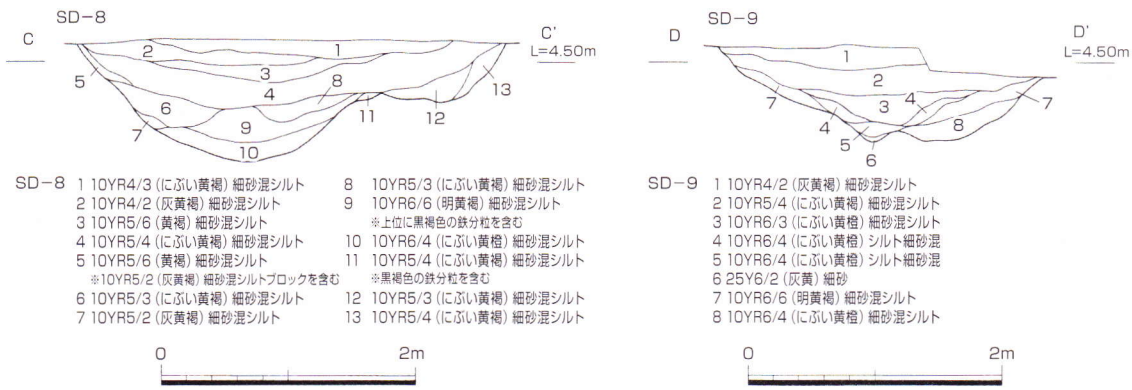
SD－11は調査区の南端部において検出したN－59°－Eの方向性をもつ溝であり、検出長5.6m、幅45～65cm、深さ25cm前後を測る。また遺構底面の標高は北端部で4.3m、南端部で4.2mを測り、北から南へと低く傾斜する。遺構覆土は黒褐色の粗砂混シルトの単一層である。

[SH－１・２]（第９図）

SH－１・２は調査区の南端部において検出した堀立柱建物である。そのうちSH－１は、P－18・P－１～３で構成される建物であり、北側柱列を検出した。柱間の間尺は約1.9mを測る。またその方向性は、W－19°－Nである。SH－２はP－４・５で構成される掘立柱建物で、東側柱列を検出した。柱間の間



第９図　第２次調査　ＳＨ－１・２土層断面図



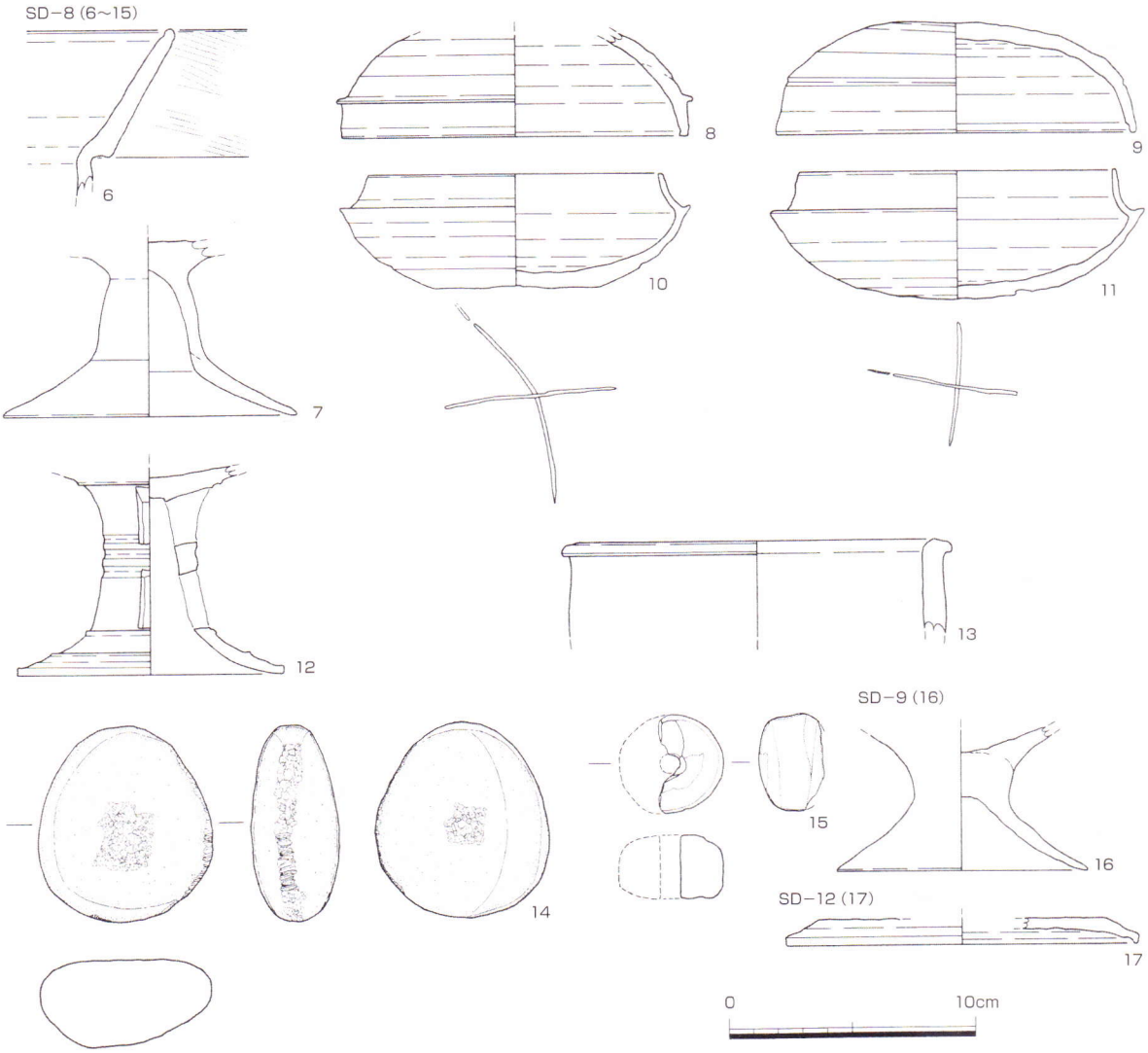
第10図　第２次調査　ＳＤ－８・９土層断面図

尺は約1.9mである。またその方向性は、N－35°－Eである。SH－１・２の周辺にはP－６・14などがあり、これらの建物以外にも複数の掘立柱建物が存在した可能性が考えられる。さらに、SH－１・２はその方向性の違い及び、両者の間隔が近接することなどから、同時期に存在した可能性は低いと考えられる。

［SD－８］（第10・11図、図版18・19）

SD－８は調査区の中央部においてほぼ東西方向に検出した溝であり、検出長7.5m、幅約3.5m、深さ約95mを測る。遺構底面の標高は東端部で3.7m、西端部で3.6mを測り、東から西へと低く傾斜する。この溝は、土層堆積状況及び横断面の形状から少なくとも３回の再掘削が行われたと考えられるもので、第１～５層（新段階）、第６～11層（中段階）、第12・13層（古段階）の３単位を確認できる。層序から判断して、第１～５層の堆積時期がこの溝の最終段階及び埋没時期を示すと考えられる。ただし、中・古段階の前後関係は時期判別できる遺物が出土していないため明らかではない。

このSD－８から出土した遺物には、土師器（第11図６・７）、須恵器（８～12）、搬入土器（13）、砂



第11図　遺物実測図３

岩製叩石（14）、土製紡錘車（15）などがある。このうち、6は複合口縁の壺または甕の口縁部とみられるものであり、7は古墳時代中期前葉の高杯脚部である。また8は初期須恵器とみられる杯蓋、9～11は古墳時代後期（TK－10型式）のもので、9は杯蓋、10・11は底部に「×」印のヘラ記号をもつ杯身である。さらに12は古墳時代中期中葉の長方形二段透かしをもつ高杯脚部である。その他、13は朝鮮半島に系譜をもつと考えられる無頸の鉢である。これらの遺物のうち、SD－8の埋没時期を示す遺物としては、須恵器杯蓋（9）及び杯身（10・11）がある。

［SD－9］（第10・11図、図版19）

SD－9は、SD－8の北側において検出した溝であり、検出長3.6m以上、幅2.5～2.8m、深さ約75cmを測る。この溝は、土層堆積状況及び横断面の形状から少なくとも2回の再掘削が行われたと考えられるもので、第1～6層（新段階）、第7～8層（古段階）の2単位を確認できる。層序から判断して、第1～6層の堆積時期がこの溝の最終段階及び埋没時期を示すものと考えられる。古段階の時期については時期判別できる遺物が出土していないため明らかではい。このSD－9から出土した遺物としては低脚の高杯または杯と考えられる土師器（第11図16）などがある。遺構の埋没時期は、出土遺物から古墳時代後期と考えられる。

［SD－12］（第11図、図版19）

SD－12は調査区の北半部においてほぼ南北方向に検出した大溝であり、N－24°－Wの方向性をもつ西側肩部を検出したものの、東側肩部は調査区北東隅部において立ち上がり部を検出したのみである。よって、その規模は幅約9.0mを測り、深さは1.8m以上である。遺構覆土は13単位に細分が可能であり、上位にはにぶい黄褐色系の細砂混シルトが堆積し、中位には灰黄褐色系の細砂痕シルト、また下位には灰オリーブ色から黄灰色系の細砂痕シルトが堆積している。このSD－12から出土した遺物としては、須恵器杯蓋（第11図17）の他、黒色土器A類椀、底部に糸切り痕を残す土師器皿、平瓦などがあり、平安時代前期から中期にかけて埋没したものと考えられる。

［第3区検出の遺構］（第8図）

第3区では、第7層上面において層序から古墳時代のものとみられる溝（SD－2～6）及び土坑（SK－1）、平安時代前期の溝（SD－7）を検出した。また第6層上面では、平安時代の溝（SD－1）を検出した。

［SD－7・1］

SD－7は調査区の北半部において検出した溝であり、幅3.2m、深さ約30cmを測る。遺構覆土は単一の褐灰色粗砂混シルトである。時期については平安時代前期のものと考えられる。

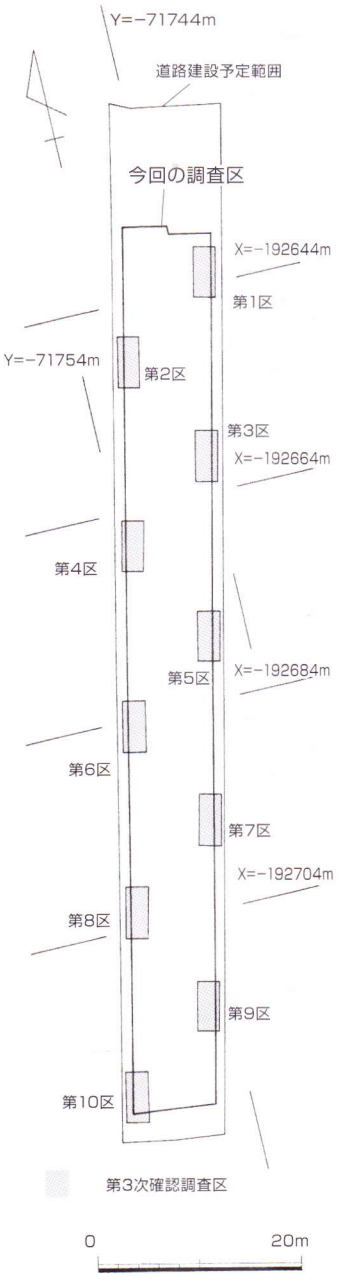
SD－1は調査区北端部において検出した溝であり、幅25～50cm、深さ約40cmを測り、その方向性はN－23°－Eである。遺構覆土は単一の黒褐色粗砂混シルトである。

以上、第2次発掘調査において検出された遺構及び遺物のうち主なものについて述べてきた。これらの遺構及び各遺物包含層から出土した遺物は収納コンテナに約6箱分であり、弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、中世土師器、肥前系磁器染付、瓦、土製品、石器、石製品、金属器、銭貨などがある。特筆するべき遺物としては、河内産（生駒西麓産）の土師器が数点出土している。

【和歌山市関係・第３次確認調査成果】

次に今回の調査における事前の調査として実施した第３次確認調査の成果として、調査地における基本層序及び、微低地とみられる古墳時代前期以降の遺物を一定量含む第６層上面の落ち込み（SX－１）の範囲などが明らかとされている。よって、ここで遺構検出面までの基本層序について述べる（第12・13図）。

調査地における基本層序は、包含される遺物の時期及び土質から大きく第１～６層に細分できる。第１層は黄灰色の細砂混シルトであり、現在の水田耕土である。第２層は暗灰黄色の粗砂混シルトであり、江戸時代から近代にかけての耕作土とみられるものである。この第２層は、上位にみられる明黄褐色の鉄分の沈着面によって４～６単位に細分が可能である。第１区では、この第２層の中間層上面から暗渠排水溝が掘削されている。第３層は黄灰色の細砂混シルトであり、室町時代から江戸時代にかけての耕作土とみられるものである。この第３層は、上位に黒褐色の鉄分粒の沈着面があり２～３単位に細分が可能である。第４層は黄褐色の粗砂混シルトであり、鎌倉時代の耕作土と考えられるものである。この第４層は、黒褐色の鉄分粒を含むことを特徴とし、その沈着面によって１～３単位に細分が可能である。第５層は黄灰色の細砂混粘土であり、平安時代の耕作土とみられるものである。この第５層についても鉄分粒の沈着面によって１～２単位に細分が可能である。



第12図　調査地区割図

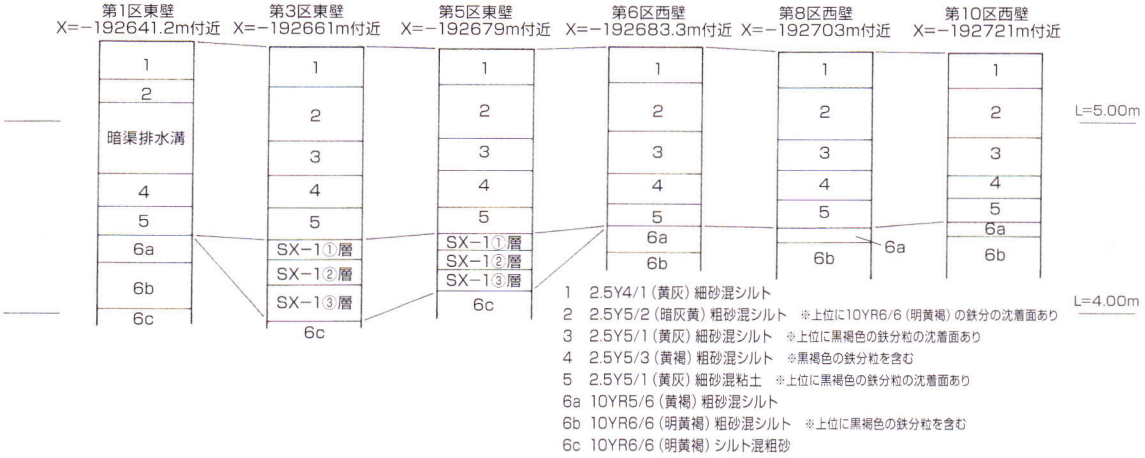
第３章　調査の方法と概要

第１節　調査の方法

今回の調査は、道路計画範囲内に南北長86.0m×東西幅8.5mの調査区を設けて行った。また調査の進展に伴い、調査区北端部において竪穴建物の壁溝と推定されるSD－１を検出し、その性格を確定させる目的で一部範囲拡張を行った。さらに、第３次確認調査区については重複部分の他、降雨により調査区壁面が崩落した箇所は拡張し、遺構検出及び掘削等調査を行った。よって調査面積は合計738.2㎡となる（第12図）。

重機による掘削は、第３次確認調査成果に基づき遺構検出面である明黄褐色のシルト（第６層）の直上層までとした（第13・14図）。また、遺構検出面までの遺物包含層及び検出した遺構の他、第３次確認調査において検出した古墳時代前期以降の遺物を一定量含む落ち込み（SX－１）、並びに下層調査のため調査区の東西及び南壁際に設定したサブトレンチの掘削は、人力によって行った。

平面図（１／20）及び土層断面図（１／20）による記録は、既存の３級基準点を使用し、調査区内に国土座標（世界測地系）の数値



第13図　第３次調査　調査地土層柱状模式図

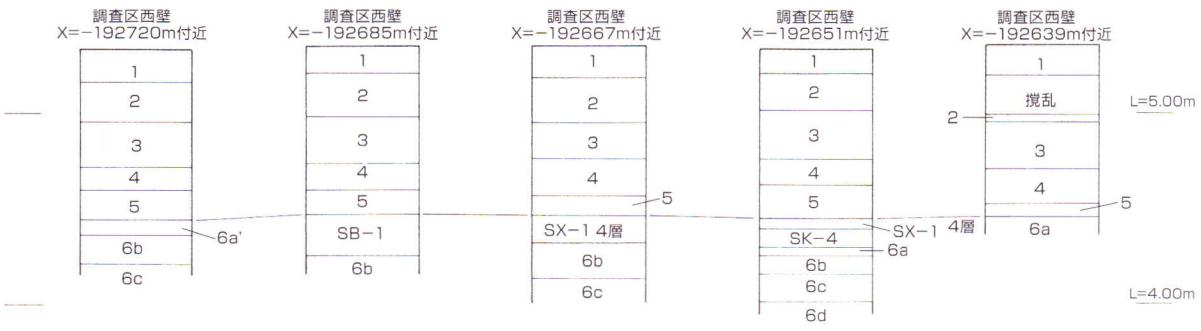
を付した基準杭を４m間隔に設置し行った。水準値は国家水準点（T．P．値）を基準とし、既存の３級水準点から水準点測量を行った。その他、溝や土坑のうち遺構覆土に２層以上の堆積が認められるものは、直交する位置に土層堆積状況を観察するためのセクションベルトを設定し、土層断面図（１／20）及び写真撮影による記録を行った。また遺物出土状態等良好な重要遺構については、遺物出土状況図（１／10）などの作成を行った。遺構覆土及び堆積土の色調及び土質の観察には、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を用いた。

第２節　調査の概要

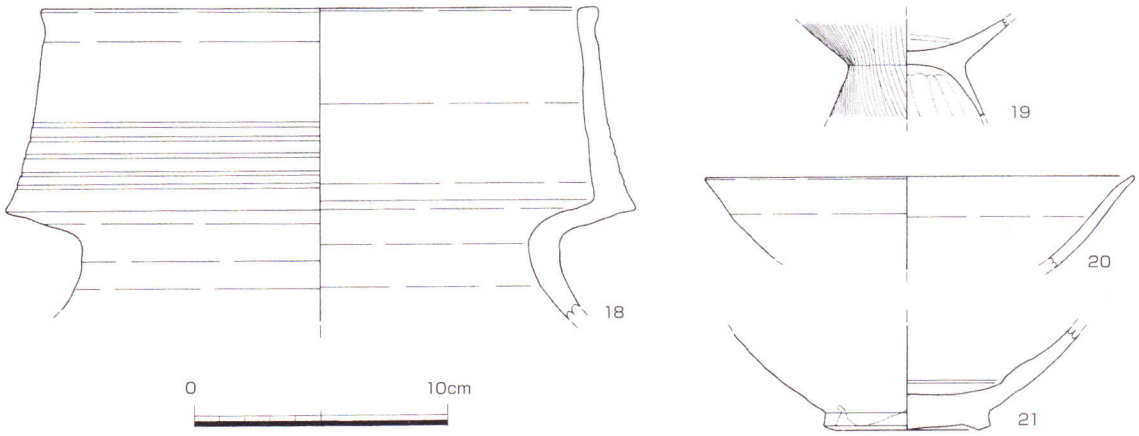
今回の調査地における基本層序は、遺構検出面である第６層上面までの様相を第３次確認調査成果として前章において詳述した。よって、ここでは主に遺構検出面である第６層上面以下の層序を述べる（第14図、図版17）。

調査地の現況は、水田である（図版１）。現水田面の標高は5.40m ～5.50mを測る。

まず第１層は現在の水田耕土である。第２層は江戸時代から近代にかけての耕作土とみられるものである。この第２層上面から、現代の耕作に伴う排水を目的とした塩化ビニールパイプ及び、その下層に



第14図　調査地土層柱状模式図



第15図　遺物実測図４

は調査地南部に位置する紀ノ川の取水口から調査地北端部の貯水槽への送水を目的とした鉄管が埋設されている状況を確認した（図版17）。この埋設溝は、調査地のほぼ中央を南北方向に貫き、溝底面は遺構検出面である第６層を削り、その上面から約20cm下に位置する。

次に第３層は、室町時代から江戸時代にかけての耕作土とみられるものであり、第４層は鎌倉時代の耕作土と考えられるものである。また第５層は平安時代の耕作土である。

この第５層から出土した遺物としては、土師器（第15図18～20）、輸入磁器（21）がある。18は西部瀬戸内系とみられる複合口縁の壺であり、19は東海産とみられる台付甕の脚台部である。また20は高杯の口縁部である。これらは古墳時代前期のものとみられる。その他、21は中国製白磁碗であり、平安時代後期のものである。

第６層以下の状況については、下層確認及び排水を目的としたサブトレンチの掘削によって確認したもので、当然のことながら、第３次確認調査において検出した各堆積層を今回の調査においても確認することができた。ただし、観察する場所によって若干色調及び土質が異なる。この第６層は、少なくとも４単位（第６a～６d層）確認することができ、その色調及び土質から判断して紀ノ川の沖積作用によって自然堆積したシルト質土と考えられる。まず第６a層は、黄褐色の粗砂混シルトであり、第６b層は上位に黒褐色の鉄分粒を含む明黄褐色からにぶい黄褐色の粗砂混シルトである。また第６c層は明黄褐色からにぶい黄褐色のシルト混粗砂であり、やや砂質が強くなる。さらに第６d層は、にぶい黄褐色のシルト混粗砂である。その他、今回の調査において調査区南端部において検出した第６a′層は、にぶい黄褐色の細砂混シルトであり、調査区全体でみられる第６a層と色調及び土質が異なることから、第６b層上面の落ち込み（微低地）に堆積した遺物包含層と考える（第14図）。

この第６層の上面は、古墳時代初頭から前期の竪穴建物や溝、土坑、ピットの他、古墳時代前期以降の遺物を一定量含む落ち込み（SX－1）を検出した遺構検出面である。遺構検出面の標高は、4.40m前後を測る。

第４章　調査の成果

今回の調査では、第３次確認調査において検出した遺構も含め、古墳時代初頭（庄内式併行期）から前期（布留式併行期）にかけての竪穴建物８棟（SI－５は壁溝のみ検出、規模等不明）の他、溝約50条及び土坑約19基、ピット約270基、落ち込み（SX－１）を検出した（第16図、図版１～３）。これらの遺構のうち、第３次確認調査において検出した遺構と重複するものについては、今回の調査によって遺構の種別及び規模などを変更したものもあり、この報告をもって正式報告とする。

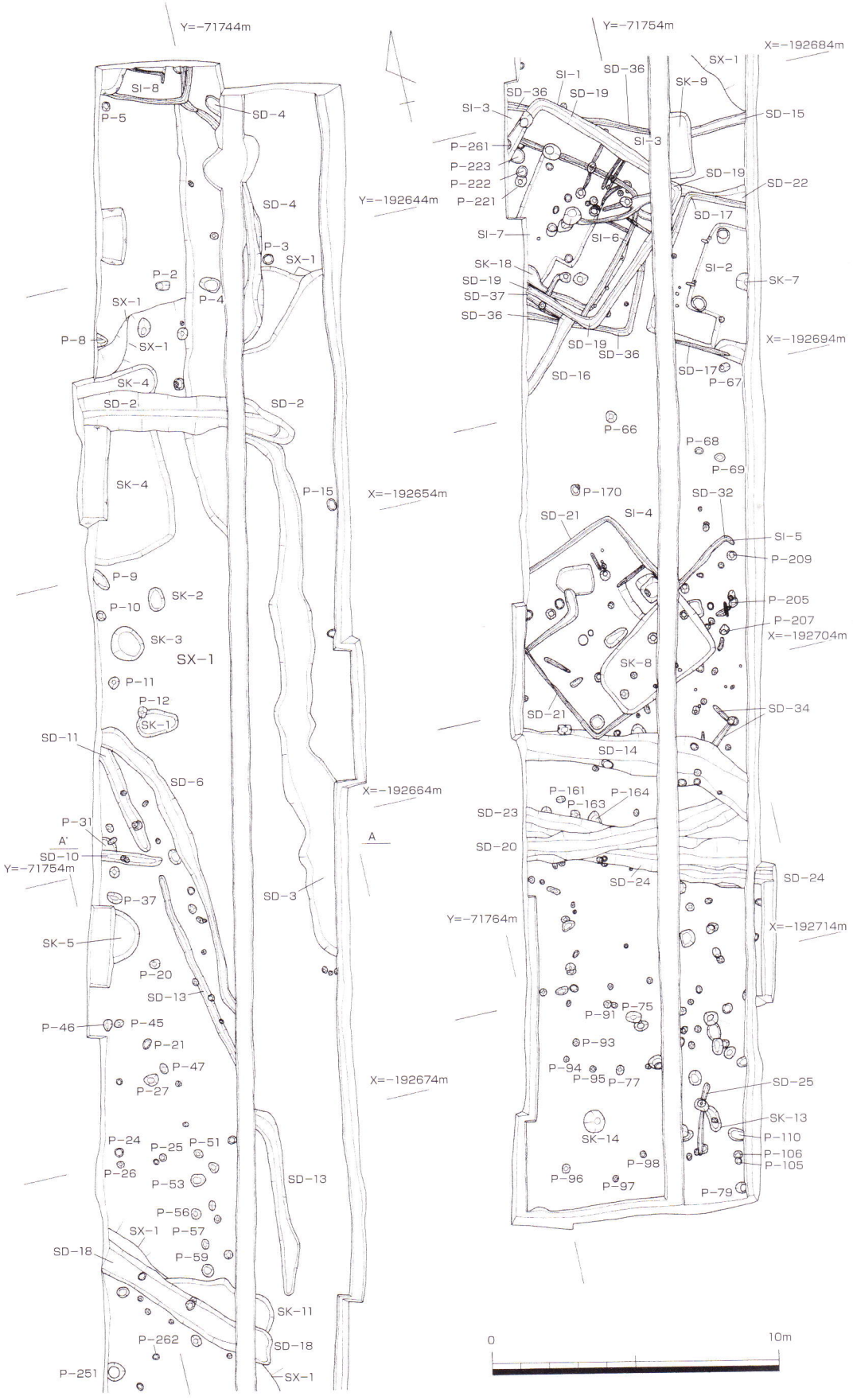
これらの遺構の検出面は、前章において述べた通り標高4.40m前後を測り北から南にほぼ水平となる。また、第３次確認調査において検出した古墳時代前期以降の遺物を一定量含む第６a層上面の落ち込み（SX－１）は、今回の調査区北半部においてその北肩及び南肩部を検出し、さらに調査区の東西に広がることが明らかとなった（図版３）。また調査区の南端部では、調査区西壁面の土層観察から第６a′層が南へ向かって厚く堆積している状況を確認し、この堆積層は第６b層上面が南に向かって低く傾斜する微低地上部に堆積した遺物包含層と判断した。よって、今回の調査地における遺構の分布傾向としては、調査区北半部のSX－１と調査区南端部の微低地部には主として溝及び土坑、ピットなどがみられ、これらを除く調査区北端部及び中央部南側の微高地部に竪穴建物などが展開していると言える。特徴的な傾向としては、溝の掘削位置として調査区北半部においてはSX－１の南北肩部の傾斜変換線に沿うようにSD－２やSD－18が掘削されている。さらにSX－１内部では西から東に低く傾斜する微低地の傾斜方向と直交するようにSD－３・６・11・13が掘削されており、これも傾斜変換線を意識しているものと考えられる。また調査区南端部では、第６a′層が堆積することから微低地と判断した第６b層上面が落ち込む傾斜変換線付近にSD－14・20・23・24が掘削されている。

遺物では、各遺構及び遺物包含層から遺物収納コンテナ約25箱分が出土した。内訳は、土師器、製塩土器、須恵器、黒色土器、瓦器、輸入磁器、国産陶磁器、瓦、土製品、石器、石製品、金属器、ガラス製品などがある。そのうち土師器には、西部瀬戸内・阿波系の他、東部瀬戸内・阿波・河内産の搬入土器がある。また製塩土器は、脚台Ⅲ式を中心として脚台片160点、体部片414点などが多量に出土し、今後注目すべき遺物と考える。

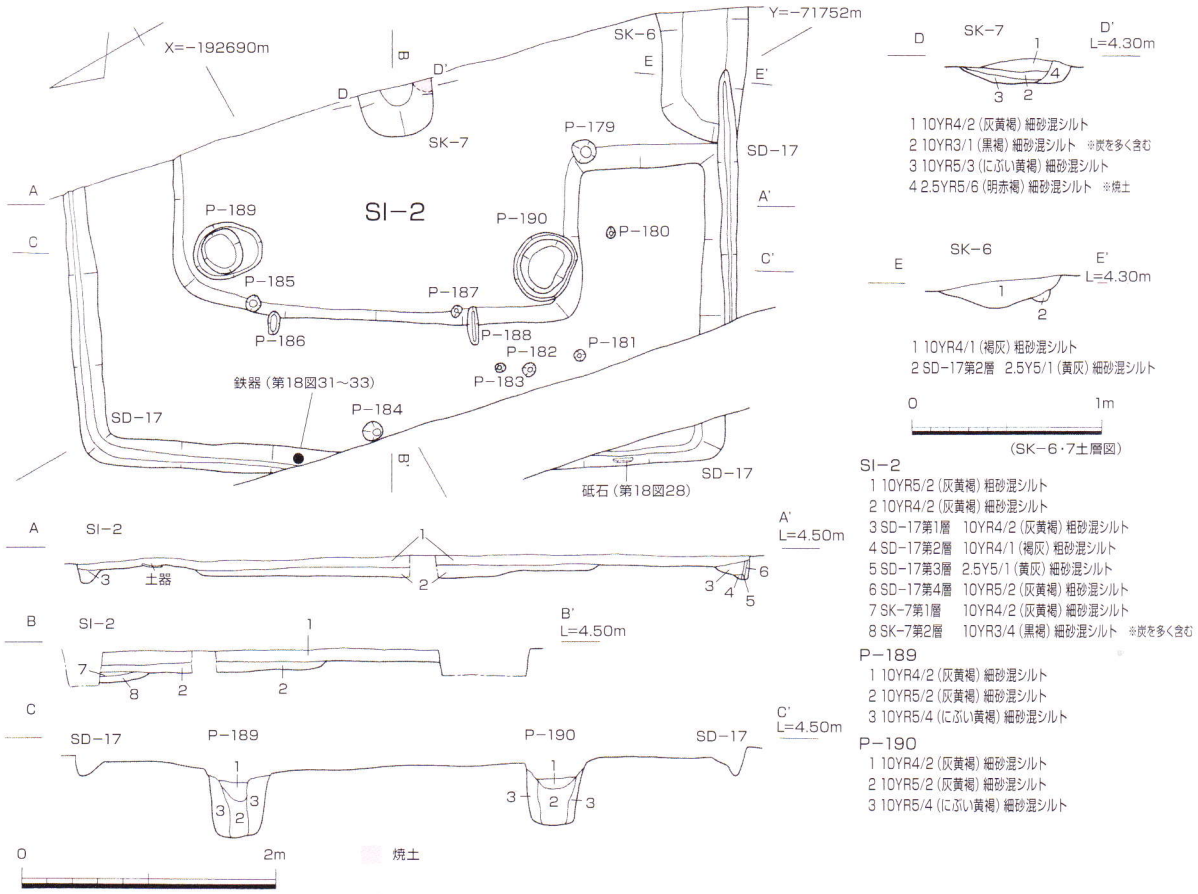
以下、今回の調査で検出した主な遺構及び遺物について、古い時期のものから説明する。

［SI－２］（第17・18図、図版４～６）

SI－２は、調査区の中央部東側において検出したもので、平面形が方形を呈する４本柱建物と考えられる。建物の東半部は調査区外となる。建物の規模は南北5.3m、東西3.5m以上を測る。遺構覆土は厚さ５～18cmを測り、２単位に細分できる。壁溝であるSD－17は、幅20～30cm、深さ10cm前後を測るものである。建物南側壁溝の土層堆積状況を観察したところ、建物南壁に接するように黄灰色の細砂混シルトが約２cm幅で直線的に立ち上がる状況を確認した（図版６）。これは、建物南壁際に立てられた板材の痕跡と考えられる。またこの建物は、北壁に沿って幅70cm、西及び南壁に沿って幅1.1m、高さ５～10cmのベッド状遺構がめぐるものである。このベッド状遺構は建物南辺において一部途切れる部分があり、この部分が建物内部への入り口と考えられる。この入口の開口方向は、S－28°－Wである。入り口部分の特徴としては、建物南側壁溝が建物内側に拡張され土坑状に掘り凹められていることである。



第16図　第６次調査　遺構全体平面図



SK−7
1 10YR4/2（灰黄褐）細砂混シルト
2 10YR3/1（黒褐）細砂混シルト ※炭を多く含む
3 10YR5/3（にぶい黄褐）細砂混シルト
4 2.5YR5/6（明赤褐）細砂混シルト ※焼土

SK−6
1 10YR4/1（褐灰）粗砂混シルト
2 SD−17第2層 2.5Y5/1（黄灰）細砂混シルト

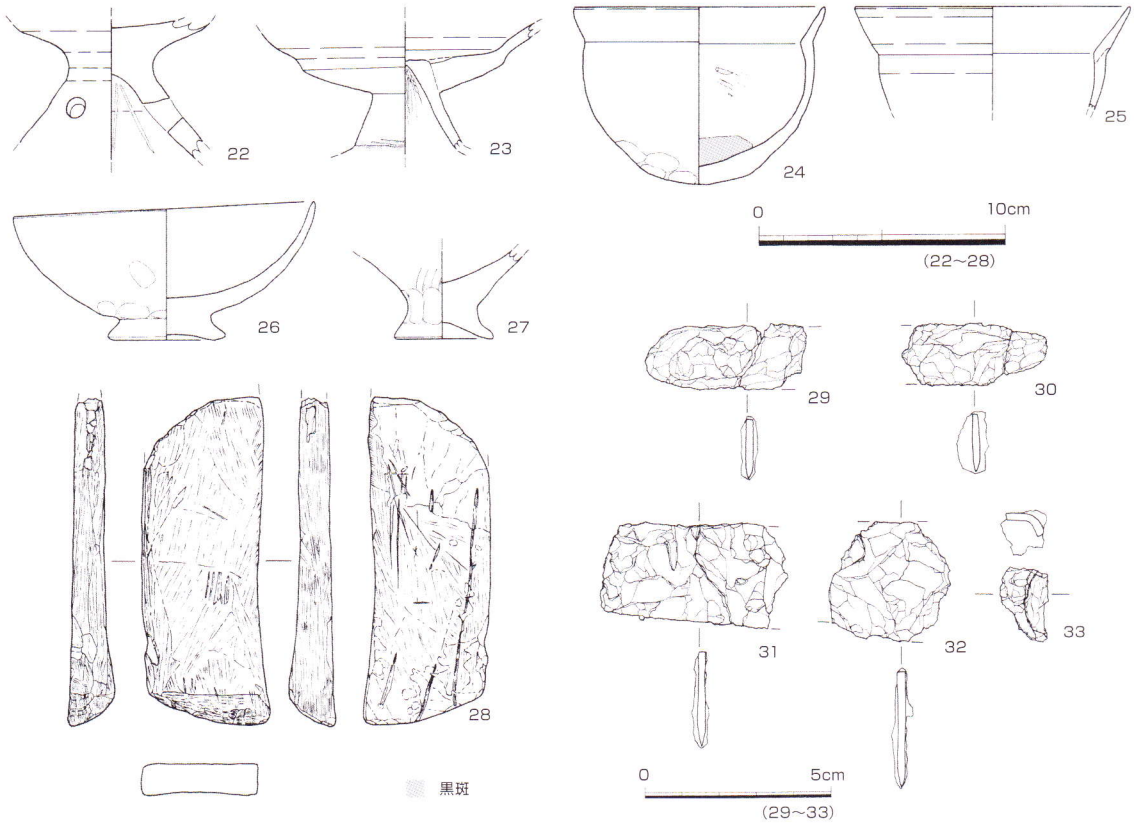
（SK−6・7土層図）

SI−2
1 10YR5/2（灰黄褐）粗砂混シルト
2 10YR4/2（灰黄褐）細砂混シルト
3 SD−17第1層 10YR4/2（灰黄褐）粗砂混シルト
4 SD−17第2層 10YR4/1（褐灰）粗砂混シルト
5 SD−17第3層 2.5Y5/1（黄灰）細砂混シルト
6 SD−17第4層 10YR5/2（灰黄褐）粗砂混シルト
7 SK−7第1層 10YR4/2（灰黄褐）細砂混シルト
8 SK−7第2層 10YR3/4（黒褐）細砂混シルト ※炭を多く含む

P−189
1 10YR4/2（灰黄褐）細砂混シルト
2 10YR5/2（灰黄褐）細砂混シルト
3 10YR5/4（にぶい黄褐）細砂混シルト

P−190
1 10YR4/2（灰黄褐）細砂混シルト
2 10YR5/2（灰黄褐）細砂混シルト
3 10YR5/4（にぶい黄褐）細砂混シルト

第17図　ＳＩ−２、ＳＫ−６・７、Ｐ−189・190遺構平面図及び土層断面図



第18図　遺物実測図５

今回の調査ではSK－６として調査を行った。

建物内部の構造については、まずベッド状遺構で囲まれた内側隅角部において柱穴と考えられるP－189及びP－190を検出した。P－189は長径55cm、短径44cm、深さ54cmを測るもので、P－190は長径54cm、短径46cm、深さ50cmを測る。これらの柱穴ではそれぞれ柱痕を確認した。またこの柱間の間隔は、柱痕の中心間距離で2.6mを測る。建物内部の区画に伴う遺構として、建物西側をめぐるベッド状遺構の東辺において、直径10cm前後を測る杭穴（P－185・P－187）及び、ベッド状遺構と直交するように長径20～30cm、短径10cm前後を測る長楕円のピット（P－186・P－187）がそれぞれ一対となって検出された。さらに建物の中央部では、直径60cm前後、深さ約13cmを測る土坑（SK－７）を検出した。このSK－７は、中央土坑と呼ばれるもので、この建物の炉と考えられるものである。遺構覆土は、４単位に細分でき、第１層が灰黄褐色の細砂混シルト、第２層が炭を含む黒褐色の細砂混シルト、第３層がにぶい黄褐色の細砂混シルトである。この炉の特徴としては、南側に焼土塊（第４層）がみられることである（図版６）。その他のピットの性格については不明である。

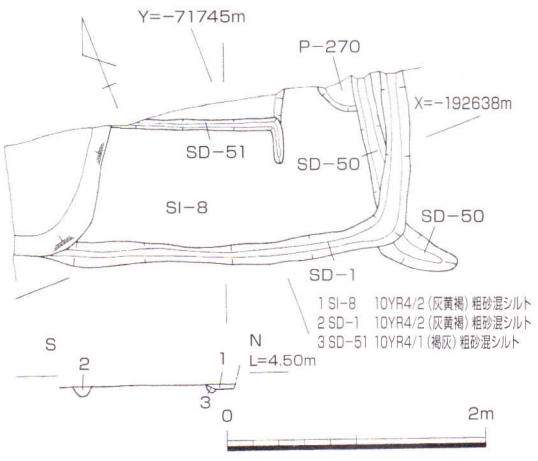
SI－２に伴う遺物としては、土師器（22～26）、製塩土器（27）、石器（28）、鉄器（29～33）などがある。これらの遺物のうち、22・23は高杯であり、24・25は小型丸底の鉢である。24は底部を平底に成形しようとする意識が感じられるもので、底部周辺には指オサエが施されており、25はSK－６から出土した。26は低脚杯であり、古墳時代前期前葉のものである。27は脚台Ⅲ式の製塩土器の脚部である。その他、28は建物南西隅部の壁溝であるSD－17第１層から出土した結晶片岩製の砥石である。また、29・30は同一個体と考えられる鉄製刀子であり、31～33は28出土地点から北約2.5mのSD－17第１層から出土した同一個体とみられる鉄製鎌である。これら以外にも、SI－2第１層から鉄片21点、SD－17からは鉄片５点が出土しており注目される。

以上の遺物から、SI－2の時期は古墳時代初頭から前期前葉（庄内式から布留式併行期古段階）とみられる。

［SI－８］（第19図、図版７）

SI－８は、調査区北端部において建物の南側壁溝とみられるSD－１を検出したことから、その性格を確定する目的で調査区の一部範囲拡張を行い、調査を行ったものである。その結果、SD－１は北側に屈曲することが明らかとなり、その内側において建物内部の区画溝とみられるSD－51などを検出した。よって、SD－１は竪穴建物（SI－８）の南側及び東側壁溝であり、SI－８は平面形が方形の竪穴建物と考えられる。

この建物は、後世の削平によって遺構覆土が削り取られ、遺存状態がきわめて悪いものである。この建物に伴う遺構としては、壁溝であるSD－１及び建物内部の区画溝とみられるSD－51がある。SD－１は幅12～20cm、深さ３～10cmを測る。また、SD－51は幅７～９cm、深さ６cm前後を測るもので、SD－１と幅90cmの間隔をもって平行し、東端部において南側に屈曲する。このSD－１とSD－51との位置関係から、この建物は南壁に沿っ



第19図　SI－８遺構平面図及び土層断面図

てベッド状遺構が存在した可能性が高い。これらの他、P－270及びSD－50の性格については不明である。

SI－８の時期は、遺構覆土が存在しないため時期判別できる遺物がないものの、ベッド状遺構を伴うなど建物の構造上の特徴からSI－２と近似する時期のものとなる可能性が高い。

［SI－１・３・６・７］（第20～24図、図版９～12）

SI－１・３・６・７は、調査区の中央部において検出した。これらの建物は遺構検出段階においてSI－１・３の平面プランについては確認できたものの、SI－６・７についてはSI－１・３の床面において壁溝などを検出し、その重複関係から認識したものである。まず、これらの構築順序について各建物の周囲をめぐる壁溝の重複関係などから整理すると、SI－１（壁溝SD－19）が最も新しく、SI－３（壁溝SD－36）→SI－６（壁溝SD－37）、そしてSI－７（壁溝SD－38）が最も古い建物という変遷が考えられる。以下、便宜上、調査の進行過程に合わせ新しい時期の建物から説明する。

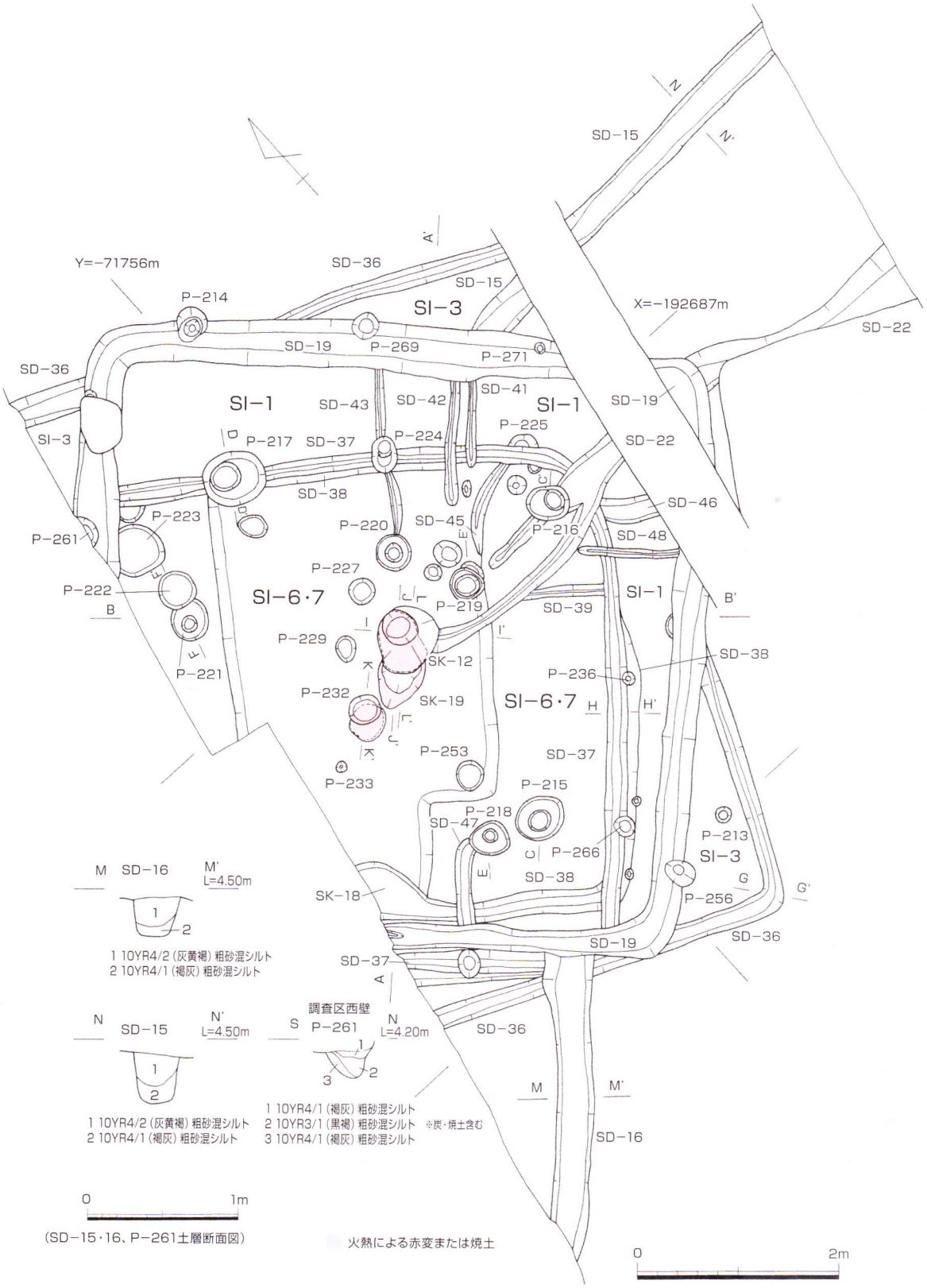
SI－１は、平面形が方形を呈する４本柱建物と考えられる。建物の西隅部は調査区外となる。建物の規模は一辺6.0～6.2mを測る。壁溝であるSD－19は、幅20～50cm、深さ10～17cmを測るものである。建物の主軸方向は、N－48°－Eである。遺構覆土は厚さ15～22cmを測り、４単位に細分ができる。第１層は灰黄褐色の粗砂混シルト、第２層が褐灰色の粗砂混シルト、第３層が炭を含む黒褐色の粗砂混シルト、第４層が灰黄褐色の粗砂混シルトである。

建物内部の構造については、まず建物の北隅及び東隅部、さらに南隅部において柱穴と考えられるP－217及びP－216、P－215を検出した。P－217は長径62cm、短径54cm、深さ65cm、P－216は長径44cm、短径34cm、深さ62cm、P－215は長径52cm、短径43cm、深さ67cmを測る。これらの柱穴では、それぞれ柱痕を確認した。またこの柱間の間隔は、柱痕の中心間距離でP－215～216が3.2m、P－216～217が3.3mを測る。さらに、この建物に付随すると考えられる遺構としてSD－19の建物外肩部に沿って検出したP－261・214・269・271・256がある。検出した位置関係からSI－１の外壁構築に関わる遺構と思われる。またこれらのピットのうち、調査区の西壁際において検出したP－261の第２層からガラス製の玉が１点出土した（第23図43、図版11・20）。

建物内部の区画に伴う遺構としては、建物の東隅部を方形に区画するように建物主軸に平行するSD－41～43、及びこれらの溝に直交するSD－39・46・48を検出した。これらの溝は、幅７～14cm、深さ３～５cmを測り、建物内部を区画する区画溝と考えられる。さらに建物の中央部では、中央土坑と考えられるSK－12を検出した。この楕円形を呈する土坑は、SI－１の炉とみられるもので長径66cm、短径62cm、深さ16cmを測る。遺構覆土は、３単位に細分ができ、灰黄褐色の粗砂混シルトの上下に炭を含む褐灰色の粗砂混シルトが堆積する。またこの炉の特徴として、その南西側壁面が火熱を受け赤変している（図版10）。

SI－３は、平面形が方形を呈するもので、建物の西側は調査区外となる。この建物の壁溝であるSD－36は、幅18～31cm、深さ13cmを測るものである。この建物の規模は一辺7.3mを測るもので、大型建物となる可能性がある。建物の主軸方向は、N－24°－Eである。遺構覆土は厚さ６～13cmを測り、単一層である。

建物内部の構造については、この建物の中心部の大半はSI－１によって削平を受けている。よって、今回の調査においてはこの建物に関わる柱穴は検出することができなかったものの、建物の中央部南側



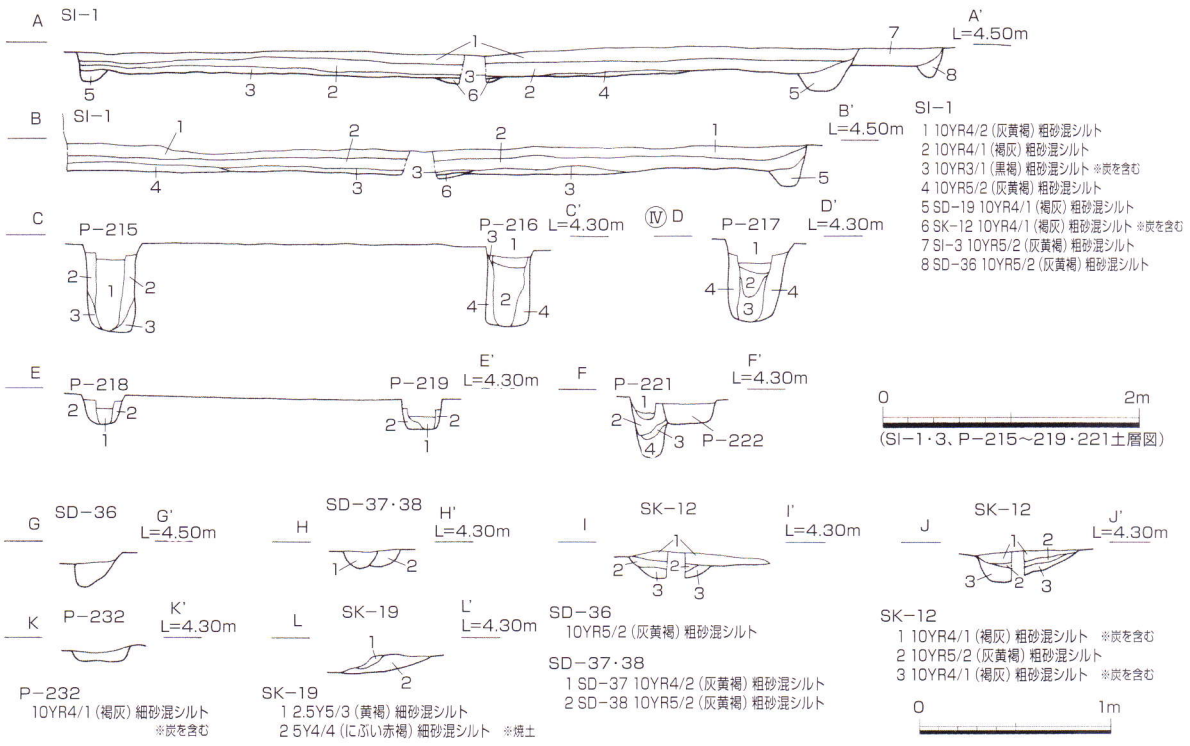
第20図　ＳＩ－１・３・６・７、ＳＤ－15・16、Ｐ－261遺構平面図及び土層断面図

において中央土坑と考えられるピット(P－232)を検出した。このP－232は、この建物の炉と考えられるもので直径28～32cm、深さ５cm前後を測る。遺構覆土は、炭を含む褐灰色の粗砂混シルトの単一層である。この炉の特徴としては、炉の南西側壁面が火熱を受け赤変している(図版11)。

SI－６は、平面形が方形を呈する４本柱建物と考えられる。建物の西側は調査区外となる。建物の規模は一辺5.0mを測る。壁溝であるSD－37は、幅13～23cm、深さ７～12cmを測るもので、建物の東隅部ではやや丸みを帯びて南へ屈曲する。この建物の主軸方向は、N－41°－Eである。

建物内部の構造については、まず建物の北隅及び東隅部、また南隅部において柱穴と考えられるP－221及びP－219、P－218を検出した。P－221は直径38cm、深さ48cm、P－219は直径33cm、深さ23cm、P－218は長径42cm、短径35cm、深さ23cmを測る。これらの柱穴では、それぞれ柱痕を確認した。またこの柱間の間隔は、柱痕の中心間距離でP－218～219が2.5m、P－219～221が2.8mを測る。さらに建物の中央部東側において中央土坑と考えられるSK－19を検出した。この楕円形を呈する土坑は、SI－６の炉と考えられるもので長径約50cm、短径46cm、深さ９cm前後を測る。遺構覆土は、２単位に細分ができ、第１層が黄褐色細砂混シルト、第２層が焼土であり、にぶい赤褐色の細砂混シルトとなる。またこの炉の特徴として、土坑の南西側壁面が火熱を受け赤変し焼土が堆積している（図版11)。

SI－７は、平面形が方形を呈する建物と考えられる。建物の西側は調査区外となる。建物の規模は一辺約4.7mを測る。壁溝であるSD－38は、幅20～24cm、深さ17cm前後を測るものである。建物の主軸方向は、SI－６と共通する。またこの建物においては、非常に遺存状態は悪かったものの、西及び東壁に沿って幅約1.3m、高さ約２～３cmのベッド状遺構を検出した。このベッド状遺構は建物南辺において一部途切れる部分があり、この部分が建物内部への入り口と考えられる。入り口部分の特徴としては、SI－２と同様に壁溝が建物内側に拡張され土坑状に掘り凹められていることである。今回の調査では

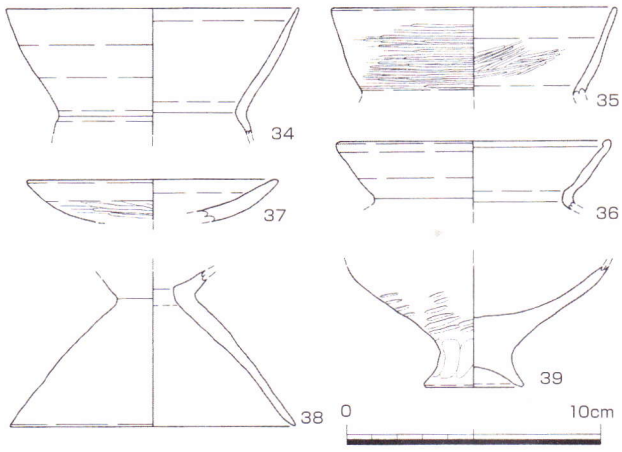


第21図　ＳＩ－１、ＳＤ－36～38、ＳＫ－12・19、Ｐ－215～219・221・232土層断面図

SK－18として調査を行った（図版11）。

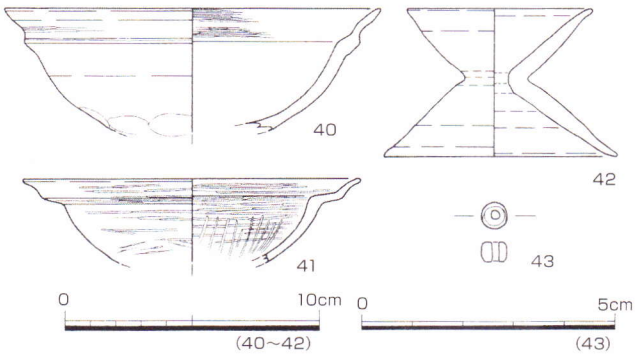
この建物では、柱穴及び炉と考えられる中央土坑については、確認することができなかった。これについては、この建物の主軸の方向性がSI－６と共通するものであり、また北側壁溝及び東側壁溝が重複することなどから判断して、SI－７はSI－６と規格性が感じられる。つまり、SI－６はSI－７の南辺を70～80cm南に拡張した建物と考えられる。またその際、柱穴及び炉は共有した可能性が高い。

次に、これらの竪穴建物に付属する遺構として、SD－15・16・22がある。これらの溝のうち、SD－22はSI－６・７の炉と考えられるSK－19から建物外に蛇行しながら続く溝であり、SI－６・７に伴う排水溝と考えられる。SD－15・16はともに直線的に掘削された溝で、その横断面の形状が箱掘状を呈する特徴的な溝である。その規模は、SD－15が検出長4.2m、幅30～35cm、深さ50cm、SD－16が検出長3.0m、幅35～50、深さ39cmを測る。これらの溝はその特徴的な形状と竪穴建物との重複関係からみて、SD－16がSI－１の排水溝であり、SD－15がSI－３の排水溝と考えられる。



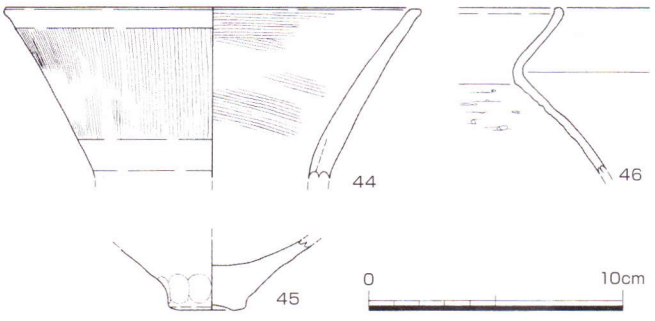
第22図　遺物実測図６

これらの竪穴建物に伴う遺物については、SI－１の遺構覆土から土師器（第22図34～38）、製塩土器（39）の他、SI－１の壁溝であるSD－19の遺構覆土から土師器（第23図40～42）が出土した。また、SD－19の底面で検出したP－261第２層からは、ガラス製玉（第23図43）が１点出土した。このガラス玉は、分析の結果、アルカリ石灰ガラスに含まれ、秋月遺跡出土ガラス製玉に同成分のものがある。またSI－６・７の排水溝とみられるSD－22から土師器（第24図44・45）の他、SI－３では遺構覆土から鉄片１点、P－232から土師器（第24図46）が出土している。



第23図　遺物実測図７

そのうち、34は小型丸底壺、35は壺又は鉢の口縁部であり、36は布留形甕の口縁部である。37は小型器台の口縁部、38は「X」字状を呈する小型器台の脚部である。また39は脚台Ⅲ式の製塩土器である。40・41は小型丸底の有段口縁鉢であり、41は内外面に丁寧なヘラミガキを施す精製器種である。さらに42は38と同じ形態の小型器台である。その他、43



第24図　遺物実測図８

は淡い青色を呈するガラス製玉である。これらの遺物からSI－１の埋没時期は、古墳時代前期前葉から中葉（布留式併行期古段階から中段階）と考えられる。

次に44は広口壺の口縁部であり、45は壺の底部である。さらに46は布留形甕の口縁部である。これらの遺物からSD－22の埋没時期は前期前葉（布留式併行期古段階）のものとみられ、SI－３の埋没時期については古墳時代前期前葉から中葉と考えられる。

これらの遺物から各建物の構築時期は、SI－６・７は古墳時代初頭から前期前葉とみられ、SI－３は古墳時代前期前葉のものと考えられる。またSI－１の時期はSI－３との重複関係から古墳時代前期前葉から中葉となる。

ここで隣接して検出されたSI－２と上述したSI－１・３・６・７との時期的併行関係について整理しておくと、SI－２がSI－６・７の排水溝と考えられるSD－22が埋没した後に構築されていることから、SI－６・７が最も古く、SI－２→SI－３→SI－１ということになる。またSI－２と各建物との同時併存の可能性は、時期的検討からSI－３とSI－２との併存が考えられるものの、その位置が近接しているため可能性はきわめて低いと言える。よって、建物構造の共通性からSI－２はSI－６・７と近似する時期と考える。

［SI－４］（第25・26図、図版12～14）

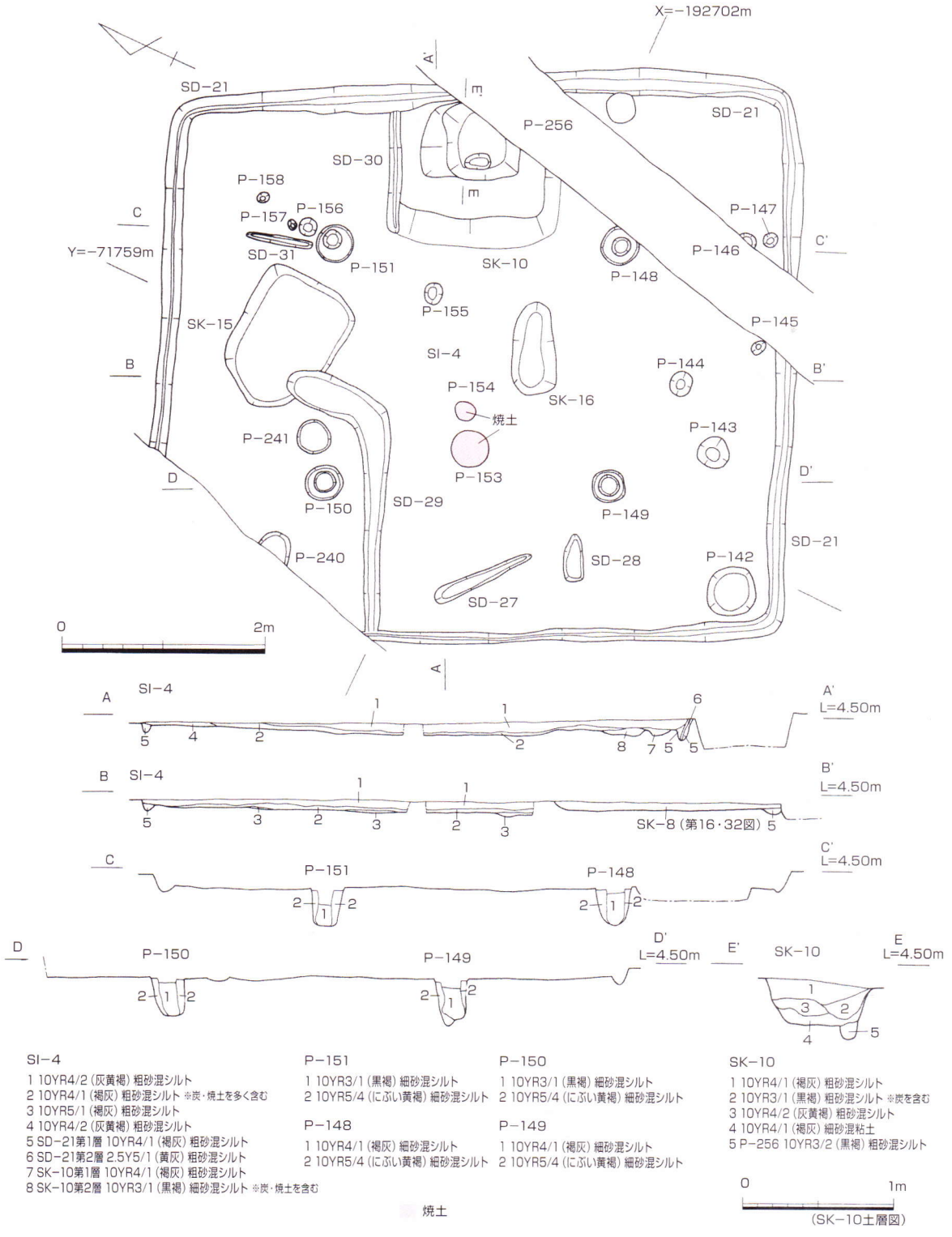
SI－４は、調査区の南半部において検出したもので、平面形が長方形を呈する４本柱建物である。建物の西隅部は調査区外となる。この建物の規模は南北6.3m、東西5.6mを測り、主軸の方向性はN－66°－Eである。遺構覆土は厚さ４～20cmを測り、４単位に細分できる。このうち、第２層は炭及び焼土を多く含み、第３・４層は建物床面の凹みに堆積したものである。よって、焼失家屋の可能性を疑い遺構覆土掘削時には炭化材等の検出に努めたが、明確な建築部材等を検出することができなかった。しかしながら、壁溝であるSD－21は、幅８～28cm、深さ４～12cm前後を測るものであり、建物東側の土層堆積状況では、壁溝中央部分において炭及び焼土を含む黒褐色の細砂混シルトが約２cm幅で直線的に立ち上がる状況を確認した（図版14）。これは、建物東壁際に立てられた板材が焼失した痕跡と考えられ、第２層において認められた炭及び焼土の性格等を考慮すると、この建物は焼失家屋である可能性が高い。

建物内部の構造としては、東西南北の各隅部にこの建物の柱穴であるP－148～151を検出した。これらの柱穴の規模は、P－148が直径37cm、深さ36cm、P－149が直径32cm、深さ46cm、P－150が長径37cm、短径33cm、深さ39cm、P－151が直径36cm、深さ37cmを測り、それぞれの柱穴において柱痕を確認した。またこの柱間の間隔は、柱痕の中心間距離でP－148～P－149が2.3m、P－149～P－150が2.8m、P－150～P－151が2.3m、P－151～148が2.8mを測る。さらに建物内部の区画に伴う遺構としては、建物の北隅部を区画するように、建物主軸と平行するSD－31及び、直交するSD－30を検出した。これらの区画溝は、幅９～12cm、深さ７cm前後を測るものである。その他、建物の東壁中央部において南北幅約1.0m、東西幅約80cm、深さ約30cmを測る土坑（SK－10）を検出した。この土坑の周囲には幅約40cm、高さ約５cmの堤状の高まりが認められる（図版12）。SK－10の遺構覆土は４単位に細分でき、底面においてP－256を検出した。この土坑の性格としては、周囲に堤をめぐらすことなどから貯蔵穴と考えられる。

建物の中央部南側では、東西に連続する２カ所の焼土面（P－153・154）を検出した。これらの焼土面は円形を呈するものであり、その範囲はP－153が直径20cm前後、P－154が35cm前後を測る。これらの焼土面を断ち割り調査したところ、約２cm前後の焼土がレンズ状に堆積するものであった（図版14）。

よって、これらの焼土面はこの建物に伴う地床炉の可能性が高い。

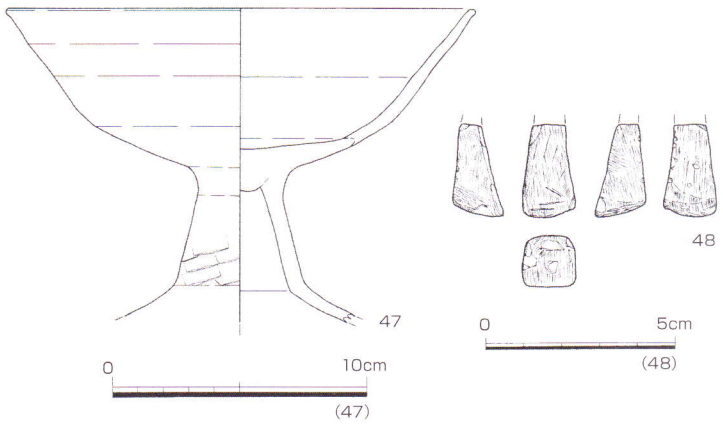
さらに、建物の西辺中央部において検出したSD－27は、検出長1.0m、幅６～16cm、深さ２～４cmを測るもので、SD－28は深さ９cm前後を測るものである。これらの遺構は、貯蔵穴であるSK－10の真向かいにあたり規格性を感じさせるものである。現段階では、この建物の入り口に関わる遺構の可能性を



第25図　ＳＩ－４、ＳＫ－10、Ｐ－148～151遺構平面図及び土層断面図

考えておきたい。さらにこの建物の柱穴であるP－150を避けるように掘削された溝（SD－29）、及びその先にある土坑（SK－15）についてもこの建物に伴う遺構と思われる。

この建物の埋没時期を示す遺物としては、土師器（第26図47）及び石器（48）などがある。このうち47は、杯部から口縁部にかけての稜が不明瞭となる高杯であり、貯蔵穴と考えられるSK－10第４層から出土した。また48は、砂岩製の小型の砥石であり、SI－４第２層から出土した。よって、SI－４の構築時期は古墳時代前期中葉から後葉（布留式併行期中段階から新段階）と考える。



第26図　遺物実測図９

［SD－20・23・24］（第27～29図、図版15）

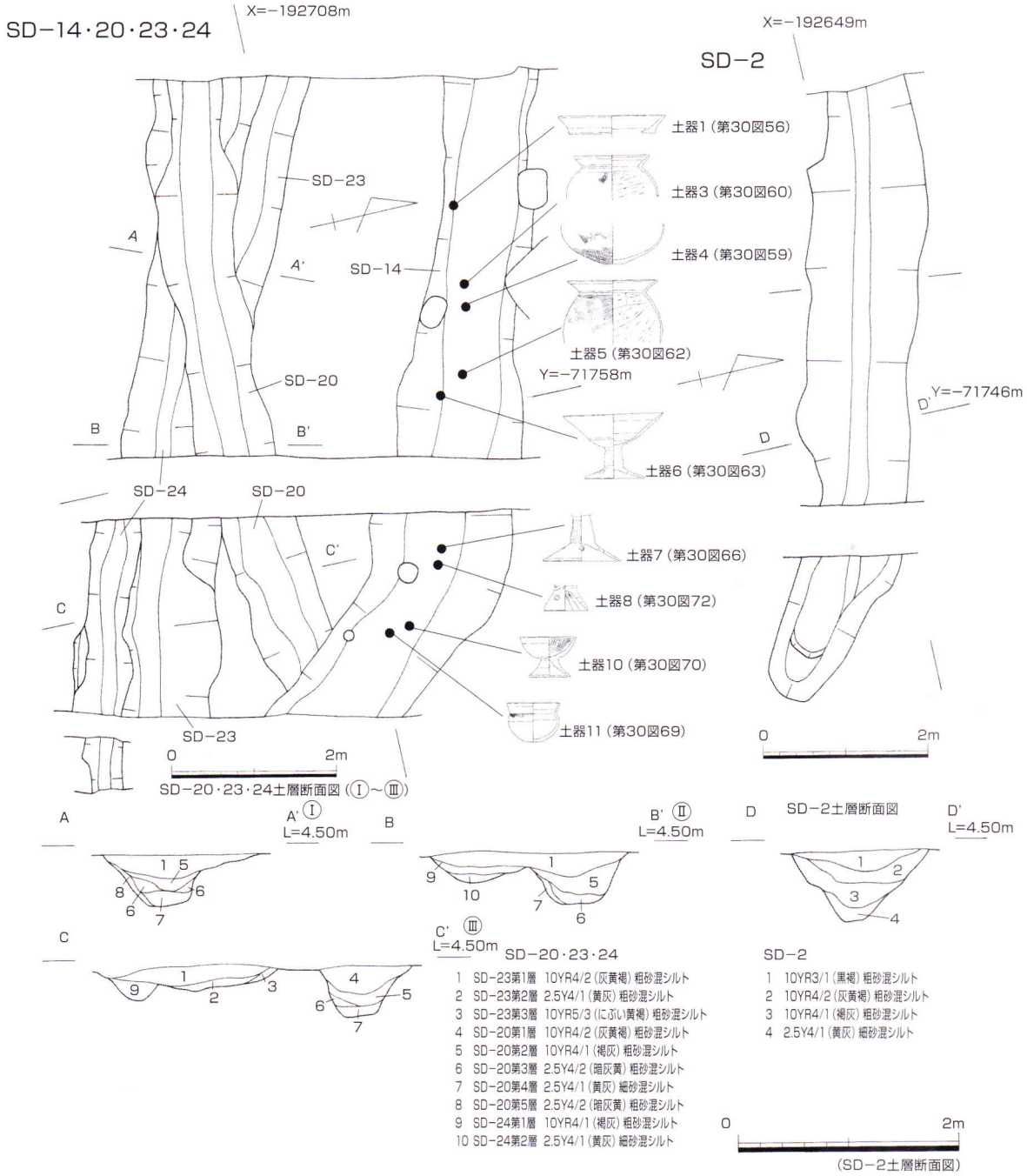
SD－20・23・24は調査区の南端部、第６b層上面が南に向かって低く傾斜をはじめる変換線付近において検出したもので、重複する３条の溝を検出したものである。これらのうち、土層堆積状況から前後関係を整理するとSD－23（第１～３層）が最も新しく、SD－20（第４～８層）及び24（第９・10層）の前後関係については不明である。

そのうちSD－20は検出長7.5m、幅約0.9～1.0m、深さ50cm前後を測るもので、その方向性はやや彎曲しながらほぼ東西方向に延びるものである。遺構底面の標高は、東西両端部において3.9m前後を測り、その傾斜方向は明らかでない。遺構覆土は、５単位に細分することができる。またSD－24は、検出長3.3m以上、幅47～75cm、深さ28cm前後を測るものである。その方向性はW－23°－Nである。遺構覆土は２単位に細分することができる。SD－23は、SD－20・24が埋没した後に掘削されたもので、検出長7.8m、幅1.4～1.9m、深さ30cm前後を測る。またその方向性はSD－24とほぼ同じである。遺構覆土は３単位に細分することができる。

これらの溝の性格としては、調査区南端部の第６b層上面が南に向かって低く傾斜をはじめる変換線付近に掘削されていることから、SD－20・23については微低地と微高地との区画溝と考えられる。またやや方向性が異なるSD－20については、一定の幅及び深さをもつものであることから、微高地縁辺部に掘削された灌漑用水路の可能性が考えられる。

これらの溝から出土した遺物は、SD－20から土師器である東部瀬戸内産と思われる複合口縁壺の口縁部（第28図49）及び、砂岩製の叩石（50）などが出土している。またSD－23からは、土師器として布留形甕の体部（第29図51）、製塩土器の底部（52）、砂岩製の砥石（53）、同じく砂岩製の叩石（54）などが出土している。

以上の出土遺物は、これらの溝群の埋没時期を示すものであり、各遺構の時期については、SD－20・23が古墳時代前期前葉（布留式併行期古段階）、SD－24は、時期判別できる遺物が出土していないため詳細は不明であるものの、遺構の重複関係などから判断して古墳時代初頭から前期前葉にかけてのものと考えられる。

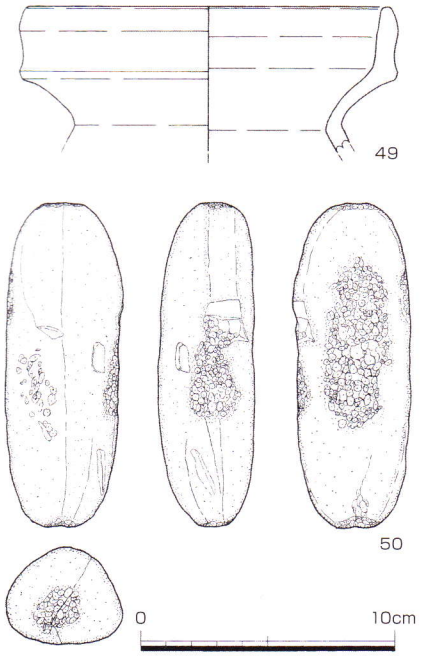


第27図　ＳＤ－２・14・20・23・24遺構平面図及び土層断面図

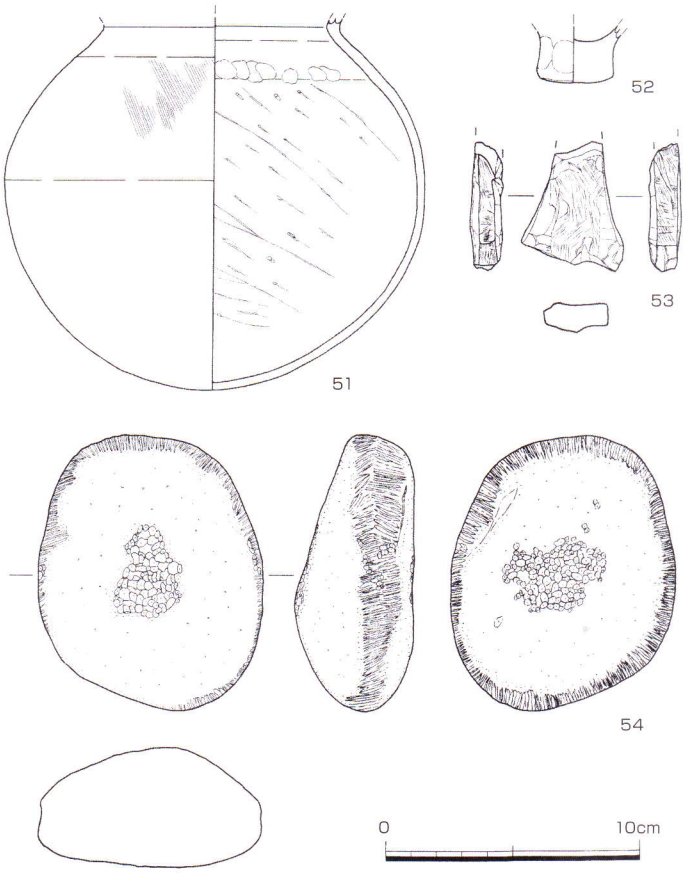
［SD－14］（第27・30図、図版16）

SD－14は調査区の南端部、SI－４の南側で検出したもので、SI－４はこの溝の埋没後に構築されている。この溝の規模は検出長8.5m、幅1.0～1.8m、深さ15cm前後を測る。その方向性は検出範囲の西側においては直線的でN－64°－Wであるものの、調査区東端部において南側へ屈曲する。

この溝の遺構覆土は、黒褐色の粗砂混シルトの単一層であり、覆土内には埋没時に廃棄されたとみられる古墳時代前期の土器（甕・壺・高杯・鉢）が多量に含まれていた。また溝底面の全面において比較的遺存状態の良い土器群を検出した。



第28図　遺物実測図10



第29図　遺物実測図11

この溝から出土した遺物には、土師器の壺（第30図55～59）、甕（60～62）、高杯（63～67・70）、鉢（68・69）、壺又は鉢の底部（71）、脚部（72）がある。そのうち、55は阿波系の広口壺の口縁部、56は同じく阿波産とみられる複合口縁壺の口縁部である。また、57は直口壺の口縁部、58は小型丸底壺の口縁部、59は壺の底部である。60・61は布留形甕の口縁部であり、62は河内産（生駒西麓産）の庄内甕である。この62の体部には不明瞭な細い平行タタキの後、下半部にタテハケが施されている。口縁端部は内側に肥厚させている。63は、杯部から口縁部の境に不明瞭な稜をもつ高杯で、67は椀形の高杯である。さらに、68は平底の鉢であり、69が小型丸底の鉢である。また70は、異形の椀形高杯である。

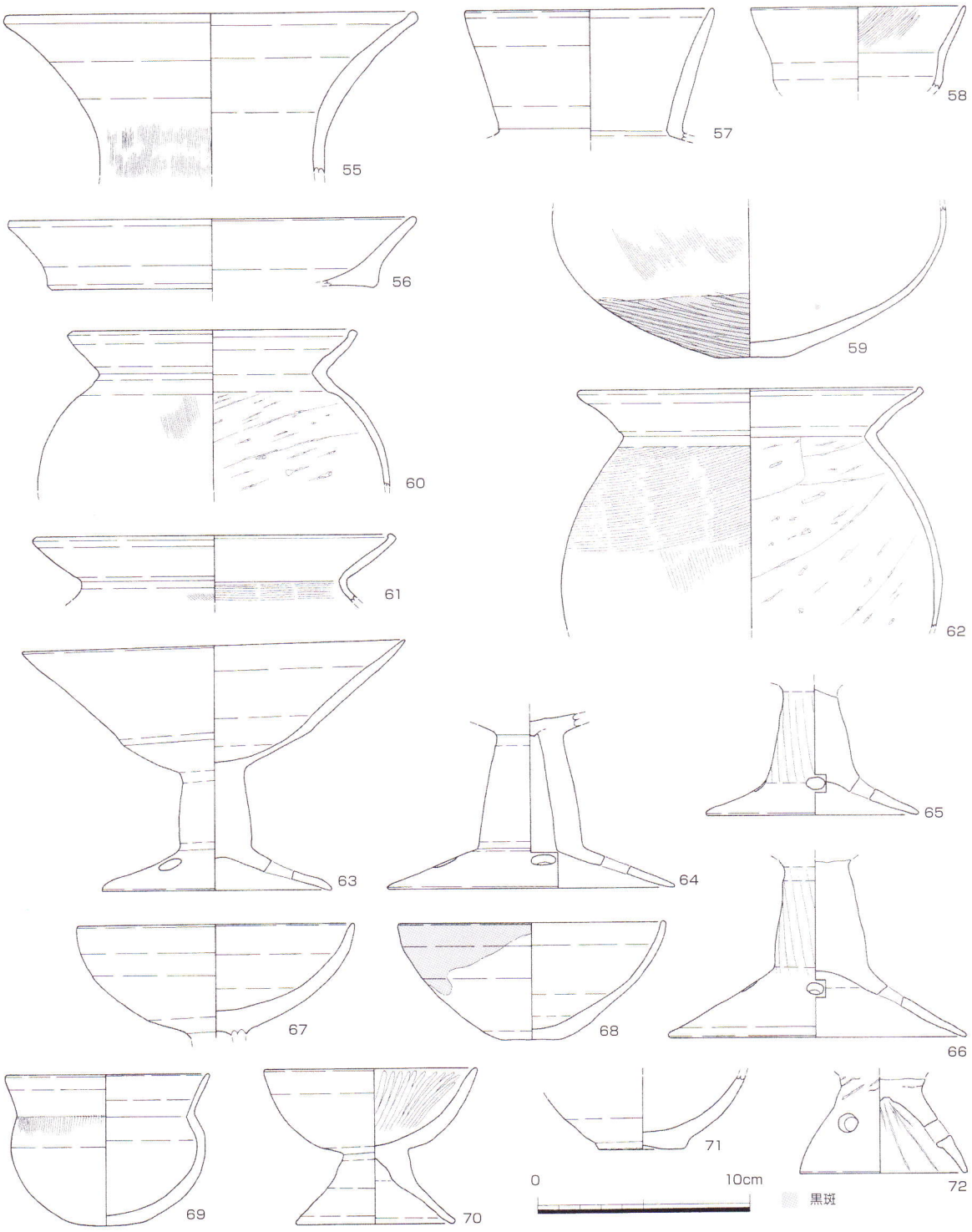
これらの遺物からSD－14の時期については、62の庄内甕が古相を呈するものの、古墳時代前期前葉から中葉（布留式併行期古段階から中段階）に位置付けられるものと考えられる。

［SD－２］（第27・31図、図版16）

SD－２は、調査区北半部に広がる微低地（SX－１）とその北側にある微高地との境界部分で検出したものである。この溝の東端部は、SX－１の内部においてその傾斜に合わせるようにやや南側に屈曲し途切れるものである。規模は、検出長が7.7m、幅1.2～1.4m、深さ75cm前後を測り、その方向性はW－14°－Nである。溝底面の標高は東端部が3.8m、西端部が3.6mを測り、東側が高く、西側に向かって約20cmの高低差で低く傾斜する。これらのことから、SD－２は、東側に広がる微低地（SX－１）から水を引き込み西側へ流す灌漑用水路と考えられる。遺構覆土は大きく４単位に細分が可能であり、調査区西壁面では、第１層が黒褐色の粗砂混シルト、第２層がにぶい黄褐色の粗砂混シルト、第３層が灰黄褐色の粗砂混シルト、第４層が褐灰色の粗砂混シルトとなり、調査区中央部と比較して若干土色及び土

質が変化する。

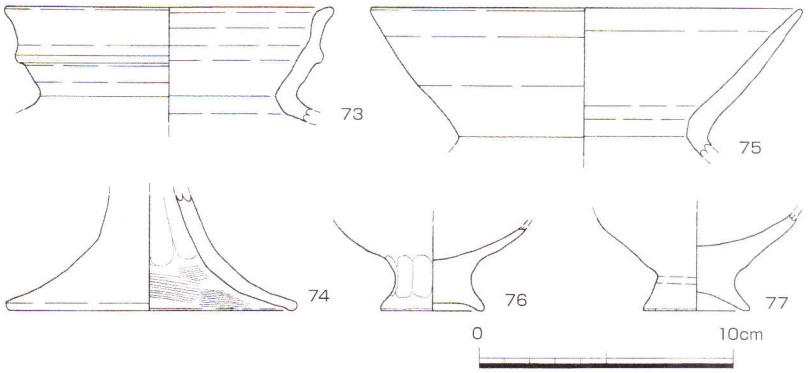
このSD－２から出土した遺物には、土師器（第31図73・74）などがあり、73が複合口縁壺の口縁部、74が高杯の脚部である。よって時期は、古墳時代前期中葉から後葉（布留式併行期中段階から新段階）と考えられる。



第30図　遺物実測図12

［SD－６・11］（第16・31図）

SD－６・11は、調査区の北半部に広がる微低地（SX－１）の範囲内において検出したものである。SD－６は南北にやや蛇行するもので、検出長11.0m、幅24～70cm、深さ６～12cmを測る。遺構底面の標高はほぼ水平となる。またSD－11は、SD－６の西側において検出したもので、検出長4.0m、幅43～54cm、深さ８～13cmを測る。



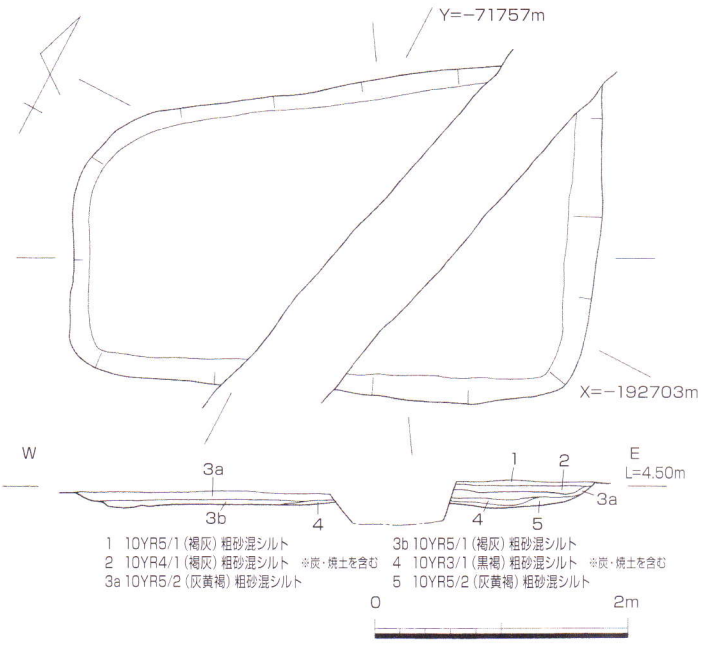
第31図　遺物実測図13

出土遺物としては、SD－６から土師器広口壺の口縁部（第31図75）などが出土した他、SD－11からは脚台Ⅲ式の製塩土器（76・77）が出土した。これらの時期は、古墳時代前期中葉から後葉のものと考えられる。

［SK－８］（第32図、図版17）

SK－８は、SI－４の遺構検出時において、その東及び南側堀方と重複するように検出した土坑である。この土坑の規模は、4.2m前後、南北1.6～2.7m、深さ８～22cmを測る。

遺構覆土は５単位に細分ができ、第１層は褐灰色の粗砂混シルト、第２層が炭及び焼土を含む褐灰色の粗砂混シルト、第３a層が灰黄褐色の粗砂混シルト、第３b層が褐灰色の粗砂混シルト、第４層が炭及び焼土を含む黒褐色の粗砂混シルト、第５層が灰黄褐色の粗砂混シルトである。これらの堆積土は、炭及び焼土（第２・４層）を間層とする互層となっており、SI－４の土層堆積状況とは異なる。



第32図　ＳＫ－８遺構平面図及び土層断面図

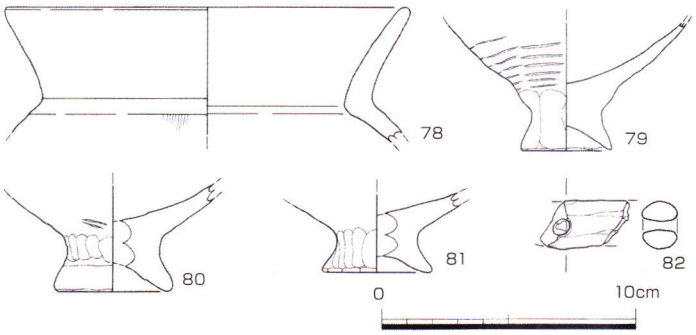
この土坑の性格としては、その位置関係からSI－４との関連性が疑われ、土層堆積状況からSI－４が埋没する過程において、その位置及び堀方が遺存している段階に掘削された土坑と考えられる。

この土坑から出土した遺物として注目されるものには鉄片１点がある。

［SX－１］（第16・33・34図、図版３）

SX－１は、第３次調査において確認されたもので、今回の調査において調査範囲内の掘削を行った。その結果、SX－１は調査区東壁で南北幅40.0m、西壁で南北幅30.0mの範囲に広がり、西から東に向かって低く傾斜することが明らかとなった。またSX－１内の堆積土は４単位に細分が可能であり、第

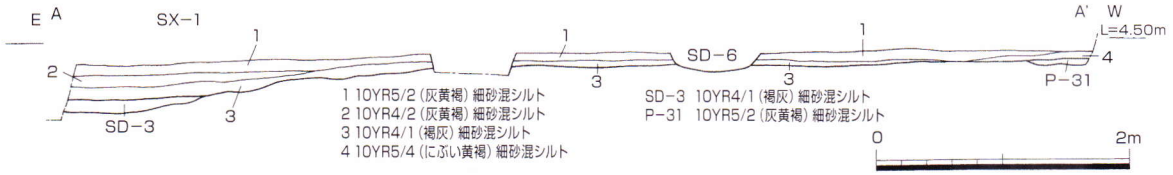
１～３層には古墳時代中期から後期の須恵器が含まれるため、最終埋没は古墳時代中期以降と考えられる。よってSX－１の範囲内では、この第１～３層を除去したSX－１第４層上面がSD－２・３・６・10・11などを検出した古墳時代前期中葉以降の遺構検出面となる。またSX－１第４層には、古墳時代初頭から前期にかけての遺物が含まれている。この第４層を除去し基本層序第６a層上面において遺構検出を行った結果、古墳時代前期前葉から中葉とみられるSD－13・18などを検出した。



第33図　遺物実測図14

これらの調査結果から、SX－１の範囲内では遺構検出面が２面存在する。これは、古墳時代初頭から中期にかけてSX－１が埋没していく過程において、微低地部への居住域の拡張を目的として遺構の形成が行われたものの、竪穴建物などがみられないことは住居を構築するには適当な状態でなかったことを示している。自然科学分析では、SX－１周辺にはイネ科及びヨモギ属の草木が多く、周辺には水田の分布が想定されている。

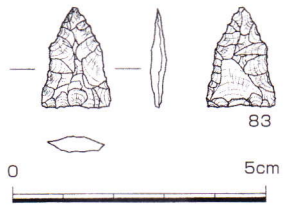
このSX－１から出土した遺物としては、土師器（第33図78）、製塩土器（79～81）、土製品（82）がある。このうち、78は古墳時代中期から後期にかけての甕の口縁部であり、79～81は脚台Ⅲ式の製塩土器脚部である。また82は有孔土錘である。



第34図　ＳＸ－１土層断面図

[その他の遺構・遺物]（第16図）

調査区の南端部において検出したP－96は、第３次確認調査第10区において検出したP－１であり直径31cm、深さ９cm前後を測るピットである。このP－96からサヌカイト製の打製石鏃が１点出土している（第35図83）。この石鏃は、平基式石鏃であり、縄文時代のものと考えられる。今回の調査では、古墳時代初頭から前期にかけての遺構及び遺物が主体をしめる中で、調査地における遺跡の上限時期を示す遺物として重要な資料と考える。



第35図　遺物実測図15

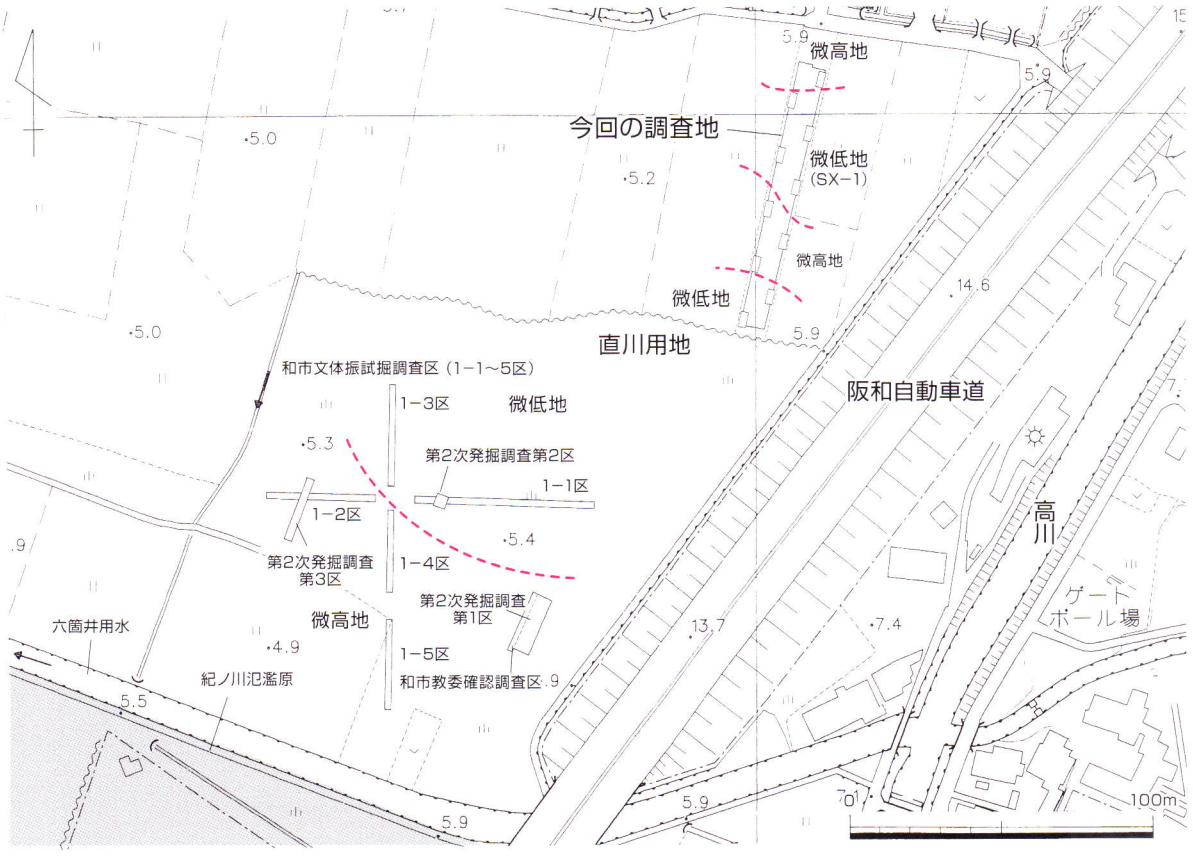
第５章　まとめ

第１節　田屋遺跡西端部における微地形と遺構分布

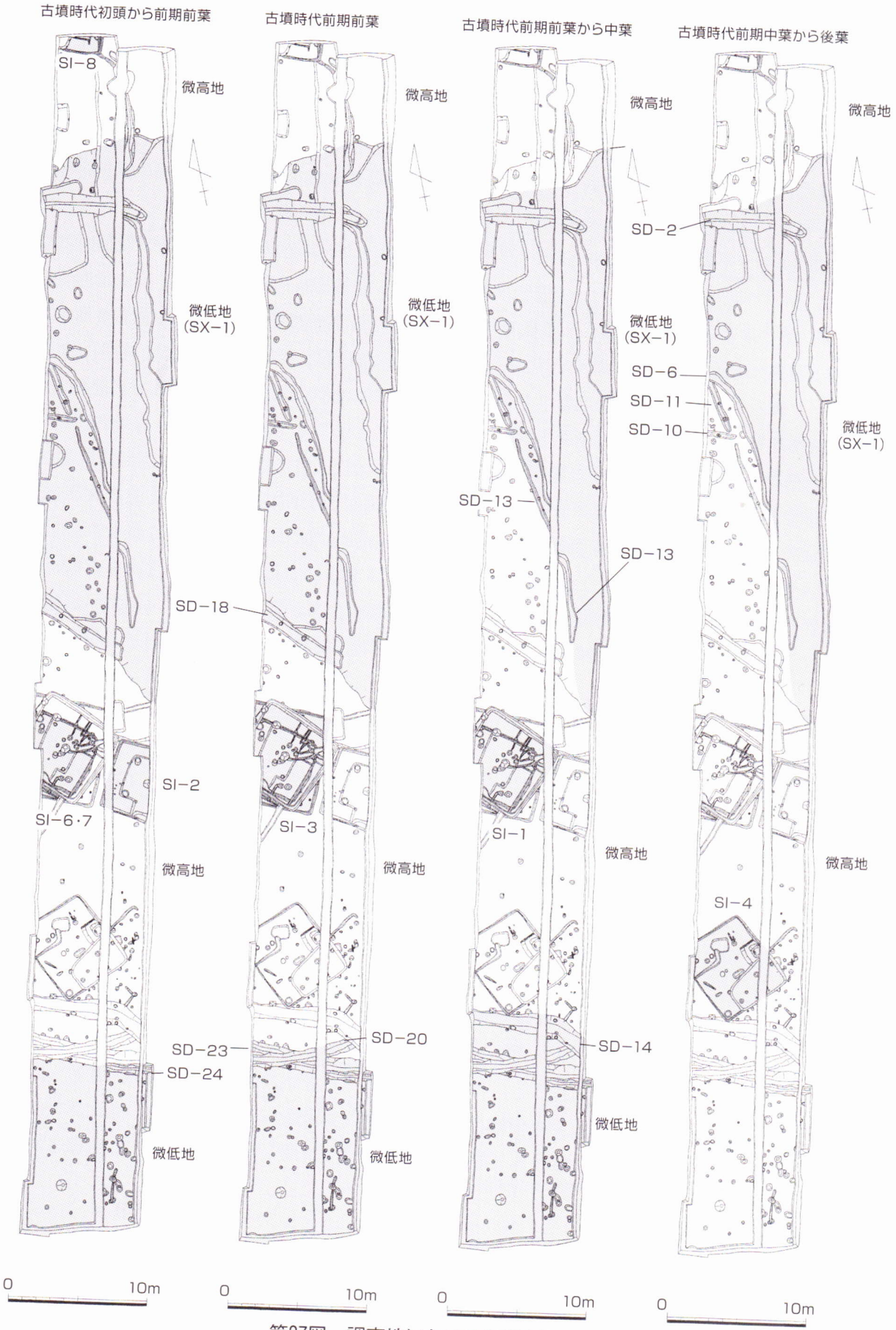
今回の調査地周辺における微地形については、調査地の南側隣接地である直川用地内で行われた試掘調査及び第２次発掘調査成果から判断して、直川用地南側に微高地が、中央北側に微低地が展開している可能性がある。また六箇井用水の南側が紀ノ川の氾濫原である（第36図）。

今回の調査では、古墳時代初頭から前期の竪穴建物及び溝、土坑、ピットなど多数の遺構を検出し、また微地形として調査地北半部において微低地と考えられる落ち込み（SX－１）と、調査地南端部において第６′層の堆積状況から判断して微低地と考えられる第６b層上面の落ち込みを検出した。今回検出した遺構群は、古墳時代前期に中心時期があり、微地形に左右されながら広範囲に展開している。ここでは、これらの検出遺構及び微地形、さらに出土遺物の検討からみた古墳時代初頭から前期にかけての集落内部の遺構についてその変遷を述べる。

遺構の変遷については、竪穴建物の重複関係及び構造、方向性、出土遺物の時期を判断材料とした。その際、参考としたのはSI－１・３・６・７の重複関係である。ただし、事実報告でも述べたとおりSI－６・７は同一住居の拡張前及び拡張後の住居と判断されるため、SI－１・３・６・７は大きく３時期の住居が重複しているものと考えられる。またSI－４はSD－14との重複関係及び出土遺物から、前述の住居群より後出するものである。よって、竪穴建物の時期としては４段階（第１～４段階）を想定することができる。以下、各時期の微地形と竪穴建物及び溝など主要遺構の分布状況を述べる（第37図）。



第36図　調査地周辺の微地形



第37図　調査地における遺構変遷図

[古墳時代初頭から前期前葉（第１段階）]

古墳時代初頭から前期前葉は、調査区北端部に展開する微高地上部にSI－８及び、調査区南半部に広がる微高地上部にSI－２・６・７が構築され、調査区北半部は微低地（SX－１）であったと考えられる。また調査地南端部においても微低地が広がり、その北側肩部付近にSD－24が掘削されている。微高地に構築された竪穴建物の主軸は、SI－６・７がN－41°－Eであり、SI－２がN－32°－Eとなる。この建物の主軸方向は、北側に展開する微高地の南側肩部の方向性に影響を受けたものと考えられる。

[古墳時代前期前葉（第２段階）]

古墳時代前期前葉は、調査区南半部の微高地上部にSI－３が構築される。この建物の主軸方向についても、その北側に広がる微低地南側肩部の方向性に影響されているものと考えられる。またSI－３の北側に広がる微低地南肩部に沿ってSD－18が掘削される。調査区南端部の微低地部には、その北側肩部に沿うとみられるSD－20・23が掘削される。

[古墳時代前期前葉から中葉（第３段階）]

古墳時代前期前葉から中葉は、調査区南半部の微高地上部にSI－１が構築される。この建物の主軸の方向性についても、その北側に広がる微低地南側肩部の方向性に影響されているものと考えられる。また、この微低地南側肩部に沿って、SD－13が掘削されている。調査区南端部の微低地部には、その北側肩部付近にSD－14が掘削されている。

この時期には、調査区北半部に展開していた微低地が徐々にその規模を縮小した可能性がある。これは、言い換えればSX－１が自然埋没した結果と考える。その過程については、事実報告でも述べたとおり、SX－１内では遺構面が２面存在し、SX－１第４層除去後に検出される遺構（SD－13・18）や同じく第３層除去後第４層上面において検出される遺構（SD－６・10・11）のように、SX－１が自然埋没する過程において微低地部への居住域の拡大が行われたと考えられる。ただし、検出される遺構は小規模なピットが主体となり、竪穴建物がみられないことは未だ住居を構築するには適当な状態ではなかったと考えられる。

[古墳時代前期中葉から後葉（第４段階）]

古墳時代前期中葉から後葉は、調査区南半部の微高地上部にSI－４が構築され、その北方に前段階からさらに規模を縮小した微低地（SX－１）が展開する。またこの微低地北側肩部に沿ってSD－２が掘削され、南側肩部に沿ってSD－６・11などが掘削されている。調査区南端部の微低地については、前段階までその北限とみられる位置に掘削されていた溝群（SD－14・20・23・24）に後出するものが認められなくなることから、自然埋没した可能性がある。よって、この時期には、調査地北半部にのみ微低地が展開していた可能性が高く、調査地南端部にまで居住域の拡大が行われたと考えられる。ただし、調査区南端部では竪穴建物が認められず、検出される遺構は小規模な土坑及びピットがみられることから、住居を構築するには適当な状態ではなかったと考えられる。そして調査区北半部の微低地の最終埋没は、出土遺物に須恵器が含まれることから古墳時代中期以降と考えられる。

以上の各段階における微地形及び遺構の分布状況からみて、古墳時代初頭から前期の調査地周辺は、紀ノ川北岸に隣接する標高4.40m前後を測る比較的低地であった可能性がある。特に既往の調査結果では直川用地南側を東西に限る六箇井用水の以南は、旧紀ノ川の氾濫原であったことが明らかとなっている。よって今回の調査で確認された古墳時代初頭から前期の集落は、紀ノ川に隣接する比較的低地に散

在する微高地上部に形成されたものと考えられる。つまり、この時期に形成された集落の占地は、このように地形を大きく改変することなく、利用しながら行われた可能性がある。

特に、注目されるのは微地形と竪穴建物及び溝などの位置関係である。今回の調査において検出された溝は、前述のとおり大半が微低地と考えられる落ち込みの縁辺部に沿うものであり、言い換えれば微高地と微低地を区画するものであった可能性が高い。これらの溝には、その掘削深などの形状及び規模からSD－２・20のように灌漑用水路と考えられるものの他、SD－14・23・24のように区画溝と考えられるものなど性格の違いはあるものの、その掘削位置は微高地の縁辺部と考えられる。また、当然のことながら竪穴建物の立地についても地形に左右されると考えられる。今回の調査では、建物の主軸について関連性が認められた。

微地形と遺構分布の関連性については、紀ノ川南岸において平成３年財団法人和歌山市文化体育振興事業団が行った鳴神Ｖ遺跡の調査例がある。鳴神Ｖ遺跡では、微高地上部に方墳群が立地し、微高地の縁辺部に灌漑用水路が、また微低地部には小区画水田が検出され、古墳時代前期から中期の土地利用のあり方を示す成果が報告されている。今回の調査結果についても、古墳時代初頭から前期における土地利用のあり方を示す好例と考えられる。

次に、田屋遺跡内部の遺構分布とその様相について述べる。田屋遺跡内部では、これまで遺跡範囲の中央部において弥生時代後期後葉の竪穴建物３棟、古墳時代初頭の竪穴建物８棟、古墳時代中期から後期の竪穴建物43棟の他、古墳時代以降の掘立柱建物20棟、自然流路などが検出されている。これらの調査成果から考えられる遺跡の存続時期は、弥生時代後期後葉古墳時代中期以降とされている（第３図）。また遺跡の盛行時期は古墳時代中期から後期にかけてと考えられる。今回の調査では、古墳時代初頭から前期の遺構及び遺物が主体となり、その前後の時期である弥生時代後期及び古墳時代中期以降の遺構及び遺物がきわめて希薄な状況である。つまり、今回検出した集落の存続時期は、古墳時代初頭から前期という一定期間に限られたものであり、既往の調査における集落の存続期間より短いものとなる。このことは、偶然にも今回の調査範囲内のみでは古墳時代中期以降の遺構を検出できなかったとも考えられるが、集落の形成時期やその背景が異なる可能性が高い。調査地周辺において、既往の調査成果と類似する成果としては、今回の調査地の南側隣接地内の調査である第２次発掘調査成果がある。この調査では、直川用地の南半部に展開するとみられる微高地上部において、古墳時代前期の溝や土坑、中期の掘立柱建物、後期に埋没した溝の他、平安時代前期に埋没した大溝などが検出されており、遺跡中央部に形成された集落と同時期に存在していたものと考えられる。

つまり今回検出された集落は、紀ノ川北岸の平野部において、弥生時代後期後葉から継続的に発展し形成された集落ではないと考える。集落形成の背景としては、SD－２・20が示すように灌漑技術の向上を背景として、古墳時代初頭から前期に紀ノ川の隣接地である微低地を可耕地として開発し、その可耕地の拡大を目的として進出してきた人々の集落とみることができる。また、その進出の契機となった原動力は、SB－２から出土した鉄器（鉄製刀子・鉄製鎌）や砥石などが示すように、鉄製工具及び農耕具を使用し効率良く開発できる労働力であったと考えられる。また第２次発掘調査において確認された遺構群は、当該集落を基盤として、より発達した灌漑技術をもって発展した集落と考えられる。

第２節　竪穴建物

調査地周辺に分布する古墳時代集落としては、調査地の北東約700mの標高25mを測る丘陵上に位置する府中Ⅳ遺跡がある。府中Ⅳ遺跡は、弥生時代後期後葉から古墳時代前期にかけて営まれた集落である。これまでの４次にわたる調査によって、弥生時代後期の平面形が円形を呈する竪穴建物７棟、古墳時代初頭（庄内式併行期）から古墳時代前期（布留式併行期）にかけての平面形が方形を呈する竪穴建物15棟が検出されており、古墳時代初頭に中心時期がある。そのうち、古墳時代の竪穴建物のなかには、ベッド状遺構や建物内部から直線的にのびる溝（排水溝）をもつ建物がある。これらの竪穴建物に付随する施設については、今回の調査においてもSI－２・６・７・８においてベッド状遺構を検出し、SI－１・３・６・７においては排水溝とみられるSD－15・16・22を確認した。よって、府中Ⅳ遺跡においてみられる古墳時代初頭の竪穴建物群と、今回検出した竪穴建物群はその構造が類似していると言える。さらに、今回の調査で検出した各竪穴建物の炉に関する共通性として、SI－２及びSI－１・３・６・７において検出されたSK－７・12・19、P－232では、その南西部に火熱による赤変及び焼土の堆積が認められた。この共通性が何を意味するのかについては、SI－２やSI－６・７で検出したベッド状遺構と入り口の方向性が関係していると考える。SI－２では、炉壁の赤変及び焼土の堆積方向である南西部にベッド状遺構の途切れる部分があり入り口と判断された。またSI－６・７においても同様のことが観察された。つまり、各建物の炉において確認された炉壁の赤変部と焼土の堆積方向は、その建物への入り口の方向を示している可能性が高いと考える。

最後に竪穴建物からみた集落の特徴としては、SI－１・３・６・７は同じ場所に４棟の建物が重複して構築されたものであり、前節において検討したように、遺構の重複関係及び出土遺物から大きく４段階の変遷を想定した。このことはこの集落が一時的なものではなく、古墳時代初頭から前期というある一定期間に継続して営まれたことを示すものとして重要である。また、府中Ⅳ遺跡で検出された竪穴建物との構造上の類似性は、府中Ⅳ遺跡において検出された集落が、時期的にみて今回検出された集落より一段階古く位置付けられるものであり、その前身集落であったことを示すものである。

参考文献

『鳴神Ｖ遺跡発掘調査概要報告書－和歌山市都市計画道路松島本線建設に伴う調査報告－』
財団法人和歌山市文化体育振興事業団　1994
北野隆亮「鳴神Ｖ遺跡検出の古墳時代水田について」『和歌山地方史研究29・30』和歌山地方史研究会　1996
『和歌山市内遺跡発掘調査概報－平成16年度－』和歌山市教育委員会　2006
『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報－平成19年度（2007年度）－』
財団法人和歌山市都市整備公社　2010

第６章　自然科学分析

第１節　ガラス玉の蛍光Ｘ線分析による元素分析

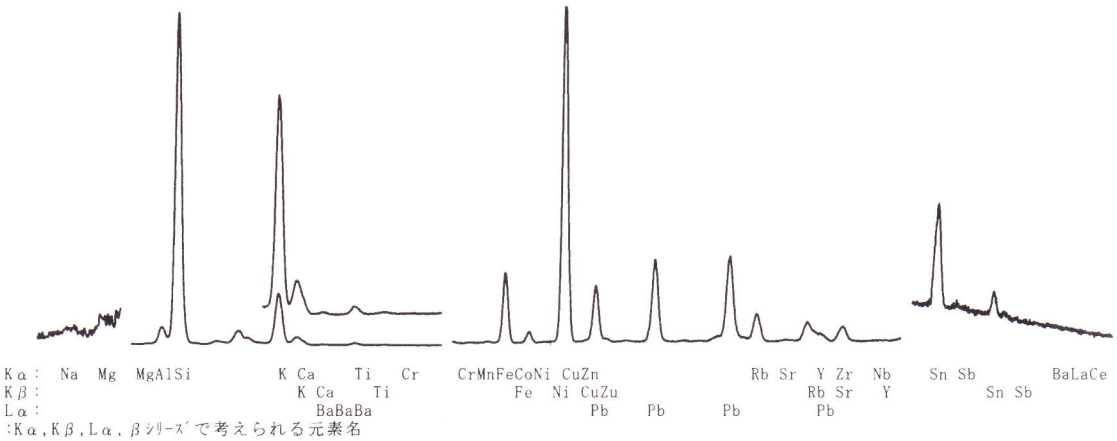
有限会社遺物材料研究所
藁科哲男

古代ガラスは大別すると鉛ガラスとアルカリ石灰ガラスに分類されている。分析を行ったガラス玉は古墳時代前期の１個で分析部位を変えて、穴側Ａ面、穴Ａ面反対穴面、背面の３箇所の部位について化学組成分析を行った結果を表２に示した。ガラス玉の蛍光Ｘ線スペクトルは穴Ａ面反対穴面の蛍光Ｘ線分析スペクトルを第38図に示した。蛍光Ｘ線スペクトルは元素含有量に比例した高さの元素ピークが多数観測されている。ガラス小玉で確認された元素は、ナトリウム(Na)、マグネシウム(Mg)、アルミ(Al)、シリカ(Si)、カリ(K)、カルシウム(Ca)、チタン(Ti)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)、銅(Cu)、ルビジウム(Rb)、ストロンチウム(Sr)、ジルコニウム(Zr)、錫(Sn)、バリウム(Ba)、鉛(Pb)である。ガラス玉の化合物元素成値(表１)はマトリックス効果を考慮したガラス標準試料による校正を行った結果ではなく、また、試料は絶対定量分析で行う、試料成形などを行ったものではなく、出土したガラス玉を水洗し、非破壊状態で、セイコ製SEA2110L型蛍光Ｘ線分析装置付属のソフトのスタンダードレスによるFP(ファンダメンタルパラメータ)法を用い相対含有量（Wt %）を求めた結果である。銅、錫、鉛の元素が青銅器成分が含有されたガラス玉は酸化鉛の含有量が0.8%以下で少なく、また比重も2.334で鉛ガラスではない。今回分析したガラス玉の特徴はアルカリ石灰ガラスでカリの含有量が多くカリ石灰ガラスと言える。ガラスの着色の酸化第一銅は還元条件で銅赤色に、酸化条件で青緑色に着色する。また酸化鉄は還元条件で青色に酸化条件で黄褐色に着色することが知られている。Snは清澄剤としての働きがある。また、穴側Ａ面、穴Ａ面反対穴面、背面の３箇所の部位の化合物元素濃度の変動は、各部位の元素の含有量の不均一性、不定型による分析装置と遺物の幾何学的関係の違い、分析表面の風化・汚染の近い、分析装置の誤差などが関係したと思われる。第39図にガラス玉のESR分析を示した。ESR分析はガラス玉に含有されているイオン、色中心などの常磁性種を分析し、その信号を、遺物間でESRスペクトルを比較することにより、同じ様なガラス素材から作られた玉か推測する参考資料となる。ESRの測定は完全な非破壊分析であり、直径が11㎜以下の玉なら分析は可能で、小さい物は胡麻粒大のものでも分析ができる場合がある。第40図に示す秋月遺跡出土の青色ガラス玉、赤色ガラス玉のESRスペクトルと比較した結果、田屋遺跡出土青色ガラス玉は秋月遺跡出土青色ガラス玉(985－29)と同じESRスペクトルと同定され、同じガラス素材で作られた玉が両遺跡で使用されている可能性が推測できた。

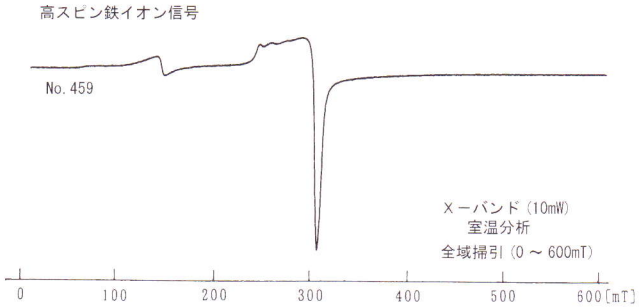
表２　田屋遺跡第６次調査出土古墳時代前期の青色ガラス玉の化合物元素濃度分析結果

発掘注記	分析部位	分析番号	化合物元素組成(Wt%)									
			Na_2O	MgO	Al_2O_3	SiO_2	K_2O	CaO	TiO_2	MnO	FeO	Co_2O_3
第6次	穴側A面	112669-1	3.4087	2.5063	9.4224	73.5992	6.4437	0.3156	0.2478	0.0267	0.6381	0.0000
P-261	A反対側穴面	112669-2	1.2766	1.4331	9.1703	75.9552	6.9446	0.3467	0.2766	0.0285	0.7088	0.0000
No.459	背面	112669-3	0.9309	1.3544	8.7863	75.8132	6.7066	1.1817	0.4606	0.0238	0.7582	0.0000

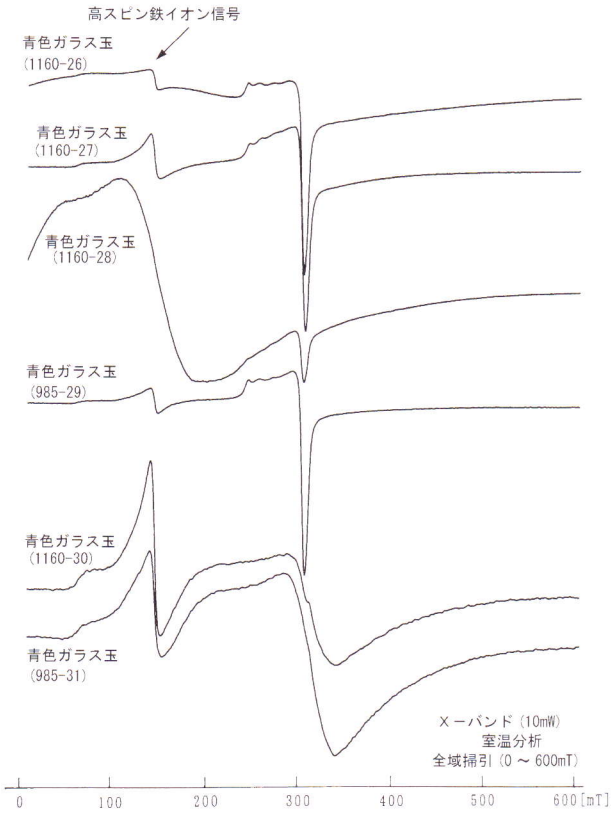
化合物元素組成(Wt%)								重量	比重
CuO	PbO	Br	Rb_2O	SrO	ZrO_2	SnO_2	BaO	gr	
2.4388	0.6342	0.0018	0.0614	0.0034	0.0311	0.2156	0.0052	0.12773	2.334
2.7483	0.7317	0.0021	0.0729	0.0043	0.0358	0.2612	0.0036		
2.8830	0.7333	0.0022	0.0715	0.0040	0.0328	0.2541	0.0034		



第38図　田屋遺跡第６次調査出土青色ガラス玉NO.459（112669）の蛍光Ｘ線スペクトル



第39図　田屋遺跡出土青色ガラス玉のＥＳＲスペクトル



第40図　秋月遺跡出土ガラス玉のＥＳＲスペクトル

第２節　和歌山市田屋遺跡第６次発掘調査における自然科学分析（土壌分析）

株式会社古環境研究所

Ⅰ．プラント・オパール分析

１．はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（SiO_2）が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山，1984）。

ここでは、田屋遺跡第６次発掘調査における稲作の可能性を検討する目的で、プラント・オパール分析を行った。

２．試料

分析試料は、基本層序の第４層下位と第５層下位より採取された２点である。試料は、いずれも発掘調査担当者によって採取され当社に送付されたものである。

３．分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、ガラスビーズ法（藤原，1976）を用いて、次の手順で行った。

１）試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
２）試料約１gに対し直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加
３）電気炉灰化法（550℃・６時間）による脱有機物処理
４）超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
５）沈底法による20μm以下の微粒子除去
６）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
７）検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパールを対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試料１gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率を乗じて、試料１g中の植物珪酸体個数を求めた。また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重、単位：10^{-5}g）を乗じて、単位面積で層厚１cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる。各分類群の換算係数は、イネ（赤米）は2.94（種実重は1.03）、ススキ属（ススキ）は1.24、ネザサ節は0.48、チマキザサ節は0.75である（杉山，2000）。

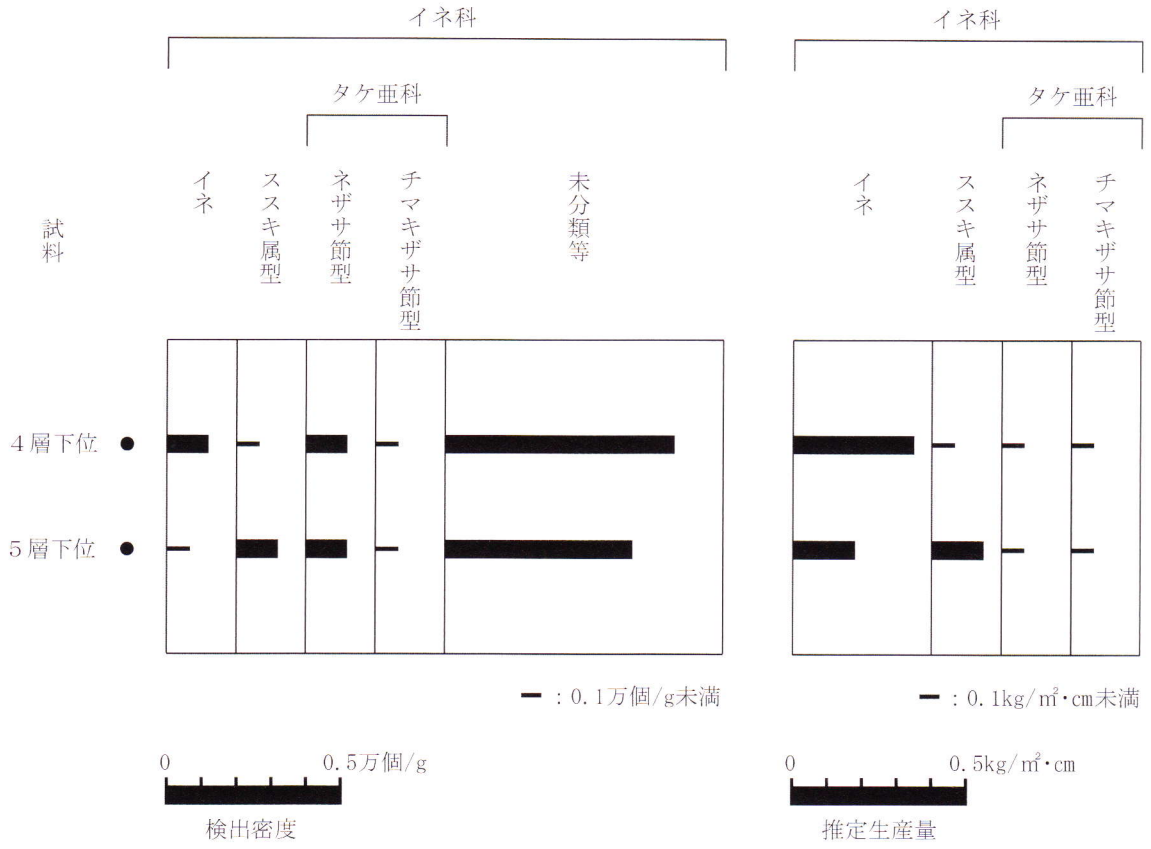
表３　田屋遺跡第６次調査におけるプラント・オパール分析結果

検出密度（単位：×100個/g）

分類群（和名・学名）＼層位		4層下位	5層下位
イネ科	Gramineae (Grasses)		
イネ	*Oryza sativa*	*12*	*6*
ススキ属型	*Miscanthus* type	*6*	*12*
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)		
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa	*12*	*12*
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.	*6*	*6*
未分類等	Unknown	*66*	*54*
プラント・オパール総数	Total	*102*	*90*

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/m²・cm）

イネ	*Oryza sativa*	*0.35*	*0.18*
ススキ属型	*Miscanthus* type	*0.07*	*0.15*
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa	*0.06*	*0.06*
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.	*0.05*	*0.04*



第41図　田屋遺跡第６次調査におけるプラント・オパール分析結果

4．分析結果

分析試料から検出されたプラント・オパールは、イネ、ススキ属型、タケ亜科（ネザサ節型、チマキザサ節型）および未分類である。これらの分類群について定量を行い、その結果を表３と第41図に示した。主要な分類群については顕微鏡写真を示す。以下に、プラント・オパールの検出状況を記す。なお、機動細胞珪酸体の生産量は植物種によって異なることから、検出密度の評価は各植物で相違する。

第４層下位と第５層下位では、プラント・オパール組成は概ね類似しており、イネ、ススキ属型、ネザサ節型およびチマキザサ節型が各試料から検出された。プラント・オパール密度はいずれも低い値である。

5．考察

稲作跡（水田跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料１gあたりおよそ5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している（杉山，2000）。ただし、近年の調査例では密度が3,000個／g程度でも水田遺構が検出された事例が多く報告されていることから、5,000個は一応の目安であり、プラント・オパールの産出状況や遺構の状態をふまえて検討する必要がある。

第４層下位と第５層下位について分析を行った結果、両層からイネが検出された。プラント・オパール密度はそれぞれ1,200個／gと600個／gであり、ともに低い値である。また、花粉分析においてもイネ属型花粉は検出されていない（Ⅱ章参照）。このことから、これらの層において稲作が行われていた可能性を積極的に肯定することはできない。仮に稲作が行われていたならば、耕作地は調査地の周辺であったと思われる。

イネ以外の分類群では、ススキ属型、ネザサ節型およびチマキザサ節型が少量ではあるが認められることから、第４層と第５層の堆積当時の調査地周辺は、比較的乾いた草地の環境であったと推定される。

6．まとめ

田屋遺跡第６次発掘調査の古墳時代前期の堆積層である第４層下位、第５層下位においてプラント・オパール分析を行い、稲作の可能性について検討を行った。両層準よりイネのプラント・オパールが検出されたものの、いずれも低密度であった。また、花粉分析においてもイネ属型花粉は検出されなかった。こうしたことから、調査地において稲作が行われていた可能性を積極的に肯定することはできなかった。

文献

杉山真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞珪酸体．富士竹類植物園報告，31，p.70－83.

杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学．同成社，p.189－213.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（１）
－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，９，p.15－29.

藤原宏志（1998）稲作の起源を探る．岩波新書.

Ⅱ．花粉分析・寄生虫卵分析

1．はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復元に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。同時に寄生虫卵分析を行うことにより、生活域の確認や人糞施肥の有無、あるいはトイレ遺構を確認することも可能である。しかし、花粉や寄生虫卵などの有機物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

ここでは、田屋遺跡第６次発掘調査における農耕と植生、および堆積環境（生活汚染の状況）を検討する目的で、花粉分析と寄生虫卵分析を行った。

2．試料

分析試料は、基本層序の第４層下位と第５層下位より採取された２点、SX－１（第１層、第２層、第３層）より採取された３点、SD－15（第２層）より採取された１点、SD－16（第２層）より採取された１点、SK－10（第４層）より採取された１点の計８点である。

3．方法

花粉・寄生虫卵の分離抽出は、中村（1967）の方法をもとに、以下の手順で行った。

1）試料から１cm^3を採量
2）0.5％リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加え15分間湯煎
3）篩別により大きな砂粒や木片等を除去し、沈澱法を施す
4）25％フッ化水素酸を加え30分静置（２・３度混和）
5）水洗後サンプルを２分
6）２分したサンプルの一方にアセトリシス処理を施す
7）両方のサンプルを染色後グリセリンゼリーで封入しそれぞれ標本を作製
8）検鏡は、プレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300～1000倍で行う

基本的にアセトリシス処理を施したプレパラートで花粉分析、アセトリシス処理を施していないプレパラートで寄生虫卵分析を行う。以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500rpm、２分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるという操作を３回繰り返して行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示す。イネ属については、中村（1974, 1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。また、この処理を施すとクスノキ科の花粉は検出されない。

4．花粉分析結果

（1）分類群

出現した分類群は、樹木花粉22、樹木花粉と草本花粉を含むもの４、草本花粉20、シダ植物胞子２形

態の計48である。これらの学名と和名および粒数を表４に示し、花粉数が200個以上計数できた試料は、周辺の植生を復元するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを第42図に示す。なお、200個未満であっても100個以上の試料については傾向をみるため参考に図示し、主要な分類群は顕微鏡写真に示した。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

マキ属、モミ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、スギ、コウヤマキ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、ヤナギ属、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属－アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ、エノキ属－ムクノキ、カエデ属、ブドウ属、ハイノキ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科－イラクサ科、バラ科、マメ科、ゴマノハグサ科

〔草本花粉〕

ガマ属－ミクリ属、オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、イボクサ、ミズアオイ属、タデ属サナエタデ節、ギシギシ属、アカザ科－ヒユ科、ナデシコ科、キンポウゲ属、アブラナ科、キカシグサ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、ゴキヅル、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

（２）花粉群集の特徴

地点ごとに花粉群集の特徴を記載する。

１）第５層下位、第４層下位

樹木花粉が約40%、草本花粉が約55%～50%を占める。樹木花粉ではシイ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属がやや優占し、スギ、マツ属複維管束亜属などが出現する。草本花粉ではイネ科、ヨモギ属を主にカヤツリグサ科、タンポポ亜科、セリ亜科などが出現する。

２）SX－１（第３層、第２層、第１層）

いずれの層においても花粉組成、花粉構成の傾向は類似する。草本花粉の占める割合が高く、約60%～65%を占める。草本花粉ではイネ科（イネ属型を含む）、ヨモギ属が優占し、チドメグサ亜科、オモダカ属、ミズアオイ属、カヤツリグサ科などが伴われる。上位に向かいイネ科は増加し、ヨモギ属は減少する。樹木花粉ではシイ属、コナラ属アカガシ亜属がやや多く、コナラ属コナラ亜属、スギ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、マツ属複維管束亜属などが出現する。

３）SD－15（第２層）

花粉密度が極めて低く、草本花粉のアブラナ科がわずかに出現する。

４）SD－16（第２層）

花粉密度が極めて低く、樹木花粉のコナラ属アカガシ亜属がわずかに出現する。

５）SK－10（第４層）

花粉密度が極めて低く、草本花粉のヨモギ属がわずかに出現する。

5．寄生虫卵分析結果

1）第５層下位、第４層下位

いずれの層においても寄生虫卵および明らかな消化残渣は検出されない。

2）SX－１（第３層、第２層、第１層）

いずれの層からも、寄生虫卵および明らかな消化残渣は検出されない。

3）SD－15（第２層）

寄生虫卵および明らかな消化残渣は検出されない。

4）SD－16（第２層）

寄生虫卵および明らかな消化残渣は検出されない。

5）SK－10（第４層）

寄生虫卵および明らかな消化残渣は検出されない。

6．花粉・寄生虫分析から推定される植生と環境

地点ごとに花粉群集の特徴から植生および環境の復元を行う。

1）第４層下位、第５層下位

近隣にはコナラ属アカガシ亜属、シイ属を主要構成要素とする照葉樹林が主要に分布し、コナラ属コナラ亜属の落葉広葉樹、スギ林、ニヨウマツ林（マツ属複維管束亜属）の森林も分布していた。堆積地はイネ科、乾燥を好むヨモギ属を主にカヤツリグサ科、タンポポ亜科、セリ亜科などの草本が繁茂する開地が分布していた。寄生虫卵は検出されず、直接的には生活汚染の影響を受ける堆積ではなかったと推定される。

2）SX－１（第１層、第３層、第２層）

SX－１の周辺には、イネ科とヨモギ属が多いが、イネ属型が水田雑草のオモダカ属、ミズアオイ属などを伴って検出されることから、開地と水田が分布していたとみなされる。上位の第１層、第２層では、より水田の影響を受けたと考えられる。近隣には、シイ属、コナラ属アカガシ亜属などの照葉樹林、コナラ属コナラ亜属などの落葉樹、スギ林、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、マツ属複維管束亜属などの針葉樹の森林も分布していた。土坑からは寄生虫卵が検出されず、生活汚染の影響を受けたり、糞便が混入するような性格の土坑ではなかったと考えられる。

3）SD－15（第２層）

花粉密度が極めて低い。花粉や寄生虫卵などの有機質遺体が分解される乾燥した堆積環境であったか、堆積速度が速かったと考えられる。溝は、乾燥あるいは乾湿を繰り返す堆積環境であったとみなされる。

4）SD－16（第２層）

花粉密度が極めて低く、花粉、寄生虫卵などの有機質遺体が分解される乾燥した堆積環境であったか、堆積速度が速かったと考えられる。溝は、乾燥か乾湿を繰り返す堆積環境であったとみなされる。

5）SK－10（第４層）

花粉密度が極めて低い。花粉、寄生虫卵などの有機質遺体が分解される乾燥した堆積環境であったか、堆積速度が速かったと考えられる。土坑は、乾燥あるいは乾湿を繰り返す堆積環境であったとみなされる。

7．まとめ

田屋遺跡第６次発掘調査の古墳時代前期（約1700年前）の堆積層、および遺構内堆積物の花粉分析と寄生虫卵を行った。その結果、第４層下位、第５層下位では堆積地周辺はイネ科、乾燥を好むヨモギ属を主とする草本が繁茂する開地の分布が示唆された。SX－１では周囲にはイネ科とヨモギ属の草本が多いが、周辺には水田の分布が推定された。地域的森林としてはコナラ属アカガシ亜属、シイ属を主要構成要素とする照葉樹林の分布が示唆された。SD－15（第２層）、SD－16（第２層）、SK－10（第４層）からは、花粉がほとんど検出されず、乾燥か乾湿を繰り返す堆積環境が推定された。

いずれの堆積層、遺構の堆積物からも寄生虫卵は検出されず、直接的には生活汚染の影響を受けるような堆積ではなかったと考えられた。

参考文献

金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法，角川書店，p.248－262.

島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第５集，60p.

中村純（1967）花粉分析．古今書院，p.82－102.

中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ（Oryza sativa）を中心として.第四紀研究,13,p.187－193.

中村純（1977）稲作とイネ花粉．考古学と自然科学，第10号，p.21－30.

中村純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第13集，91p.

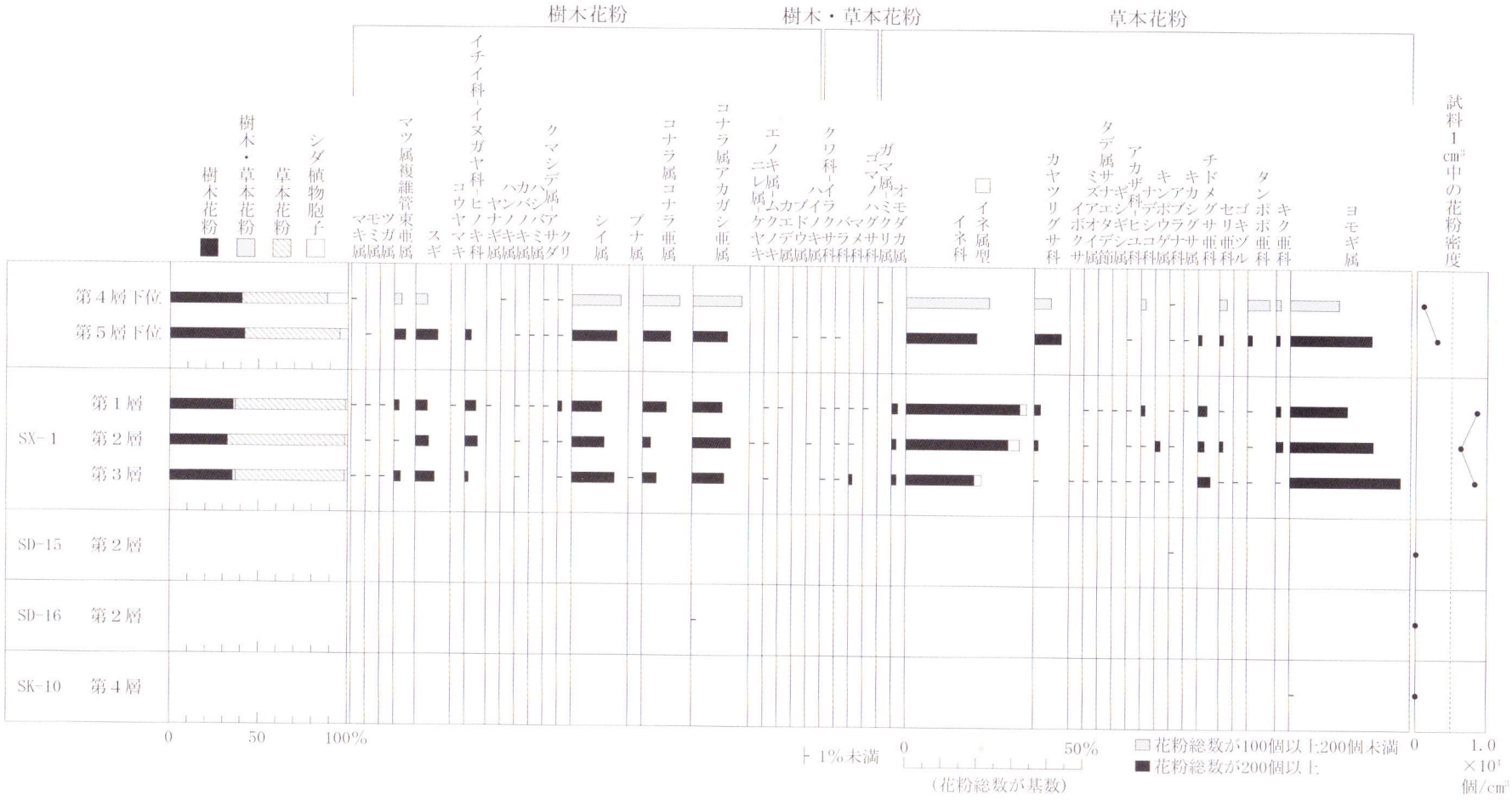
金原正明・金原正子（1992）花粉分析および寄生虫．藤原京跡の便所遺構－藤原京７条１坊－，奈良国立文化財研究所，p.14－15.

金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法，角川書店，p.248－262.

金原正明（1999）寄生虫．考古学と動物学，考古学と自然科学，２，同成社，p.151－158.

表４　田屋遺跡第６次調査における寄生虫卵・花粉分析結果

分類群				SX-1			SD-15	SD-16	SK-10
学名	和名	第４層下位	第５層下位	第１層	第２層	第３層	第２層	第２層	第４層
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Arboreal pollen	樹木花粉								
Podocarpus	マキ属	1		1		2			
Abies	モミ属		2	1	1	1			
Tsuga	ツガ属			1		2			
Pinus subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属	3	15	6	3	8			
Cryptomeria japonica	スギ	5	30	14	18	23			
Sciadopitys verticillata	コウヤマキ			1					
Taxaceae-Cephalotaxaceae -Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科		8	13	17	4			
Salix	ヤナギ属			1					
Alnus	ハンノキ属	1							
Betula	カバノキ属		1	2	2	1			
Corylus	ハシバミ属		2	2					
Carpinus-Ostrya japonica	クマシデ属-アサダ	1	3	1	1				
Castanea crenata	クリ	1	3	5	4	2			
Castanopsis	シイ属	20	60	35	43	51			
Fagus	ブナ属					1			
Quercus subgen. *Lepidobalanus*	コナラ属コナラ亜属	15	37	28	11	17			
Quercus subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属	20	46	35	51	38		1	
Ulmus-Zelkova serrata	ニレ属-ケヤキ				1				
Celtis-Aphananthe aspera	エノキ属-ムクノキ			3	1	2			
Acer	カエデ属			1					
Vitis	ブドウ属		1						
Symplocos	ハイノキ属				1				
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉								
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科		1	2		2			
Rosaceae	バラ科		1	2	1	1			
Leguminosae	マメ科			1	1	4			
Scrophulariaceae	ゴマノハグサ科			1					
Nonarboreal pollen	草本花粉								
Typha-Sparganium	ガマ属-ミクリ属	1							
Sagittaria	オモダカ属			7	6	6			
Gramineae	イネ科	34	93	133	135	81			
Oryza type	イネ属型		1	8	15	9			
Cyperaceae	カヤツリグサ科	7	36	8	6	3			
Aneilema keisak	イボクサ					1			
Monochoria	ミズアオイ属			3	2	2			
Polygonum sect. *Persicaria*	タデ属サナエタデ節			1		1			
Rumex	ギシギシ属			1		1			
Chenopodiaceae -Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科		1	1	3	2			
Caryophyllaceae	ナデシコ科	2		5	3	1			
Ranunculus	キンポウゲ属				7	2			
Cruciferae	アブラナ科	1	1	2	2	1	1		
Rotala	キカシグサ属		3	3					
Hydrocotyloideae	チドメグサ亜科		5	11	9	15			
Apioideae	セリ亜科	3	5	3	5	3			
Actinostemma lobatum	ゴキヅル					1			
Lactucoideae	タンポポ亜科	9	6	1	2	1			
Asteroideae	キク亜科	2	5	6	10	1			
Artemisia	ヨモギ属	20	109	67	110	131			1
Fern spore	シダ植物胞子								
Monolate type spore	単条溝胞子	10	9	1	1	2			
Trilate type spore	三条溝胞子	9	13	4	7	6	1	2	
Arboreal pollen	樹木花粉	67	208	150	154	152	0	1	0
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	0	2	6	2	7	0	0	0
Nonarboreal pollen	草本花粉	79	265	260	315	262	1	0	1
Total pollen	花粉総数	146	475	416	471	421	1	1	1
Pollen frequencies of 1cm^3	試料1cm^{3}中の花粉密度	1.0 ×10^3	2.9 ×10^3	8.6 ×10^3	6.3 ×10^3	8.3 ×10^3	1.2 ×10	0.5 ×10	0.4 ×10
Unknown pollen	未同定花粉	2	13	12	7	16	1	0	0
Fern spore	シダ植物胞子	19	22	5	8	8	1	2	0
Charcoal fragments	微細炭化物	(-)		(++)	(++)	(++)	(+)	(+)	(+)



第42図　田屋遺跡第６次調査における花粉ダイアグラム

出土遺物観察表

凡　　例

1　遺物番号は、遺物実測図番号を示す。

2　計測値欄の（　　）は復元径、残存高、残存重量を示す。

3　残存率１／10未満は、「小片」、１／20以下は「細片」とそれぞれ記述した。

4　観察表の作成にあたっては、主に以下の文献を参考とした。

・古墳時代の土器

財団法人大阪府文化財センター　2003　『古墳出現期の土師器と実年代』

田辺昭三　1981　『須恵器大成』　角川書店

・古代の土器

古代の土器研究会編　1992～1994　『古代の土器集成』Ⅰ～Ⅲ　真陽社

・銭貨

永井久美男編　1996　『日本出土銭総覧』（1996年度）　兵庫埋蔵銭研究会

目　　次

表１　（土器類）…… 51

表２　（土製品）…… 53

表３　（石器・石製品）…… 53

表４　（金属器）…… 53

表５　（銭貨）…… 53

表６　（ガラス製品）…… 53

表1　出土遺物観察表（1）

遺物番号	挿図番号	出土地区・遺構・層位	器種	計測値（cm）	形態の特徴	技法	胎土・焼成	色調	残存率	備考
2	第7図 図版18	第3区 第6層	土師器 杯	器高　(4.0)	高台は剥落している。外面体部は摩滅気味。	口縁　ヨコナデ 体部外　回転ナデ 体部内　ヘラミガキ	胎土：密　赤色軟質粒 焼成：良好	外：黄褐色 内：淡褐色	細片	第2次発掘調査出土
3	第7図 図版18	第3区 第6層	土師器 杯	口径　(15.2) 高台径　(8.3) 器高　(4.2)	内彎する体部に断面方形の外開きの高台を貼り付けている	口縁　ヨコナデ 体部外　回転ナデ 体部内　ナデ	胎土：やや粗　赤色軟質粒・白色粒 焼成：良好	内外：淡褐色～灰色	口縁～高台1/4	第2次発掘調査出土
4	第7図 図版18	第3区 第6層	土師器 杯	口径　17.1 高台径　8.4 器高　4.6～5.1	内彎する体部に外開きの高台を貼り付けている。	口縁　ヨコナデ 体部外　回転ナデ 体部内　ナデ	胎土：密　結晶片岩・石英・赤色軟質粒 焼成：良好	内外：明褐色～黄灰色	完形	第2次発掘調査出土
5	第7図 図版18	第3区 第6層	土師器 甕	口径　(29.4) 器高　(11.9)	口縁部は体部から「く」の字状に屈曲し開く。口縁端部には面をもつ。	口縁　ヨコナデ 体部外　タテ・ヨコハケ 体部内　ナデ	胎土：密　結晶片岩・石英・赤色軟質粒 焼成：良好	外：暗褐色 内：黄褐色	口縁～体部1/6	第2次発掘調査出土
6	第11図 図版18	第1区 SD-8 第1層	土師器 複合口縁壺又は甕	器高　(6.7)	複合口縁の壺又は甕と考えられる。口縁端部は内側に丸く肥厚させている。器面は摩滅が著しい。	口縁　ヨコナデ 口縁外　ナナメハケ 口縁内　ナデ	胎土：やや粗　結晶片岩・石英 焼成：やや軟	外：淡黄褐色 内：黄灰色	細片	第2次発掘調査出土
7	第11図 図版18	第1区 SD-8 上層	土師器 高杯	脚径　(11.7) 器高　(7.1)	器面は摩滅が著しい。	脚端部　ヨコナデ	胎土：密　結晶片岩・赤色軟質粒・石英 焼成：軟	内外：淡赤褐色	脚柱部～脚部1/3	第2次発掘調査出土
8	第11図 図版18	第1区 SD-8 上層	須恵器 杯蓋	口径　(13.4) 器高　(4.1)	口縁部から天井部の境に突帯がめぐる。口縁端部は面をもち、内側に強いヨコナデを施す。	口縁　ヨコナデ 体部外　ヨコナデ 体部内　ヨコナデ	胎土：緻密 還元：良好 焼成：良好	内外：淡灰色	口縁～天井部1/8	第2次発掘調査出土
9	第11図 図版18	第1区 SD-8 上層	須恵器 杯蓋	口径　14.6 器高　4.5	口縁部と天井部の境は、稜をもたず沈線がめぐる。口縁端部内面には沈線がめぐる。	口縁　ヨコナデ 体部外　ヨコナデ 体部内　ヨコナデ	胎土：緻密　白色粒 還元：良好 焼成：良好	内外：灰色	ほぼ完形	第2次発掘調査出土
10	第11図 図版18	第1区 SD-8 上層	須恵器 杯身	口径　(11.8) 器高　4.6	受け部は断面三角形状を呈する。体部の約1/2にヘラケズリを施す。底面に「×」印のヘラ記号あり。	口縁　ヨコナデ 体部外　ヨコナデ 体部内　ヨコナデ	胎土：緻密　白色粒 還元：良好 焼成：良好	内外：明灰色	底部完存～口縁1/4	第2次発掘調査出土
11	第11図 図版18	第1区 SD-8 上層	須恵器 杯身	口径　(12.8) 器高　5.2	受け部は断面三角形状を呈する。体部の約2/3にヘラケズリを施す。底面に「×」印のヘラ記号あり。	口縁　ヨコナデ 体部外　ヨコナデ 体部内　ヨコナデ	胎土：緻密　白色粒 還元：良好 焼成：良好	内外：暗赤褐色	底部～受け部1/4	第2次発掘調査出土
12	第11図 図版18	第1区 SD-8 上層	須恵器 高杯	脚径　(10.7) 器高　(8.4)	脚部に長方形二段透かしを3方向に配し、脚柱部と脚部の境及び脚部中位に突帯有り。脚端部は面をもつ。	体部外　ヨコナデ 体部内　ヨコナデ 脚部　ヨコナデ	胎土：緻密　白色粒 還元：良好 焼成：良好	内外：淡灰色	脚柱部～脚部2/3	第2次発掘調査出土
13	第11図 図版18	第1区 SD-8 上層	土師器 無頸鉢	口径　(16.1) 器高　(4.3)	口縁部を外方に肥厚させ、肉厚の体部をもつ。器面は摩滅が著しい。朝鮮半島系のものと考えられる。	口縁　ヨコナデ	胎土：粗　石英・長石 焼成：軟	内外：淡褐色	口縁小片	第2次発掘調査出土
16	第11図 図版19	第1区 SD-9 上層	土師器 高杯	脚径　(10.2) 器高　(5.8)	低脚の高坏である。器面の摩滅が著しい。	脚端部　ヨコナデ	胎土：密　石英・赤色軟質粒 焼成：軟	内外：明褐色	脚部完存	第2次発掘調査出土
17	第11図 図版19	第1区 SD-12 上層	須恵器 杯蓋	口径　(14.2) 器高　(1.0)	扁平な体部につまみがつくものである。	口縁　ヨコナデ 体部外　ヨコナデ 体部内　ヨコナデ	胎土：緻密　白色粒 還元：良好 焼成：良好	外：灰色 内：明灰色	口縁～体部1/8	第2次発掘調査出土
18	第15図 図版19	第5層	土師器 複合口縁壺	口径　(21.8) 器高　(12.3)	直立気味に立ち上がる複合口縁を有するもので、口縁部下位に4条の沈線がめぐる。口縁端部は肥厚する。	口縁　ヨコナデ 頸部外　ヨコナデ 頸部内　ヨコナデ	胎土：密　結晶片岩・石英・赤色軟質粒 焼成：良好	内外：淡褐色	口縁～頸部1/8	西部瀬戸内系
19	第15図 図版19	第5層	土師器 台付甕	器高　(3.9)	脚台部のみ残存する。器面の摩滅がみられる。	体部外　タテハケ 体部内　工具痕、ナデ？ 脚部内　指ナデ	胎土：密　石英・雲母 焼成：良好	内外：淡黄褐色～淡赤褐色	底部から脚部	東海産
20	第15図	第5層	土師器 高杯	口径　(16.8) 器高　(3.6)	器面の摩滅が著しい	口縁　ヨコナデ 杯部外　不明 杯部内　不明	胎土：やや粗　赤色軟質粒・石英 焼成：軟	外：灰黄褐色 内：黄褐色	口縁完存	
21	第15図 図版19	第5層	中国製 白磁 碗	高台径　(6.6) 器高　(5.8)	高台は削り出しによって成形される。釉薬は高台内には施されない。内面見込み部に沈線が1条めぐる。	体部外　施釉 体部内　施釉 高台内　露胎	胎土：緻密　細かな砂粒 焼成：良好	内外：白色	体部下半～高台1/3	
22	第18図 図版19	SI-2 第1層	土師器 高杯	器高　(5.5)	脚部に孔径9mmを測る円孔が3方向に穿たれている。脚部内面にタテ方向の工具痕あり。	杯部　不明 脚部外　不明 脚部内　工具痕	胎土：やや粗　結晶片岩・石英・赤色軟質粒 焼成：やや不良	内外：淡褐色	杯部下半～脚部残存	
23	第18図 図版19	SI-2 第1層	土師器 高杯	器高　(5.3)	口縁部から杯部の境に明瞭に稜を作り出すもので、短く外に開く脚柱部をもつ。器面は摩滅している。	杯部　不明 脚部外　タテハケ 脚部内　絞り目痕	胎土：密　石英・赤色軟質粒 焼成：良好	内外：明褐色	杯部下半～脚部残存	
24	第18図 図版19	SI-2 第1層	土師器 小型丸底鉢	口径　(10.2) 器高　(7.2)	丸底を呈するものの、底部周辺には指オサエを施し平底を意識している。内面に黒斑あり。	口縁　ヨコナデ 体部外　指オサエ・ナデ 体部内　ナデ	胎土：やや粗　結晶片岩・石英・赤色軟質粒 焼成：良好	内外：淡褐色	1/3	
25	第18図	SK-6 第4層	土師器 小型丸底鉢	口径　(11.1) 器高　(4.2)	丸味をもつ体部から短く屈曲する口縁部がのびるものである。器面の摩滅が著しい。	口縁　ヨコナデ？ 体部外　不明 体部内　不明	胎土：密　赤色軟質粒 焼成：良好	外：淡褐色 内：黄白色	口縁～体部1/8	
26	第18図 図版19	SI-2 第1層	土師器 低脚杯	口径　12.3 器高　5.6 脚径　4.8	椀形の体部に低く短い脚部がつくもので、脚部は外方へ張り出す。器面は摩滅している。	口縁　ヨコナデ 体部外　指オサエ・ナデ 体部内　不明	胎土：密　精良　石英・赤色軟質粒 焼成：良好	内外：淡黄褐色	4/5	山陰系
27	第18図 図版19	SD-17 第1層	製塩土器 脚台Ⅲ式	脚径　(4.0) 器高　(3.6)	短く外に張り出す脚部から、斜め上方に体部がのびるものである。器面は摩滅している。	体部外　タタキ 体部内　不明 脚部　指オサエ・ナデ	胎土：やや粗　赤色軟質粒 焼成：良好	内外：淡赤褐色	脚部完存	
34	第22図 図版20	SI-1 第1層	土師器 小型丸底壺	口径　(11.4) 器高　(4.9)	わずかに内彎し直線的に長くのびる口縁部である。器面は摩滅している。	口縁外　ヨコナデ 口縁内　ヨコナデ？ 体部　不明	胎土：密　石英・赤色軟質粒 焼成：やや軟	外：淡黄褐色 内：淡褐色	口縁1/3	
35	第22図 図版20	SI-1 第2層	土師器 小型丸底壺	口径　(11.1) 器高　(3.5)	わずかに内彎し直線的に短くのびる口縁部である。精製器種である。	口縁　ヨコナデ 口縁外　ヘラミガキ 口縁内　ヘラミガキ	胎土：密　赤色軟質粒 焼成：良好	内外：淡褐色	口縁1/8	
36	第22図 図版20	SI-1 第2層	土師器 甕	口径　(10.8) 器高　(2.7)	口縁端部は内側に丸く肥厚させている。口縁部から体部への屈曲部は丸味をもつ。器面は摩滅している。	口縁　ヨコナデ 口縁外　ナデ 口縁内　ナデ	胎土：粗　結晶片岩・石英 焼成：やや軟	内：淡赤褐色	口縁1/6	
37	第22図 図版20	SI-1 第1層	土師器 小型器台	口径　(9.7) 器高　(1.7)	口縁端部を丸くおさめるもので、やや肉厚のものである。	口縁　ヨコナデ 体部外　ヘラミガキ 体部内　ヨコナデ	胎土：やや粗　結晶片岩・石英 焼成：良好	外：黒色 内：淡黄白色	口縁1/8	
38	第22図 図版20	SI-1 第3層	土師器 小型器台	脚径　11.3 器高　(6.1)	「X」字状を呈する口縁部及び脚部をもつとみられるものである。器面は著しく摩滅している。	脚部　不明 脚部外　不明 脚部内　不明	胎土：やや粗　赤色軟質粒 焼成：軟	内外：淡黄褐色	脚部ほぼ完形	
39	第22図 図版20	SI-1 第1層	製塩土器 脚台Ⅲ式	脚径　(3.8) 器高　(4.7)	内彎する体部から外方へ短く張り出す脚部がつくものである。体部内面に付着物あり。	体部外　タタキ 体部内　ナデ 脚部　指オサエ・ナデ	胎土：やや粗　白色粒 焼成：良好	外：淡黄褐色 内：赤褐色	体部～脚部1/3	
40	第23図 図版20	SD-19 第1層	土師器 小型丸底鉢	口径　(14.8) 器高　(4.9)	浅く内彎する体部から短く段状に屈曲する口縁部（有段口縁）がのびるものである。器面は摩滅している。	口縁　ヘラミガキ 底部外　指オサエ 体部内　不明	胎土：密　結晶片岩・石英・赤色軟質粒 焼成：やや軟	内外：淡褐色	口縁～体部1/4	
41	第23図 図版20	SD-19 第1層	土師器 小型丸底鉢	口径　(13.2) 器高　(3.3)	浅く内彎する体部から短く段状に屈曲する口縁部（有段口縁）がのびるものである。精製器種。	口縁　ヘラミガキ 体部外　ヘラケズリ後ヘラミガキ 体部内　ヘラミガキ（タテ後ヨコ）	胎土：密 焼成：良好	内外：褐色	口縁から体部1/5	
42	第23図 図版20	SD-19 第1層	土師器 小型器台	底径　9.2 器高　5.8	「X」字状を呈する口縁部及び脚部をもつものである。器面は摩滅している。	口縁　ヨコナデ 脚部外　不明 脚部内　不明	胎土：密　赤色軟質粒 焼成：良好	内外：淡褐色	2/3	
44	第24図 図版20	SD-22	土師器 広口壺	口径　(16.2) 器高　(6.7)	やや外反してのびる口縁部であり、口縁端部はやや外方へ肥厚させ、上端部に面をもつものである。	口縁　ヨコナデ 口縁外　タテハケ 口縁内　ヨコハケ	胎土：密　結晶片岩・石英 焼成：良好	内外：淡褐色	口縁1/3	
45	第24図 図版20	SD-22	土師器 壺	底径　(3.0) 器高　(2.8)	やや上げ底状を呈する。器面は摩滅している。	底部外　指オサエ・ナデ 底部内　不明	胎土：密　石英 焼成：軟	内外：淡褐色	底部完存	

表1　出土遺物観察表（2）

遺物番号	挿図番号	出土位置	器種	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	胎土・焼成	色調	残存率	備考
46	第24図 図版20	P-232	土師器 甕	器厚　(6.6)	口縁部は内彎し、端部を丸く肥厚させている。口縁部から体部への屈曲部は丸味をもつ。器面は摩滅する。	口縁　ナデ 体部外　ハケ？ 体部内　ヘラケズリ	胎土：やや粗　結晶片岩・石英 焼成：良好	内外：淡赤灰色～黒色	口縁～体部小片	
47	第26図 図版21	SK-10 第4層	土師器 高杯	口径　(18.3) 器高　(12.4)	口縁部から杯部の境に明瞭な稜をもたないものである。器面はやや摩滅している。脚部外面に工具痕あり。	口縁　ヨコナデ 杯部外　ヨコナデ 脚部外　板ナデ	胎土：密　結晶片岩・石英 焼成：良好	内外：灰黄褐色	口縁部～脚部2/3	
49	第28図 図版21	SD-20 第1層	土師器 壺	口径　(14.1) 器高　(5.7)	口縁部は直立気味に立ち上がる複合口縁のもので、やや肉厚のものである。	口縁　ヨコナデ 体部外　タテハケ 体部内　ヨコナデ	胎土：粗　石英・赤色軟質粒 焼成：やや軟	内外：淡黄褐色	口縁1/4	東部瀬戸内産か？
51	第29図 図版21	SD-23 第1層	土師器 甕	体部径　16.6 器高　(14.7)	底部は丸底であり、体部は球形に近い丸味をもつものである。器面は摩滅している。	頸部内　指オサエ 体部外　タテハケ 体部内　ヘラケズリ	胎土：やや粗　結晶片岩・石英 焼成：良好	内外：淡褐色～黒褐色	体部ほぼ完形	
52	第29図 図版21	SD-23 第1層	製塩土器 底部	底径　3.0 器高　(2.2)	平底状を呈するものである。	底部外　指オサエ・ナデ 底部内　ナデ	胎土：やや粗　結晶片岩・石英 焼成：良好	内外：明褐色	底部完存	
55	第30図 図版22	SD-14	土師器 広口壺	口径　(19.1) 器高　(7.6)	口縁部は大きく外反し長くのびるもので、端部を丸くおさめている。器面は一部摩滅している。	口縁　ヨコナデ 頸部外　タテハケ 頸部内　不明	胎土：やや粗　結晶片岩・石英・赤色軟質粒 焼成：良好	内外：淡褐色	口縁～頸部1/4	阿波系
56	第30図 図版22	SD-14 土器1	土師器 複合口縁壺	口径　(19.2) 器高　(3.3)	口縁部が外方へ開く複合口縁壺である。器面は摩滅している。	口縁　ヨコナデ	胎土：密　赤色軟質粒 焼成：良好	内外：褐色	口縁1/4	阿波産
57	第30図 図版22	SD-14 土器5	土師器 直口壺	口径　(11.7) 器高　(6.2)	口縁部が外傾し直線的にのびるものである。器面は摩滅している。	口縁　不明	胎土：密　結晶片岩・石英・赤色軟質粒 焼成：良好	外：褐色 内：黄褐色	口縁1/4	
58	第30図 図版22	SD-14 土器12	土師器 小型丸底壺	口径　(10.1) 器高　(4.9)	丸みのある体部に短く外傾する口縁部をもつものである。器面は摩滅している。	口縁外　不明 口縁内　ヘラミガキ	胎土：やや粗　結晶片岩・石英 焼成：やや軟	内外：明褐色	口縁1/8	
59	第30図	SD-14 土器4	土師器 壺	底径　3.3 器高　(7.0)	丸味のある体部に小さな平底がつくものである。体部下半に黒斑が認められる。	底部　タタキ後ヘラミガキ 体部外　タテハケ 体部内　不明	胎土：密　結晶片岩・石英・赤色軟質粒 焼成：良好	外：黒褐色～淡黄灰色 内：淡褐色	底部～体部下半完存	
60	第30図 図版22	SD-14 土器3	土師器 甕	口径　(13.2) 器高　(7.5)	丸みのある体部をもつ。口縁部はやや内彎し、端部を内側に肥厚させている。器面は摩滅している。	口縁　ヨコナデ 体部内　ヘラケズリ	胎土：やや粗　結晶片岩・石英・赤色軟質粒 焼成：やや軟	外：淡褐色 内：灰黄褐色	口縁～体部1/6	
61	第30図 図版22	SD-14	土師器 甕	口径　(16.7) 器高　(3.2)	口縁部は直線的に外傾しているもので、端部を内側に肥厚させている。また体部への屈曲は丸味をもつ。	口縁　ヨコナデ 体部外　タテハケ 体部内　ヨコハケ	胎土：やや粗　結晶片岩・石英 焼成：良好	内外：淡褐色～淡黄灰色	口縁1/5	
62	第30図 図版22	SD-14	土師器 甕	口径　(16.1) 器高　(11.3)	丸味のある体部から鋭く屈曲し、やや外反する口縁部をもつものである。器面は摩滅している。	口縁　ヨコナデ 体部外　細いタタキ後、下半部タテハケ 体部内　ヘラケズリ	胎土：やや粗　石英・角閃石・金雲母 焼成：良好	内：灰白色 外：淡灰色	口縁～体部上半1/4	河内産（生駒西麓産）
63	第30図 図版22	SD-14 土器6	土師器 高杯	口径　18.0 脚径　10.9 器高　11.8	口縁部と杯部との境に明瞭な稜がみられない。脚部に直径1.2㎜を測る円孔が3方向に穿たれている。	口縁　不明 杯部　不明 脚部　不明	胎土：密　結晶片岩・石英 焼成：軟	内外：淡褐色	口縁から脚部2/3	
64	第30図	SD-14	土師器 高杯	脚径　(13.5) 器高　(8.2)	「ハ」の字形に開く脚部には、直径1.2㎝を測る円孔が4方向に穿たれている。器面が摩滅が著しい。	脚柱部　不明 脚部外　不明 脚部内　不明	胎土：やや粗　結晶片岩・石英・赤色軟質粒 焼成：やや軟	内外：淡褐色	脚部3/5	
65	第30図 図版22	SD-14	土師器 高杯	脚径　10.0 器高　(6.1)	「ハ」の字形に開く脚部には、直径7㎜を測る円孔が4方向に穿たれている。器面が摩滅が著しい	脚柱部　ヘラミガキ 脚部外　不明 脚部内　不明	胎土：密　結晶片岩・石英 焼成：やや軟	内外：淡褐色	脚部3/4	
66	第30図 図版22	SD-14 土器7	土師器 高杯	脚径　14.0 器高　(8.3)	「ハ」の字形に開く脚部には、直径1.0㎝を測る円孔が4方向に穿たれている。器面が摩滅が著しい	脚柱部　ヘラミガキ 脚部外　不明 脚部内　不明	胎土：密　結晶片岩・石英 焼成：軟	内外：淡褐色～灰褐色	脚部完存	
67	第30図 図版22	SD-14 土器1	土師器 高杯	口径　13.0 器高　(5.3)	椀形のもので、体部は緩やかに内彎し、口縁端部は丸くおさめる。器面は摩滅している。	口縁　ヨコナデ 体部外　不明 体部内　不明	胎土：精良　砂粒をほとんど含まない。 焼成：やや軟	内外：褐色	杯部4/5	
68	第30図 図版22	SD-14	土師器 鉢	口径　(12.4) 器高　5.5	緩やかに内彎する体部に平底がつくものである。器面は摩滅が著しい。口縁部には黒斑がみとめられる。	口縁　不明 体部外　不明 体部内　不明	胎土：密　結晶片岩・石英 焼成：やや軟	外：赤褐色 内：黒灰色	口縁から底部3/5	
69	第30図 図版22	SD-14 土器11	土師器 小型丸底鉢	口径　9.6 器高　7.1	丸味のある体部から短く外傾する口縁部がのびるものである。器面は摩滅している。	口縁　ヨコナデ 体部外　タテハケ 体部内　ヨコナデ	胎土：密　結晶片岩・石英 焼成：やや軟	内外：淡黄褐色	ほぼ完形	
70	第30図 図版22	SD-14 土器10	土師器 高杯	口径　10.0 脚径　7.4 器高　7.3	口径に比して脚部径が小さく、深い椀形の体部に低い脚部がつく異形の高杯である。器面は摩滅している。	体部外　不明 体部内　ヘラミガキ 脚部　ヨコナデ	胎土：粗　大きめの赤色軟質粒 焼成：良好	内外：淡褐色	完形	搬入品か？
71	第30図	SD-14 土器3	土師器 壺又は鉢	底径　4.0 器高　(3.5)	内彎する体部に上げ底状の平底がつくものである。	体部外　ナデ 体部内　ナデ 底部　ナデ	胎土：密　結晶片岩・石英 焼成：良好	内外：暗灰褐色	底部のみ完存	
72	第30図 図版22	SD-14 土器8	土師器 脚部	脚径　7.8 器高　(4.5)	「ハ」の字に開く脚部に直径9㎜の円孔を3方向に穿つものである。器面は摩滅が著しい。	脚部外　タタキ 脚部内　絞り目	胎土：密　大きめの砂岩粒・赤色軟質粒 焼成：やや軟	内外：淡赤灰色～黄褐色	脚部完存	70と胎土が類似
73	第31図 図版23	SD-2 第2層	土師器 複合口縁壺	口径　(12.8) 器高　(4.5)	口縁部から短く屈曲する複合口縁壺であり、端部を外へつまみ外反させている。	口縁外　ヨコナデ 口縁内　ヨコナデ	胎土：やや粗　砂っぽい 焼成：良好	内外：淡褐色	口縁1/7	
74	第31図 図版23	SD-2 第3層	土師器 高杯	口径　11.3 器高　(4.5)	脚柱部から脚部への屈曲が不明瞭なもので、端部を丸くおさめるものである。器面は摩滅している。	脚部外　不明 脚部内　ヨコハケ	胎土：密 焼成：軟	内外：明褐色	脚部完存	
75	第31図 図版23	SD-6	土師器 広口壺	口径　17.0 器高　(5.8)	口縁部は外傾し直線的にのびるもので、端部を丸くおさめる。器面の調整は著しく不明瞭である。	口縁外　不明 口縁内　不明	胎土：やや粗　結晶片岩・石英 焼成：軟	内外：淡褐色～灰白色	口縁完存	
76	第31図 図版23	SD-11	製塩土器 脚台Ⅲ式	脚径　(4.1) 器高　(3.3)	内彎する体部から外方へ短く張り出す脚部がつくものである。	体部外　ナデ 体部内　ナデ 脚部　指オサエ・ナデ	胎土：密　石英・赤色軟質粒 焼成：良好	内外：淡赤褐色～黄褐色	脚部1/2	
77	第31図 図版23	SD-11	製塩土器 脚台Ⅲ式	脚径　4.1 器高　(3.9)	内彎する体部から外方に短く張り出す脚部がつくものである。器面は摩滅が著しい。胎土は砂っぽい。	体部外　不明 体部内　不明 脚部　指オサエ・ナデ	胎土：やや粗　赤色軟質粒 焼成：軟	外：淡褐色 内：淡赤褐色	脚部完存	
78	第33図 図版23	SX-1 第1層	土師器 甕	口径　(15.8) 器高　(5.3)	口縁部は肉厚で、わずかに外反し端部を丸くおさめる。器面の調整は摩滅している。胎土は砂っぽい。	口縁　不明 体部外　タテハケ 体部内　不明	胎土：密　石英・赤色軟質粒 焼成：良好	外：黄褐色 内：淡黄灰色	口縁1/8	
79	第33図 図版23	SX-1 第4層	製塩土器 脚台Ⅲ式	脚径　(3.6) 器高　(5.0)	内彎する体部から外方に短く張り出す脚部がつくものである。器面は摩滅している。	体部外　タタキ 体部内　不明 脚部　指オサエ・ナデ	胎土：やや粗　赤色軟質粒 焼成：良好	内外：淡赤灰色～淡褐色	脚部1/3	
80	第33図 図版23	SX-1 第3層	製塩土器 脚台Ⅲ式	脚径　(4.4) 器高　(4.3)	内彎する体部から外方に短く張り出す脚部がつくものである。器面は摩滅している。	体部外　タタキ 体部内　不明 脚部　指オサエ・ナデ	胎土：密　赤色軟質粒 焼成：良好	内外：淡赤褐色	脚部1/3	
81	第33図 図版23	SX-1 第2層	製塩土器 脚台Ⅲ式	脚径　(4.2) 器高　(3.1)	内彎する体部から外方に短く張り出す脚部がつくものである。	体部外　不明 体部内　不明 脚部　指オサエ・ナデ	胎土：密 焼成：良好	内外：淡赤灰色	底部1/2	

表2　出土遺物観察表

遺物番号	挿図番号	出土地区・遺構・層位	種類	計測値 長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	形態の特徴	胎土・焼成	色調	残存率	備考
15	第11図 図版19	第1区 SD-8 上層	紡錘車	(4.2)	(4.2)	2.6	(26.2)	断面形が台形状を呈する。孔径は復元すると8.0mm	胎土：密　赤色軟質粒 焼成：良好	明褐色	1/2	第2次発掘調査出土
82	第33図 図版23	SX-1 第2層	土錘 有孔	(3.5)	1.9	1.4	(9.4)	残存状態は非常に悪い。紐通し穴の孔径は6.0mmを測る。	胎土：粗　結晶片岩 焼成：軟	褐色	1/3	

表3　出土遺物観察表

遺物番号	挿図番号	出土地区・遺構・層位	種類	石材	計測値 長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	形態の特徴	色調	残存率	備考
14	第11図 図版19	第1区 SD-8 上層	叩石	砂岩	7.9	7.1	3.6	270.0	右周縁部に敲打痕及び強い擦痕あり。表裏面の中央部にも敲打痕あり。	淡灰色	完形	第2次発掘調査出土
28	第18図 図版19	SD-17 第1層	砥石	結晶片岩	(13.3)	4.8～4.9	1.2～1.8	(138.9)	周囲5面に研磨痕と擦痕あり。鋭利な刃物状の工具による筋状擦痕あり。	淡緑灰色	上端部が欠失。	
48	第26図 図版21	SI-4 第2層	砥石	砂岩	(2.5)	0.9～1.4	0.45～1.4	(3.9)	周囲5面に研磨痕と擦痕あり。鋭利な刃物状の工具による筋状擦痕あり。	白色～黒灰色	上部を欠失。	火を受けた可能性あり
50	第28図 図版21	SD-20 第1層	叩石	砂岩	12.7	4.6	3.8	332.9	棒状砂岩の稜線部及び上下端部、また平滑面に瘤痕状の敲打痕あり。	灰色	完存	
53	第29図 図版21	SD-23 第1層	砥石	砂岩	(5.0)	(2.0～4.1)	(1.3)	(23.1)	周囲4面に研磨痕と擦痕あり。鋭利な刃物状の工具による筋状擦痕あり。	淡黄白色	上部を欠失。	
54	第29図 図版21	SD-23 第1層	叩石	砂岩	11.1	8.9	4.8	610.4	周縁部及び平滑面に敲打痕あり。周縁部の敲打痕は筋状を呈する。	淡灰色	完形	
83	第35図 図版23	P-96	平基式 打製石鏃	サヌカイト	1.9	1.4	0.3	0.6	両側縁に抉りあり、表裏面ともに細部調整を丁寧に施すものである。	灰色	完形	

表4　出土遺物観察表

遺物番号	挿図番号	出土地区・遺構・層位	種類	計測値 長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	形態の特徴	残存率	備考
29	第18図 図版20	P-189 第1層	鉄製 刀子	(4.4)	1.6	0.2	(4.5)	全面に錆が付着し鉄錆色を呈する。刀子の鋒部と考えられる。	鋒部のみ残存	30と同一個体
30	第18図 図版20	P-189 第1層	鉄製 刀子	(4.0)	1.6	0.2	(5.4)	全面に錆が付着し鉄錆色を呈する。刀子の茎周辺部と考えられる。	基部のみ残存	29と同一個体
31	第18図 図版20	SD-17 第1層	鉄製 鎌	(5.1)	2.6～2.7	0.25	(12.4)	全面に錆が付着し鉄錆色を呈する。先端部とみられ、基部から先端部に向かって細くなる。	先端部のみ残存	32・33と同一個体
32	第18図 図版20	SD-17 第1層	鉄製 鎌	(3.4)	2.9～3.2	0.25	(6.1)	全面に錆が付着し鉄錆色を呈する。中央部部とみられ、基部から先端部に向かって細くなる。	中央部のみ残存	31・33と同一個体
33	第18図 図版20	SD-17 第1層	鉄製 鎌	(1.3)	(2.0)	0.25	(2.6)	全面に錆が付着し鉄錆色を呈する。基部とみられ、端部に折り曲げている。	基部のみ残存	31・32と同一個体

表5　出土遺物観察表

遺物番号	挿図番号	出土地区・遺構・層位	銭貨名	初鋳年	計測値 直径（cm）	中央孔一辺（mm）	厚さ（mm）	重量（g）	形態の特徴	残存率	備考
1	第6図 図版18	第3区 第4層	景徳元寶	1004年	2.45	0.60	1.0	2.4	真書体。銅銭。表面に錆が多い。	完存	第2次発掘調査出土

表6　出土遺物観察表

遺物番号	挿図番号	出土地区・遺構・層位	種類	計測値 長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	形態の特徴	色調	残存率	備考
43	第23図 図版20	P-261 第2層	ガラス製 玉	0.5	0.5	0.4	不明	平面円形で、全面に研磨痕がみられる。また紐通し孔の直径は1.5mmを測る。	淡青色	完形	

報 告 書 抄 録

ふりがな	たやいせきだいろくじはっくつちょうさほうこくしょ
書名	田屋遺跡第６次発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	和歌山市都市整備公社発掘調査報告書
シリーズ番号	第５集
編著者名	藤薮勝則
編集機関	財団法人和歌山市都市整備公社
所在地	〒640-8146　和歌山県和歌山市一番丁３　TEL　073-435-1129
発行年月日	西暦　2012年３月16日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
田屋遺跡（たやいせき）	和歌山県（わかやまけん） 和歌山市（わかやまし） 直川（のうがわ）	3020150	93	34° 15′ 38″	135° 13′ 15″	20101104 20110218	738.2	公共的施設区画道路の整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
田屋遺跡	集落跡	古墳時代	竪穴建物・溝・土坑・ピット	土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・中世土師器・輸入磁器・土製品・石製品・金属器（鉄製刀子・鉄製鎌）・ガラス製玉	紀ノ川北岸に隣接する古墳時代前期集落の調査。竪穴建物が構築される微高地と溝などが掘削される微低地を検出。新座標。

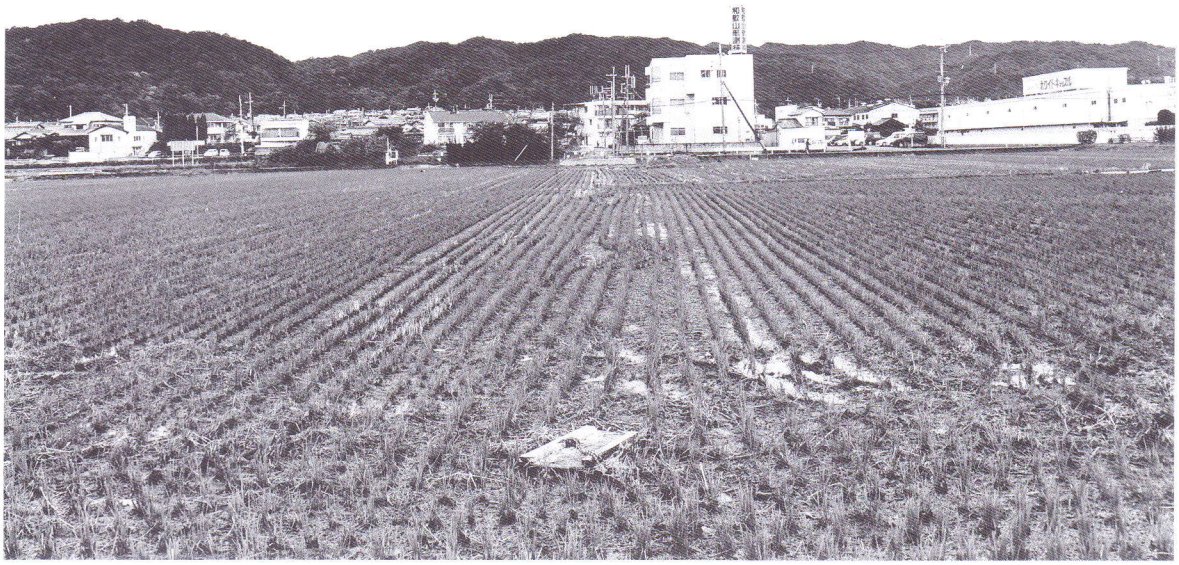
要約

紀ノ川北岸に隣接する今回の調査地では、調査区北端部及び南半部に微高地を検出し、調査区北半部及び南端部に微低地を確認した。また検出した遺構の種別及びその分布は、微高地部に竪穴建物８棟など居住域を示す遺構が構築されており、微低地部に主として溝などを検出したことから、微地形に左右され展開することが明らかとなった。出土遺物では、古墳時代前期に阿波や河内、東海地域から持ち運ばれたと考えられる搬土器が出土した他、竪穴建物から鉄製刀子や砥石が共伴して出土し、さらに製塩土器が一定量出土したことが注目される。

図　　版

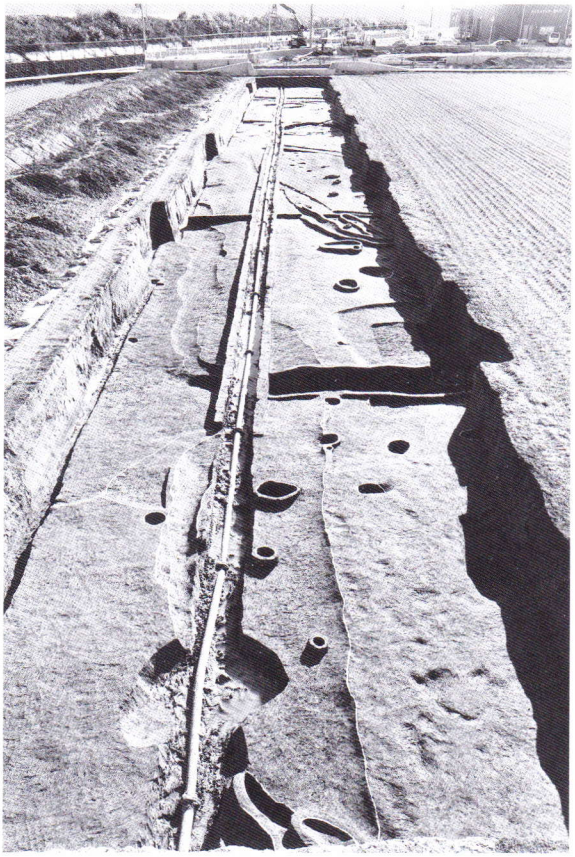
図版1

調査前の状況（北から）



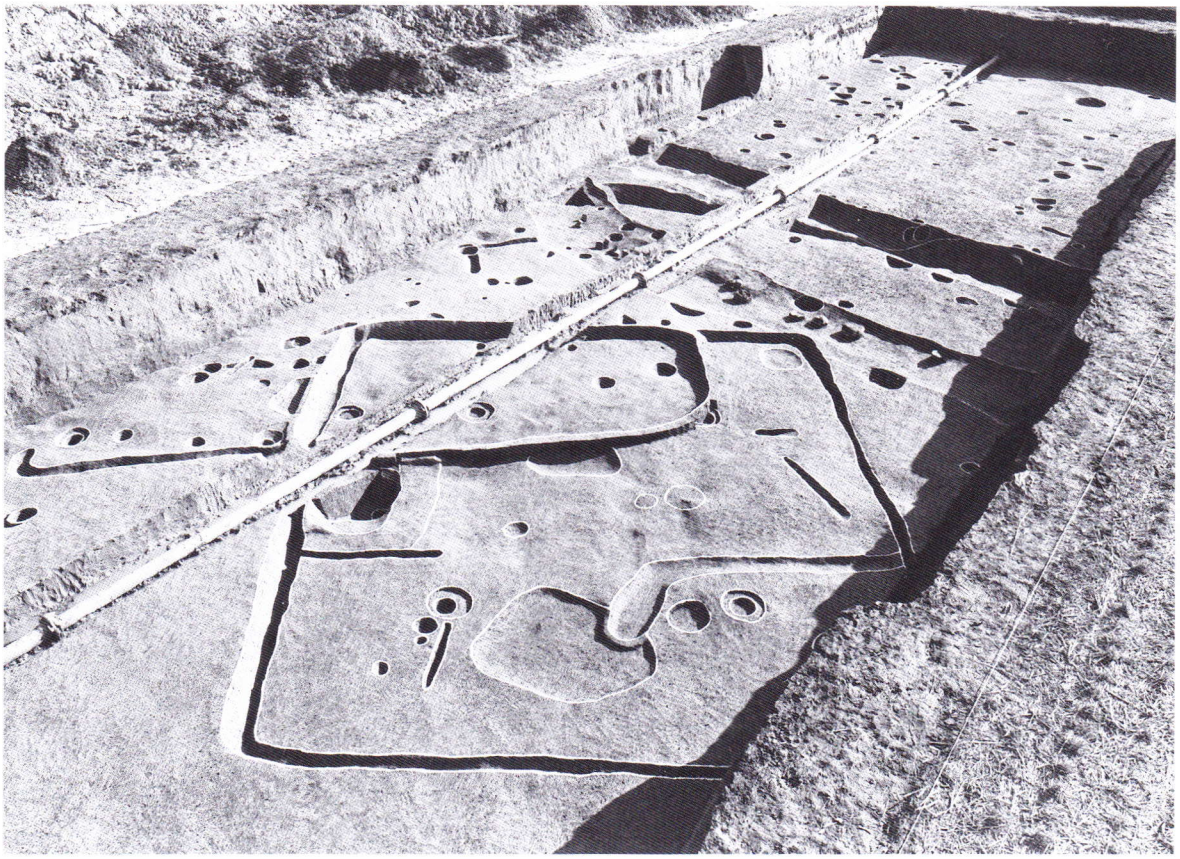
調査前の状況（南から）

図版2

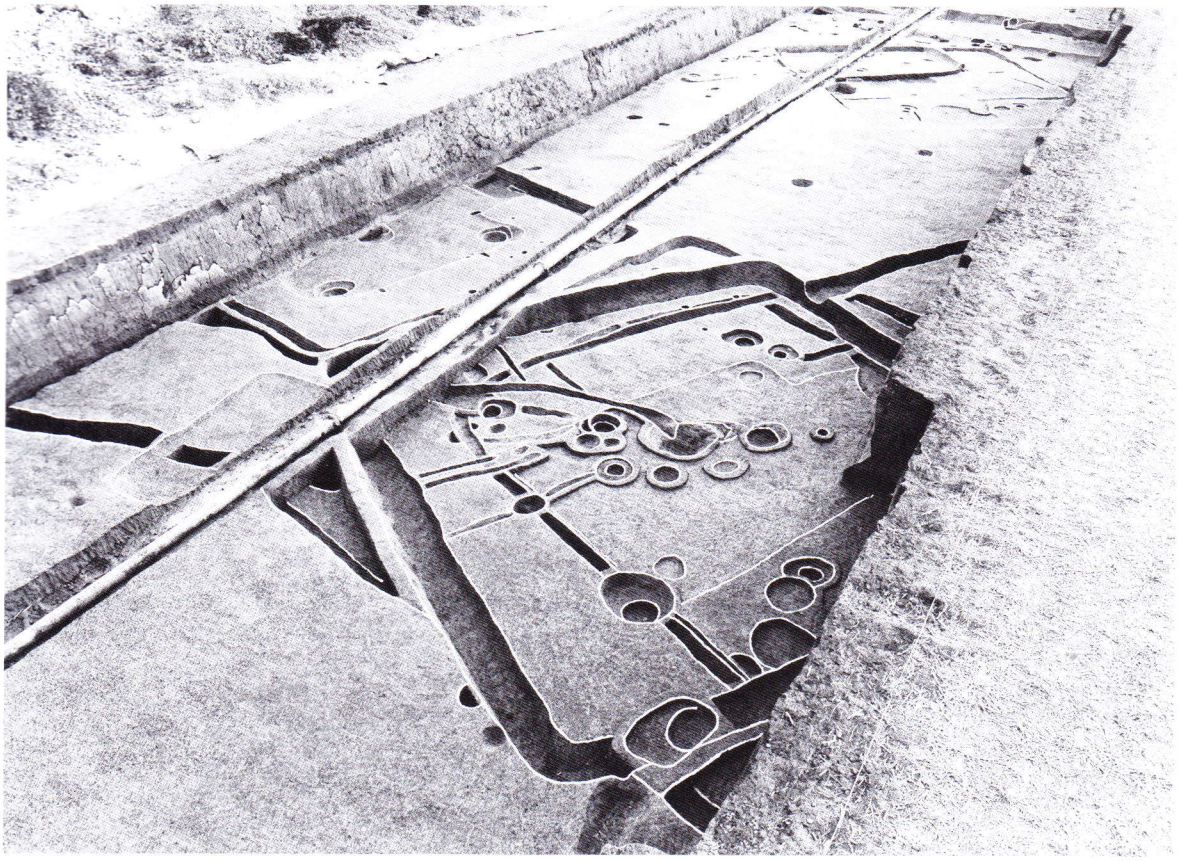


調査区全景（北から）

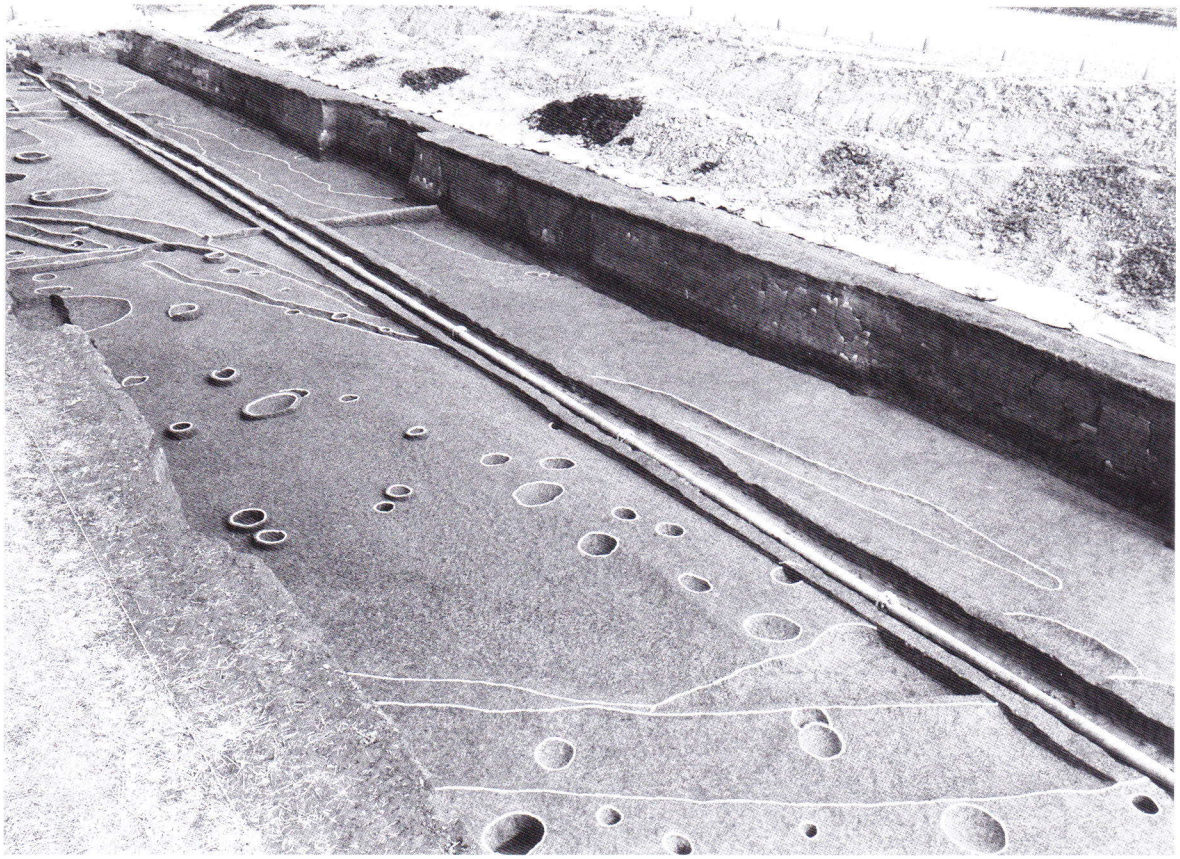
調査区全景（南から）



調査区南端全景（北から）

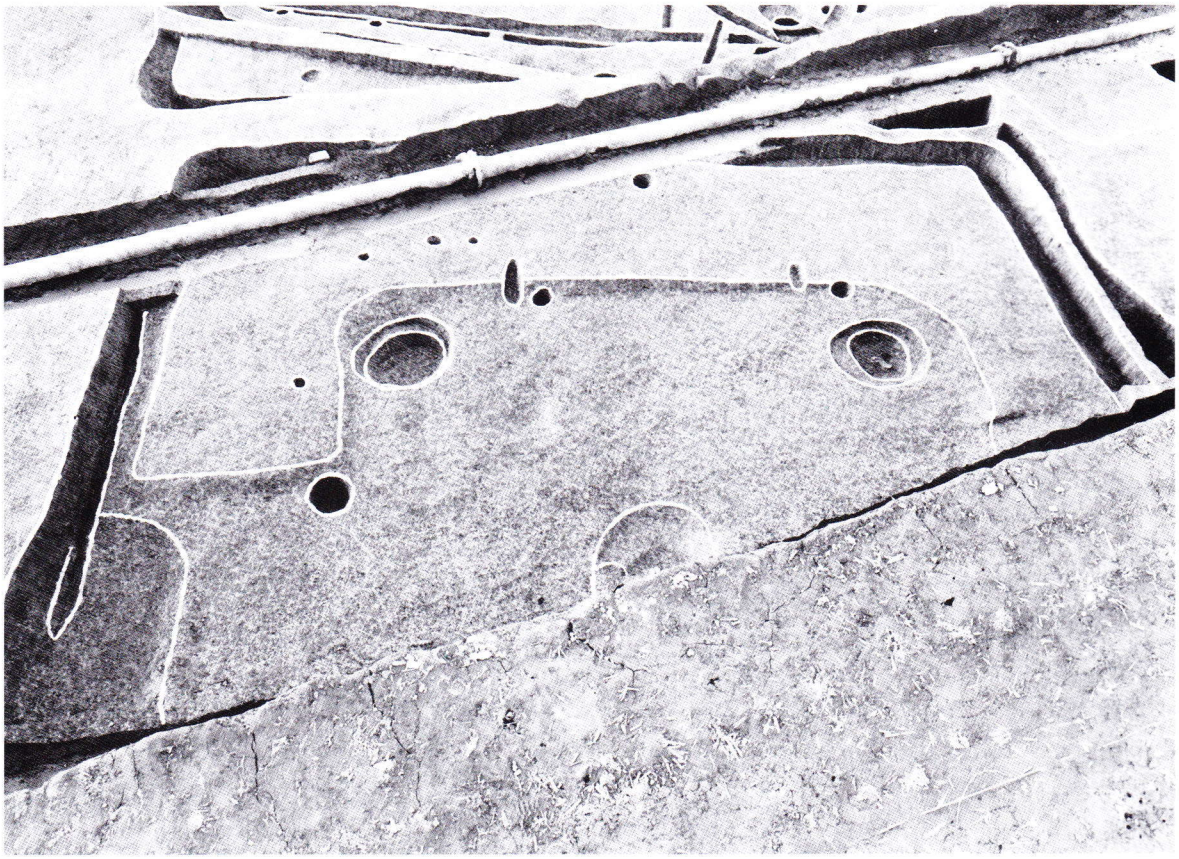


調査区南半全景（北から）

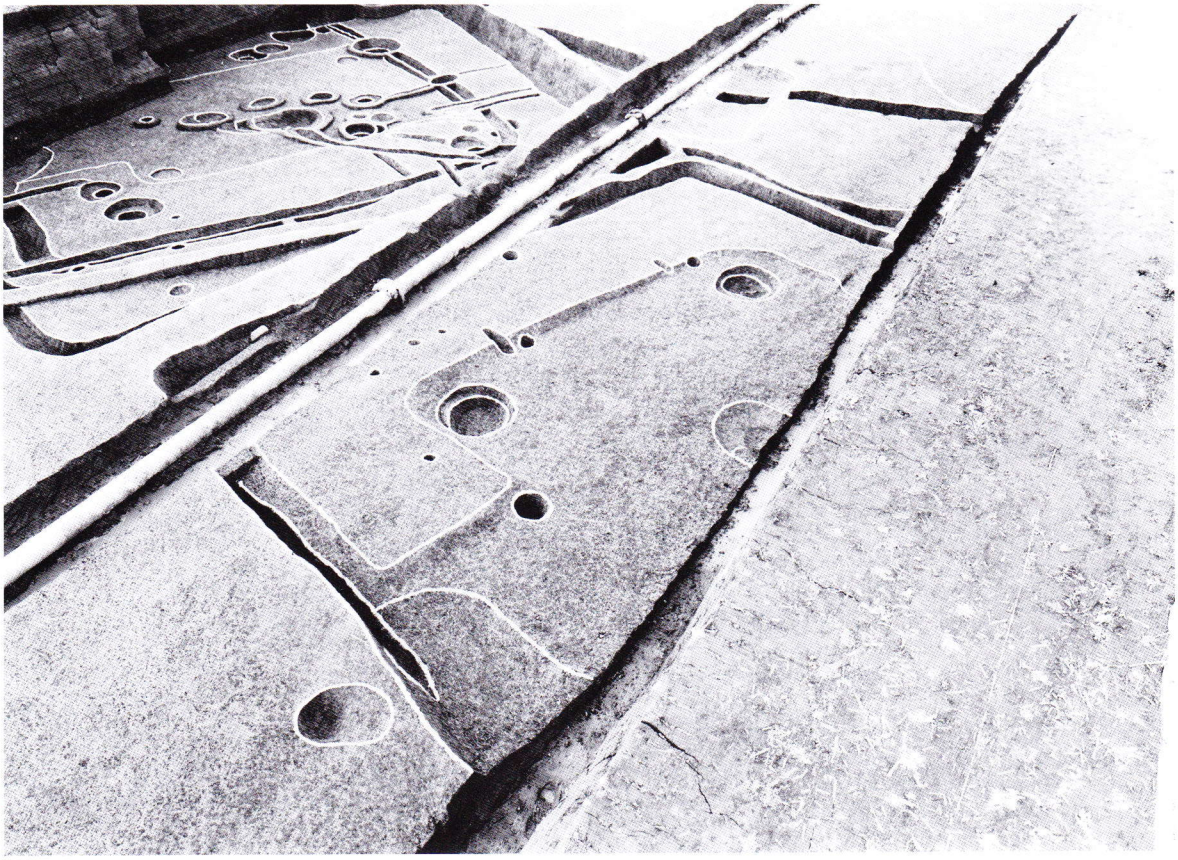


調査区北半全景（南西から）

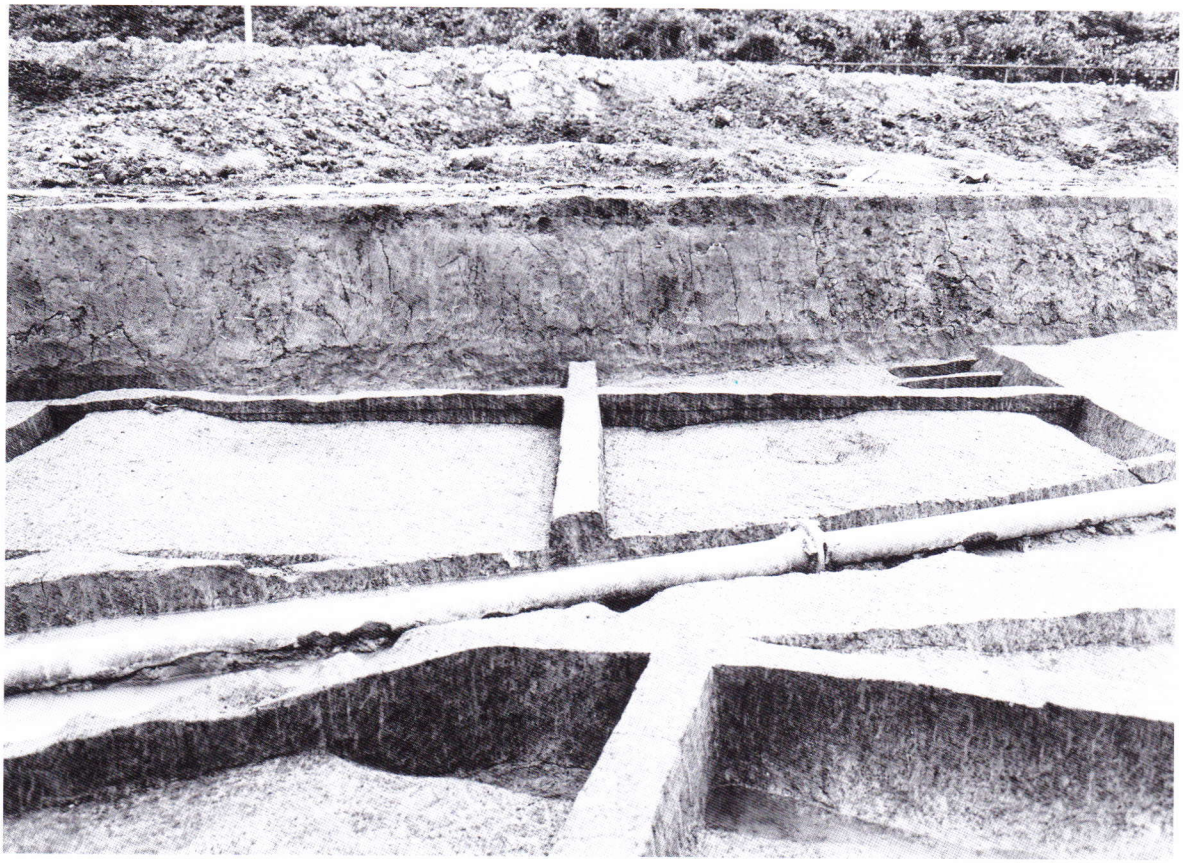
図版4



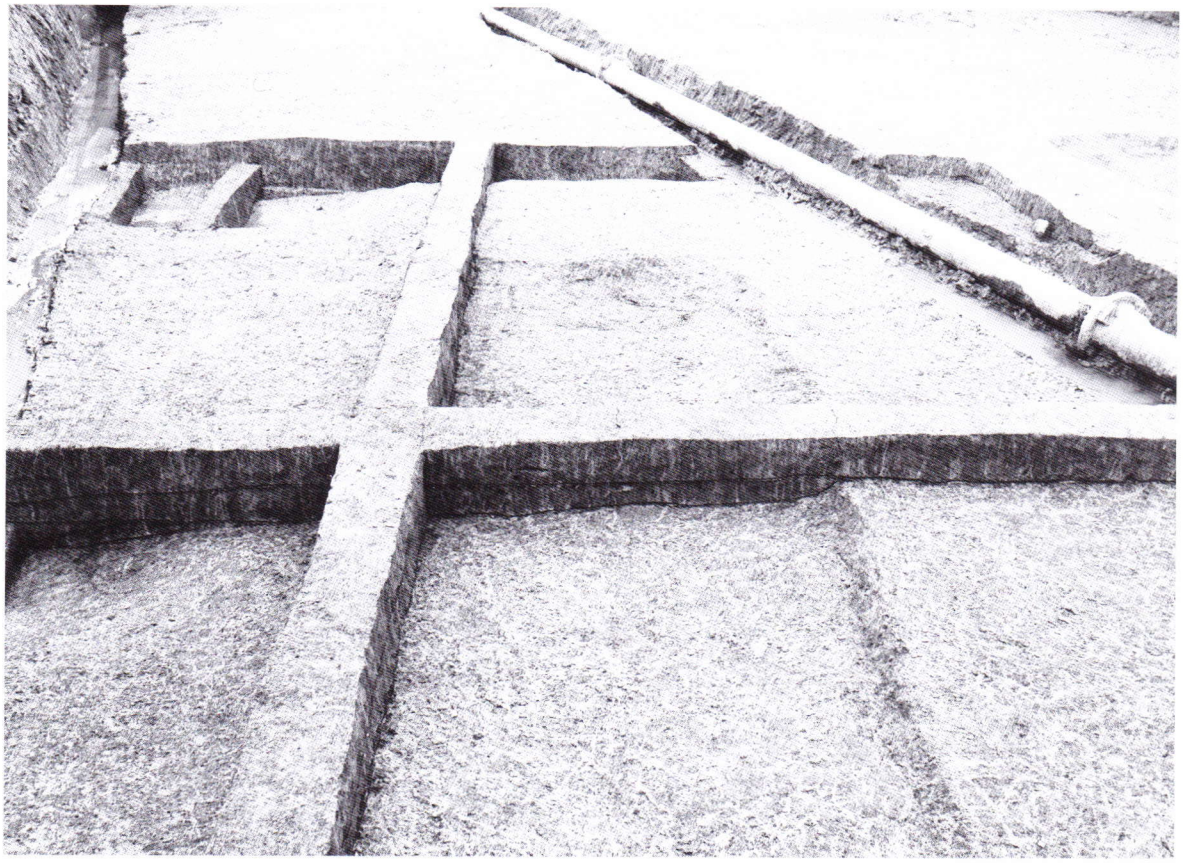
SI－２（南東から）



SI－２（南から、左奥SI－１・３・６・７）

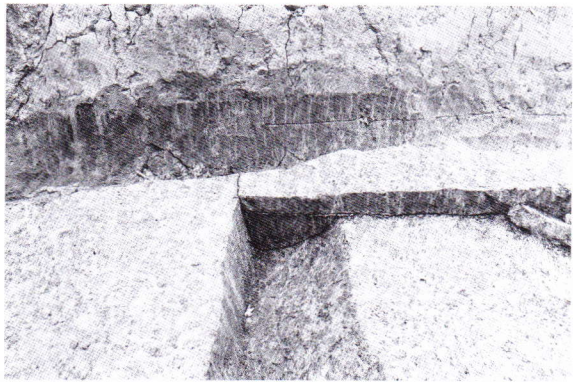


SI－２土層堆積状況（北西から）

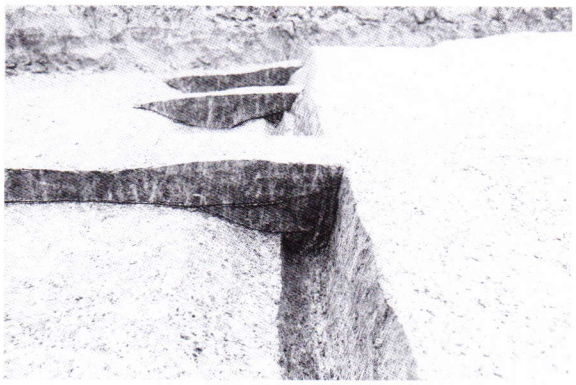


SI－２土層堆積状況（北東から）

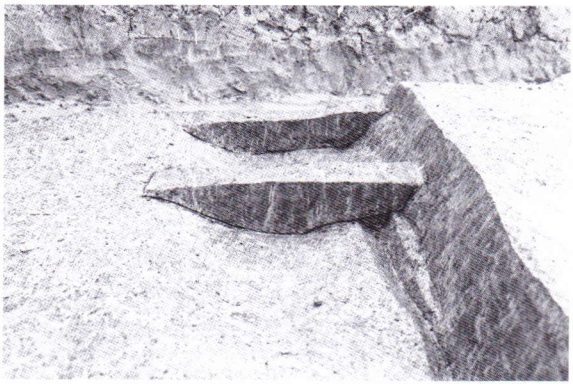
図版6



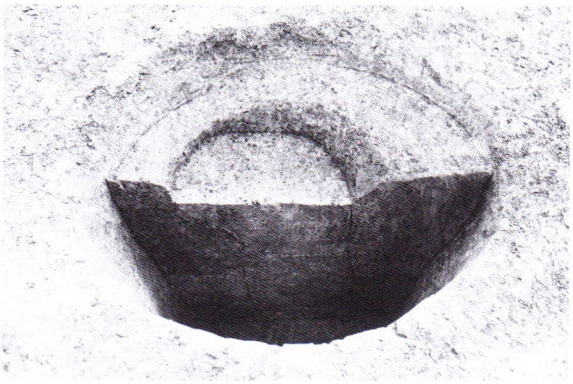
SI－２北辺　SD－17土層堆積状況（北西から）



SI－２南辺　SD－17土層堆積状況（北西から）

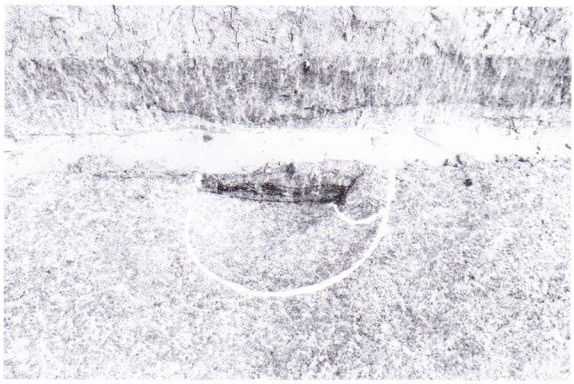


SK－６土層堆積状況（北西から）



P－189土層堆積状況（北西から）

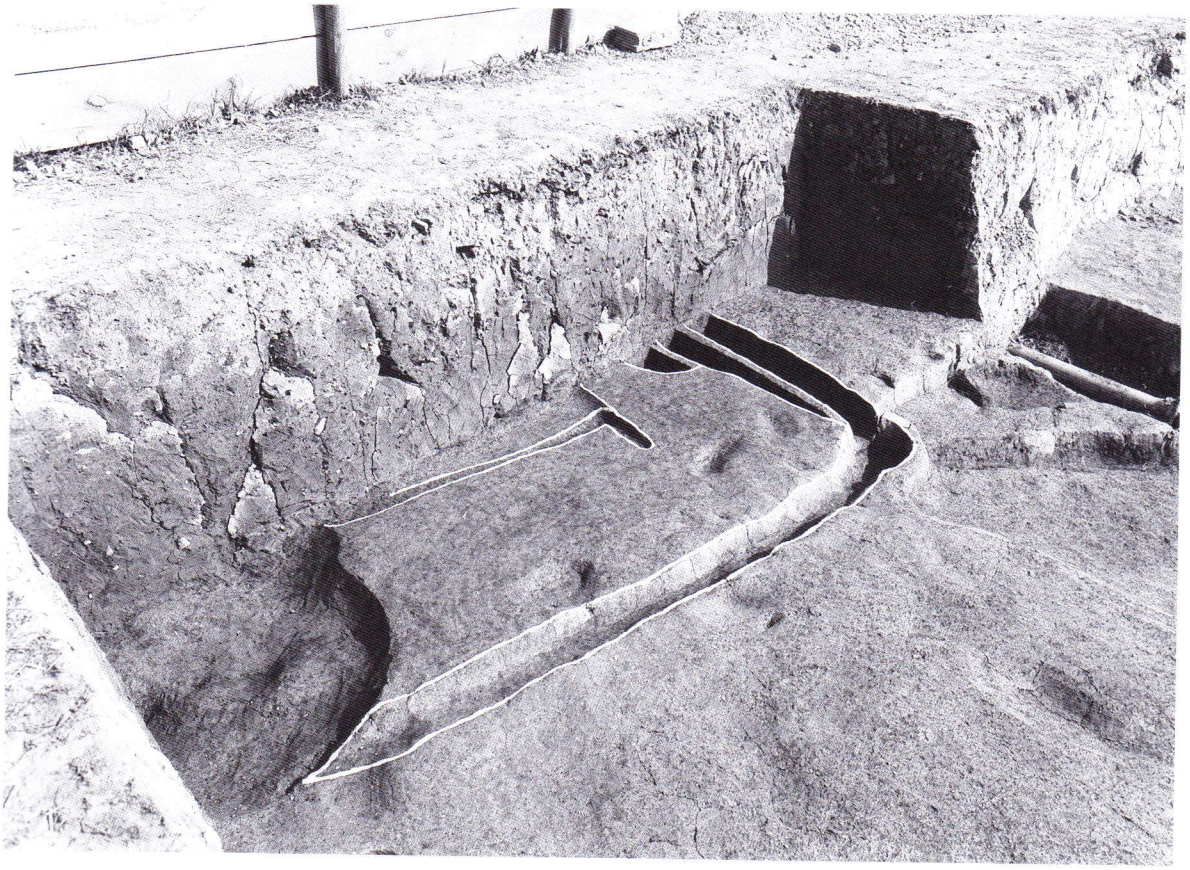
P－190土層堆積状況（北西から）



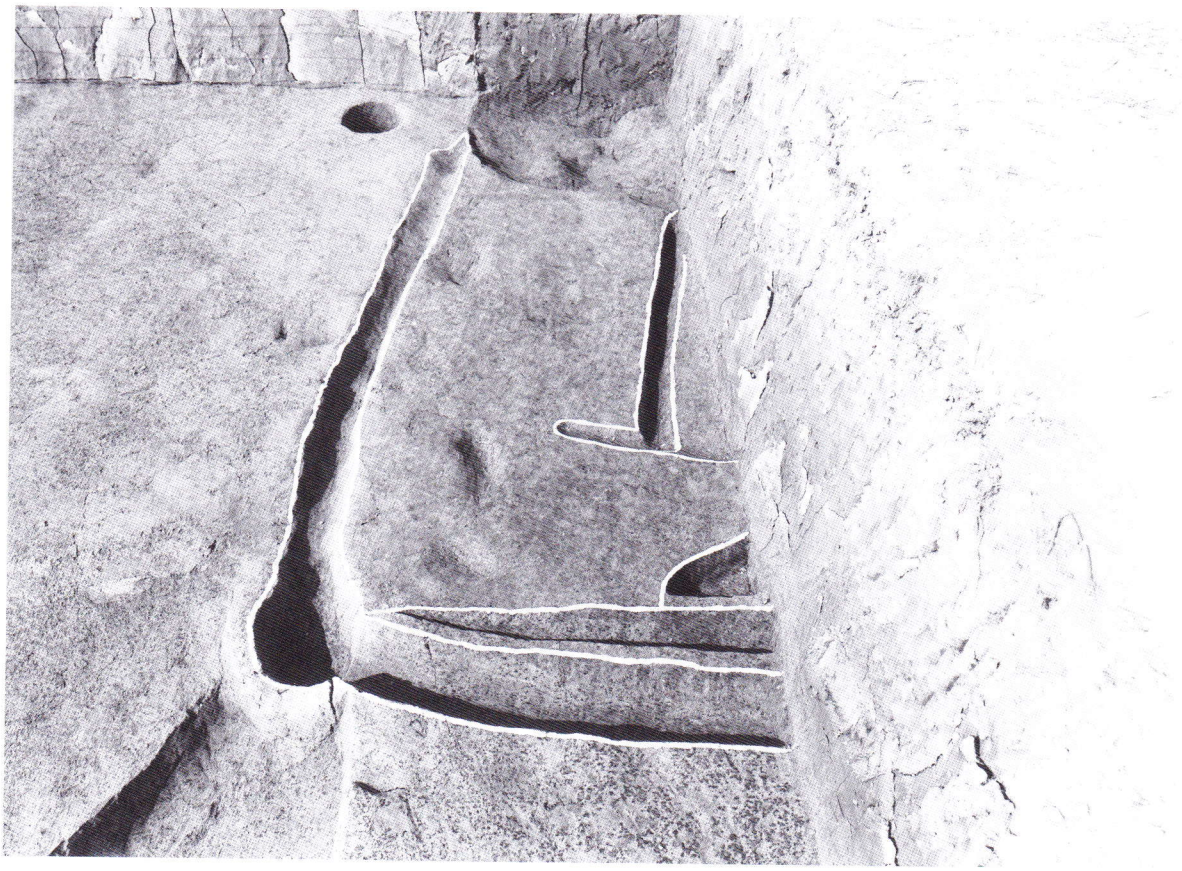
SK－７（西から）

SK－７土層堆積状況（西から）

SD－17砥石出土状況（南東から）

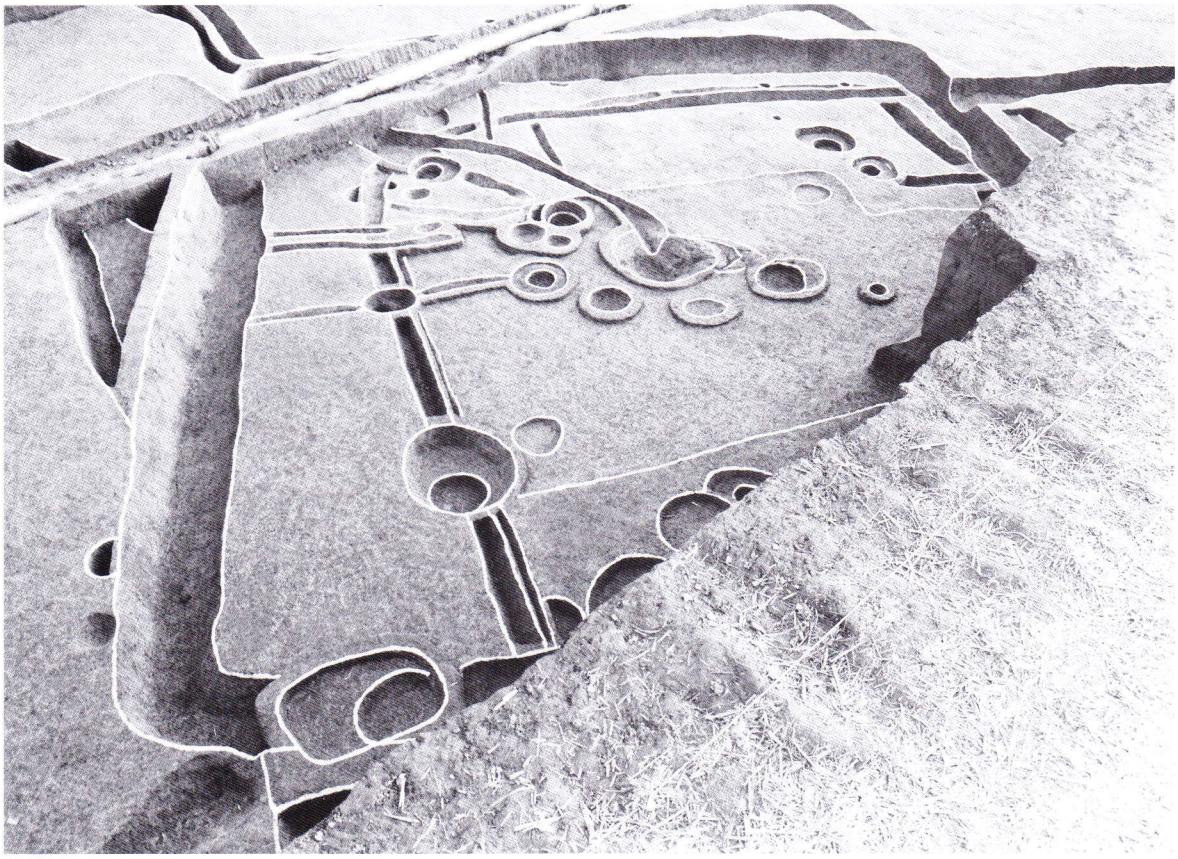


SI－8（南西から）

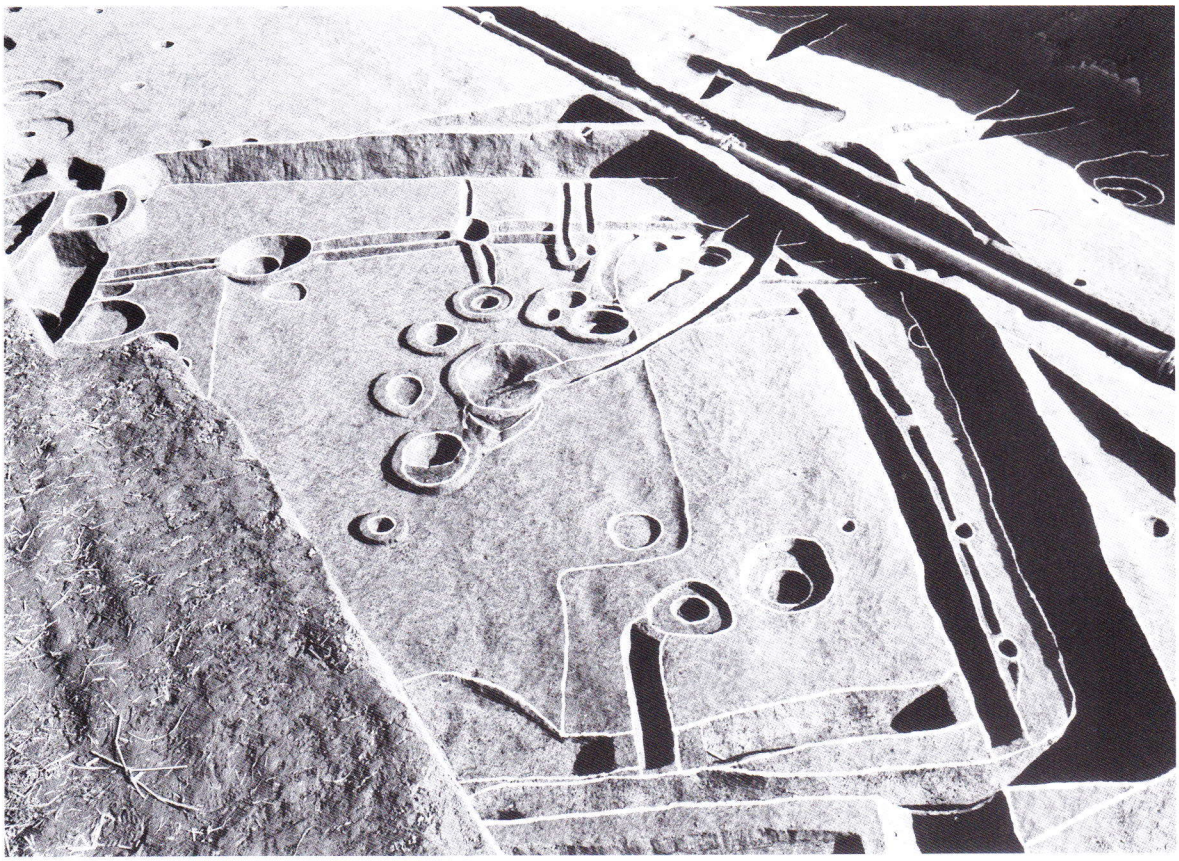


SI－8（東から）

図版8

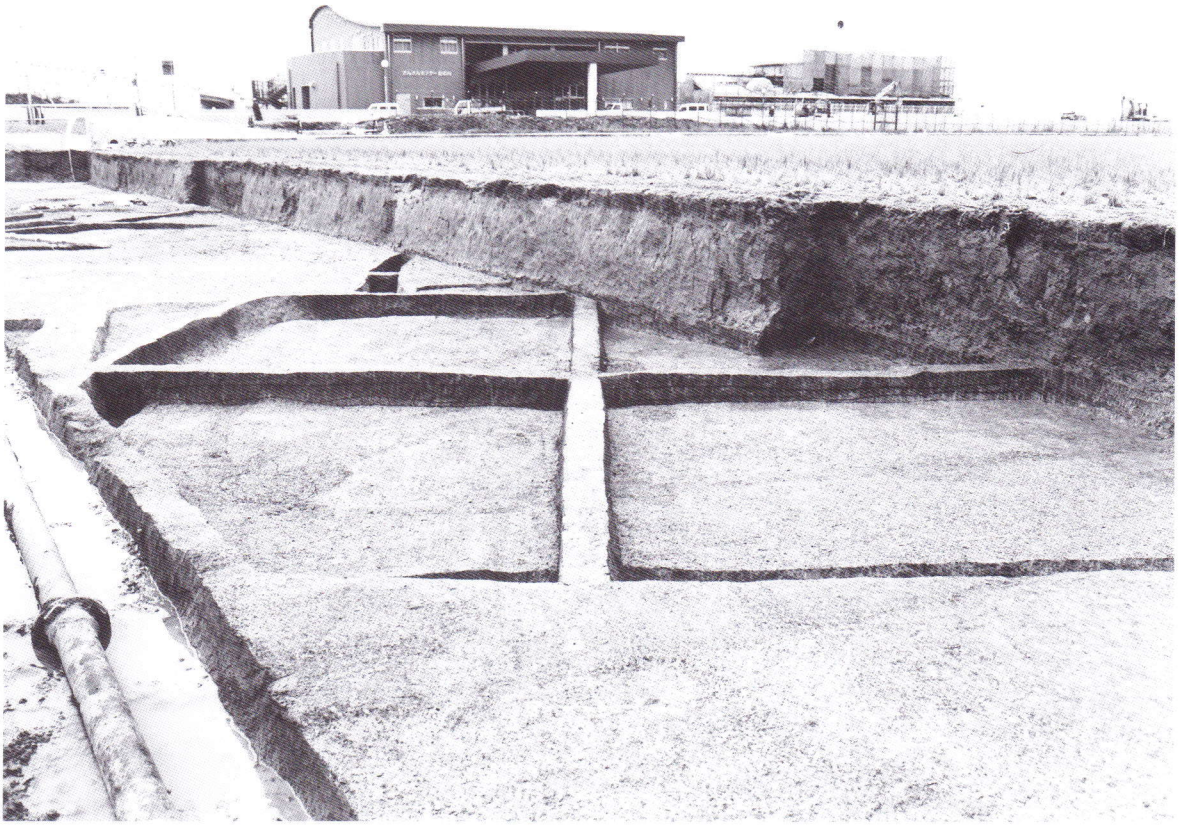


SI－１・３・６・７（北西から）

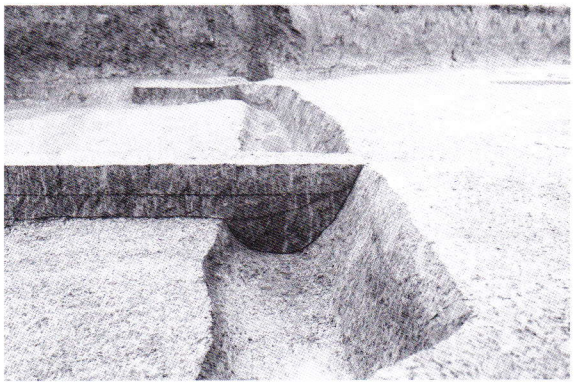


SI－１・３・６・７（南西から）

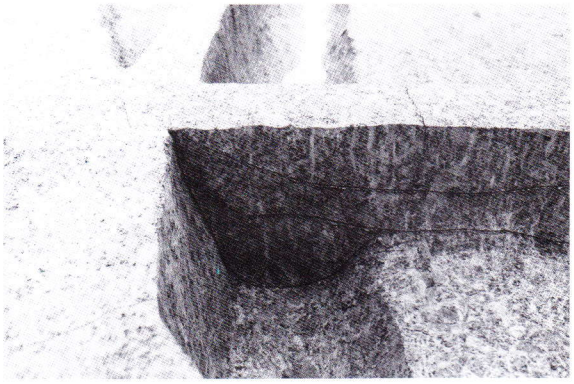
SI－１土層堆積状況（南東から）



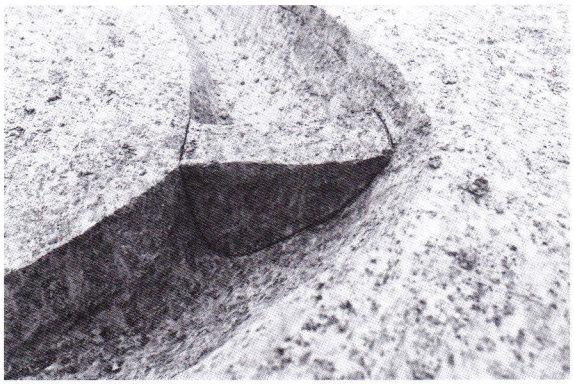
SI－１土層堆積状況（北東から）



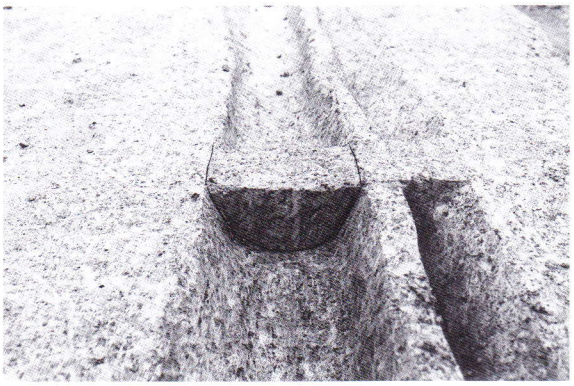
SI－１北辺　SD－19土層堆積状況（南東から）



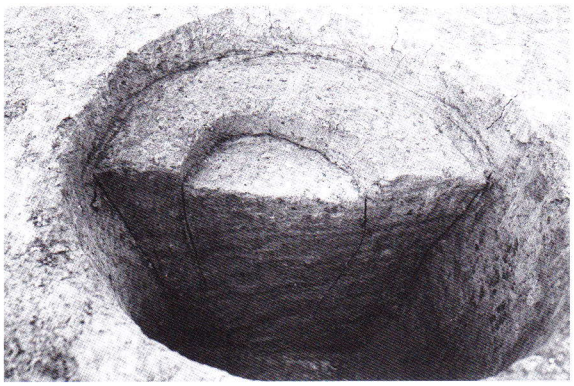
SI－１東辺　SD－19土層堆積状況（北東から）



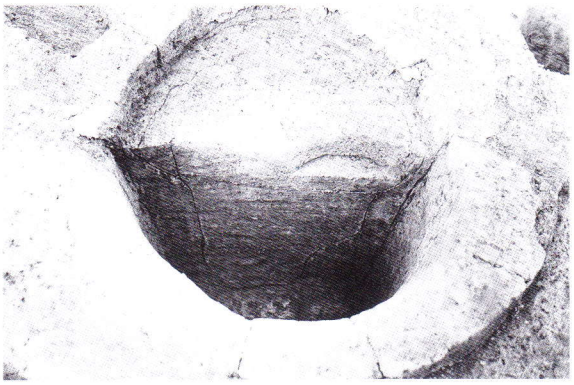
SI－３南隅角部　SD－36土層堆積状況（南西から）



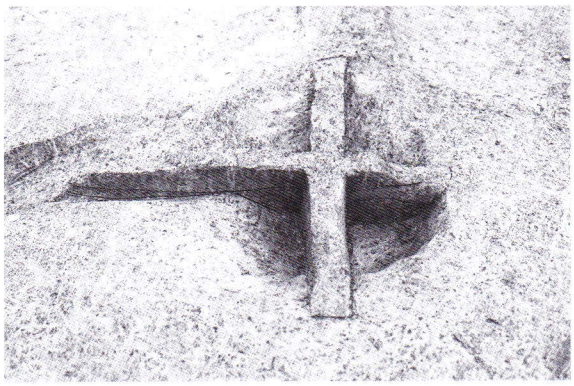
SI－６・７　SD－37・38土層堆積状況（南西から）



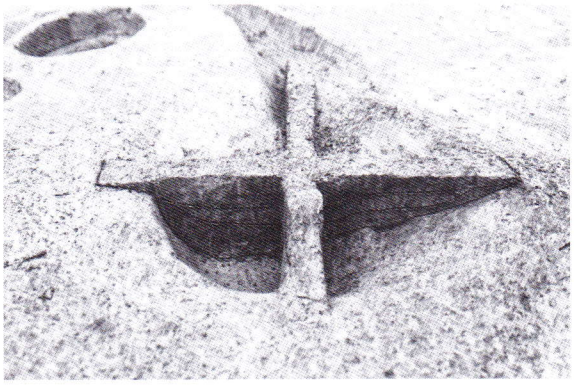
SI－１　P－215土層堆積状況（南東から）



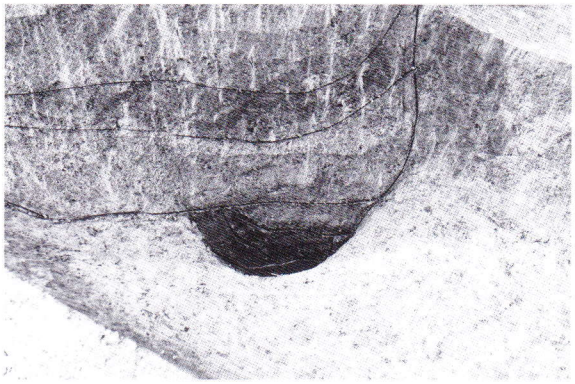
SI－１　P－216土層堆積状況（南東から）



SI－１　SK－12土層堆積状況（北東から）

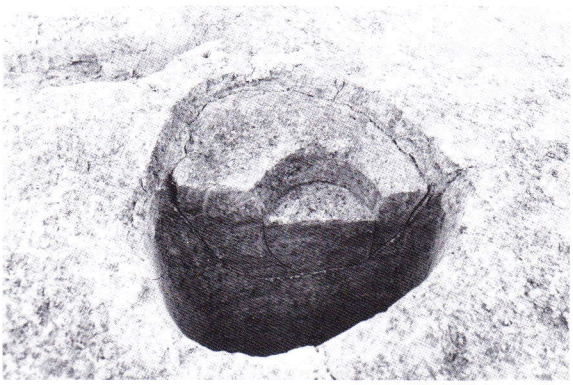


SI－１　SK－12土層堆積状況（北西から）



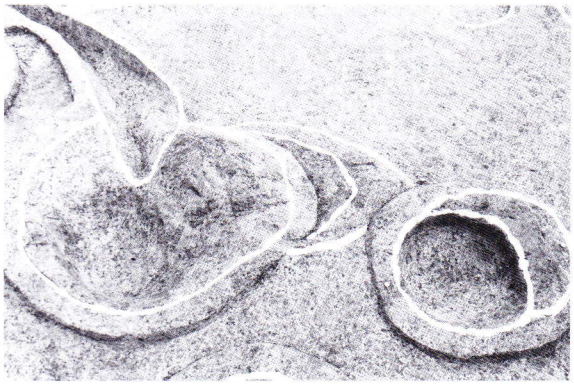
SI－1　P－261土層堆積状況（東から）

SI－3　P－232土層堆積状況（北西から）

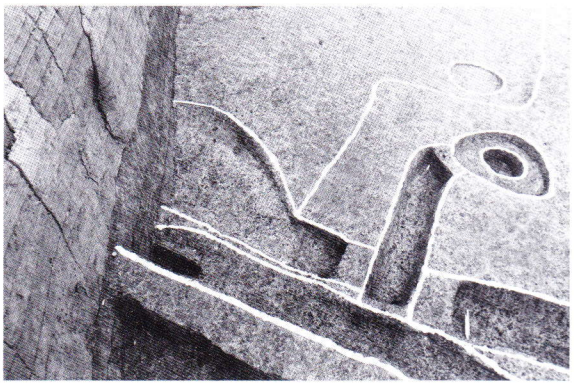


SI－6　P－218土層堆積状況（南東から）

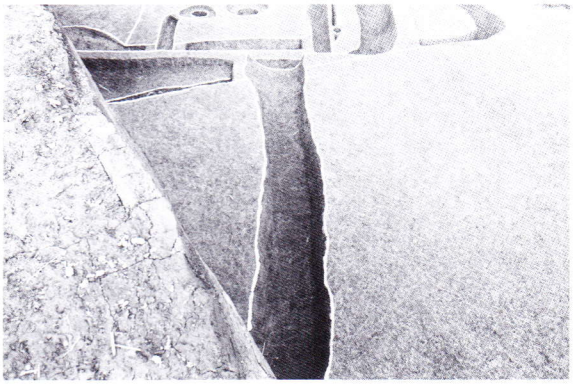
SI－6　P－221土層堆積状況（南東から）



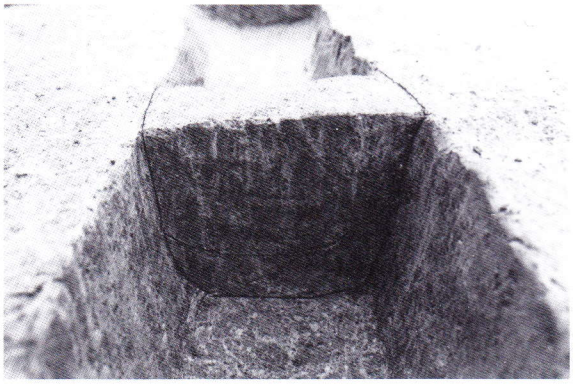
SI－1・3・6　SK－12・19、P－232（北西から）



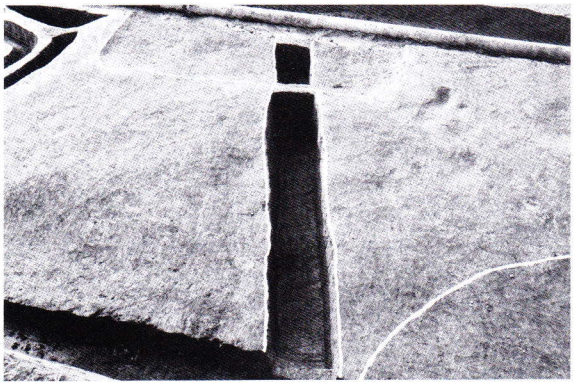
SI－7　SD－38、SK－18（南西から）



SI－1　SD－16（南西から）

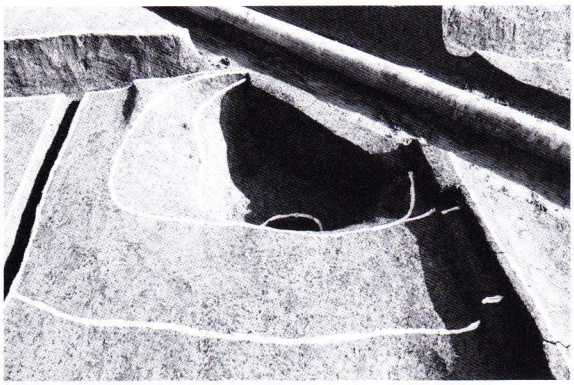


SI－1　SD－16土層堆積状況（南西から）



SI－３　SD－15（東から）

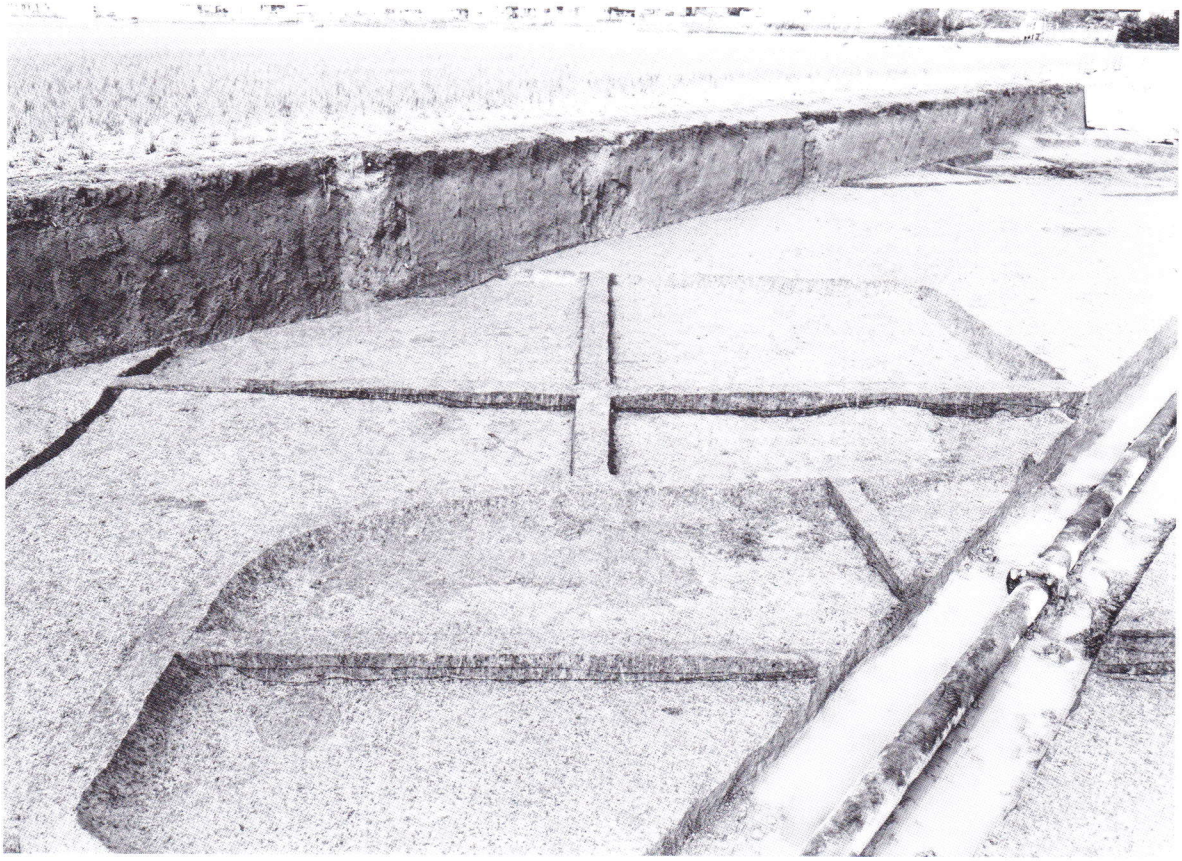
SI－３　SD－15土層堆積状況（西から）



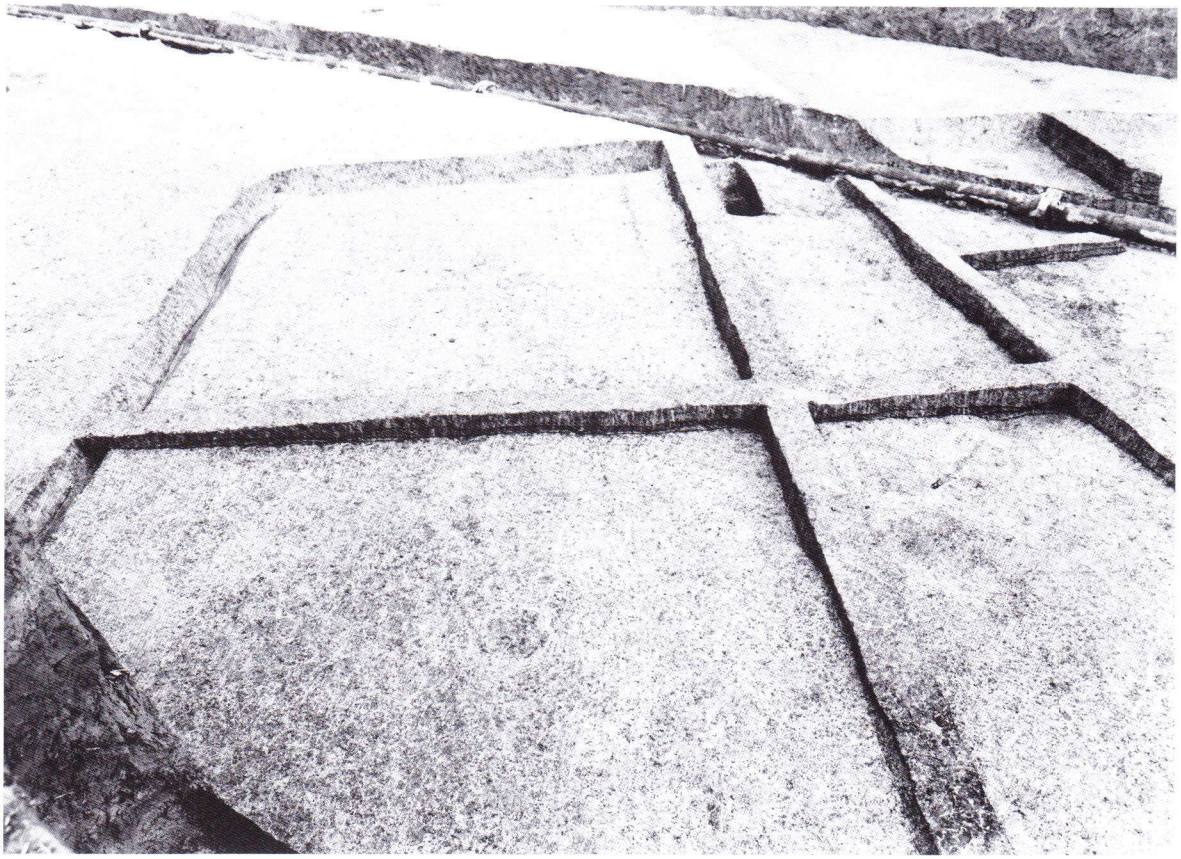
SI－４　SK－10（南西から）

SI－４　SK－10土層堆積状況（北西から）

SI－４（南西から、右奥SI－５）

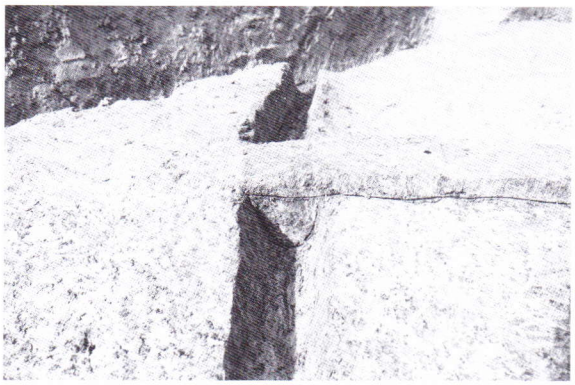


SI－４土層堆積状況（南東から）



SI－４土層堆積状況（南西から）

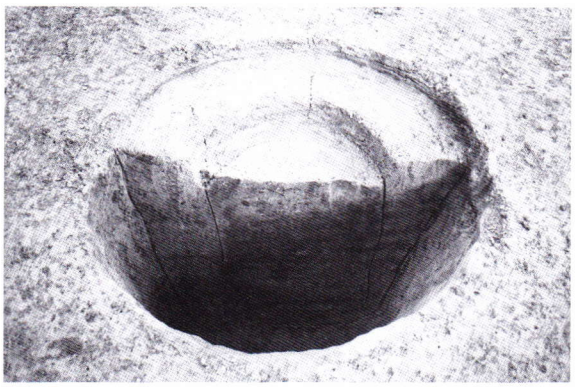
SI－４東辺　SD－21土層堆積状況（南東から）



SI－４西辺　SD－21土層堆積状況（南東から）

P－148土層堆積状況（南西から）

P－149土層堆積状況（南西から）

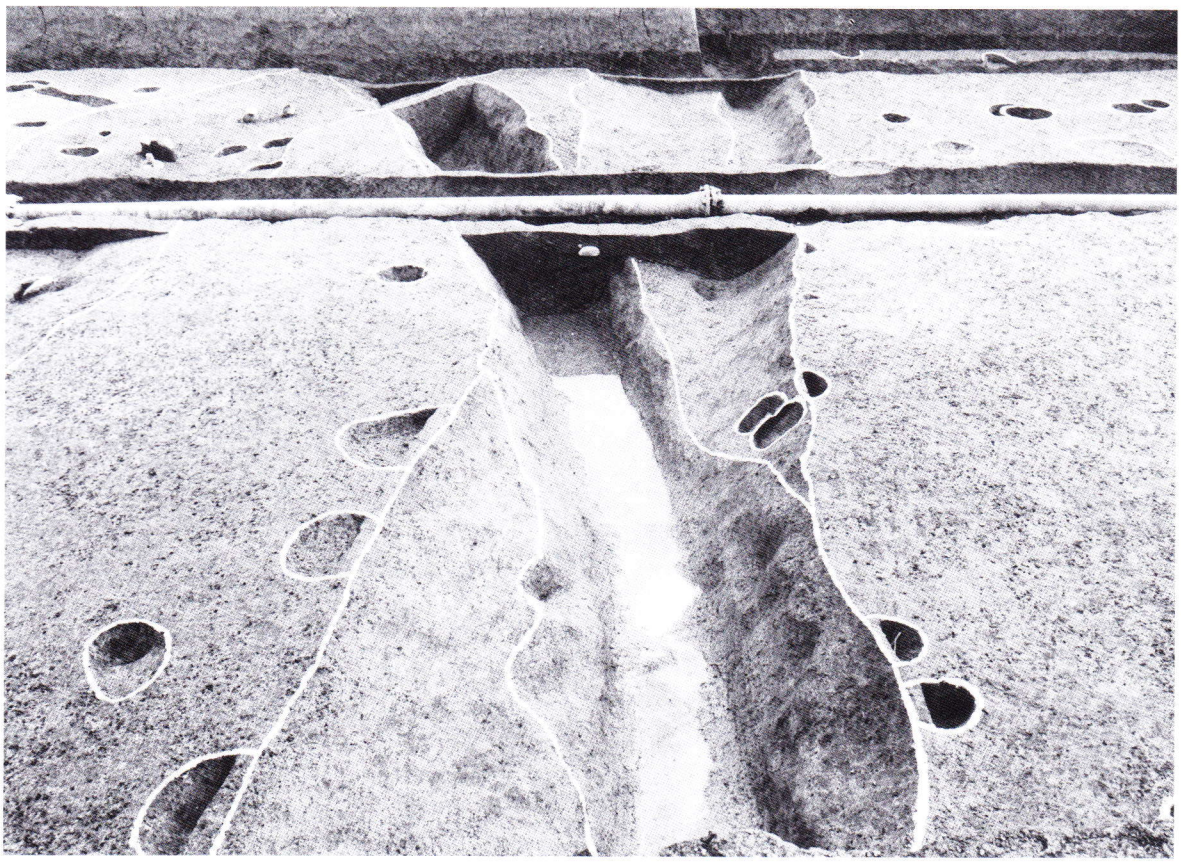


P－150土層堆積状況（南西から）

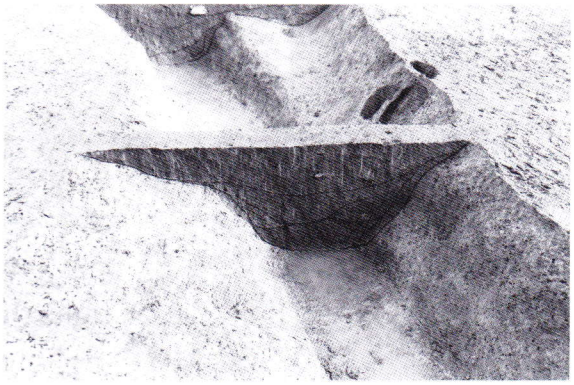
P－151土層堆積状況（南西から）

P－153土層堆積状況（南東から）

P－154土層堆積状況（南東から）



SD－20・23・24（西から）

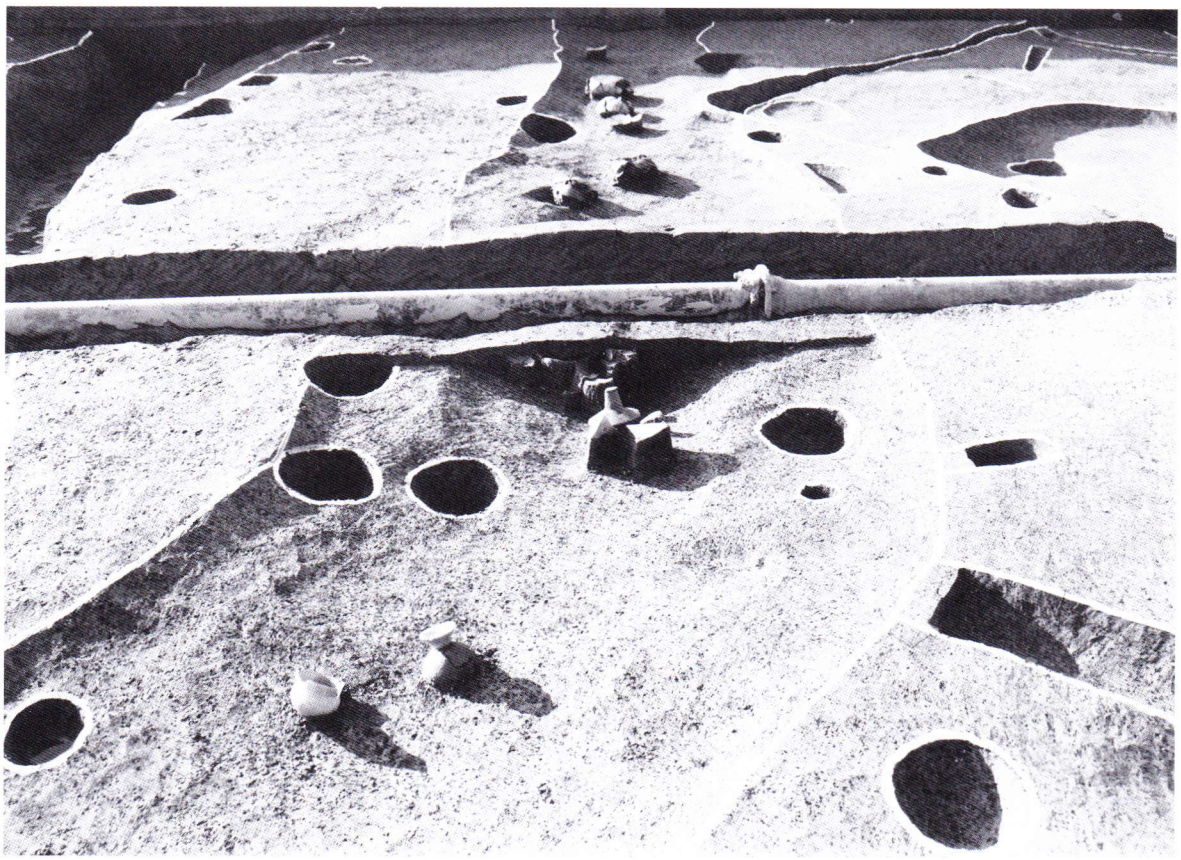


SD－20・23土層堆積状況（西から）

SD－20・23・24土層堆積状況（西から）

SD－20土層堆積状況（西から）

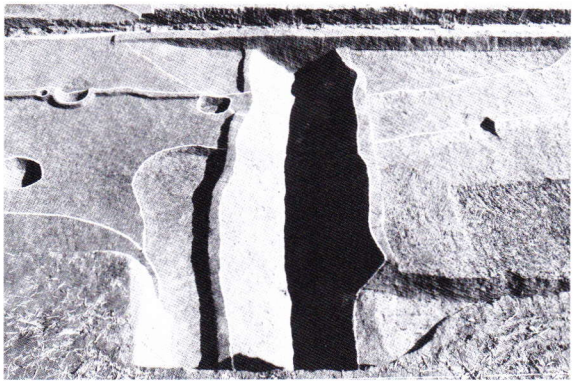
SD－23・24土層堆積状況（西から）



SD－14（南東から、手前から土器11・10・８・７）

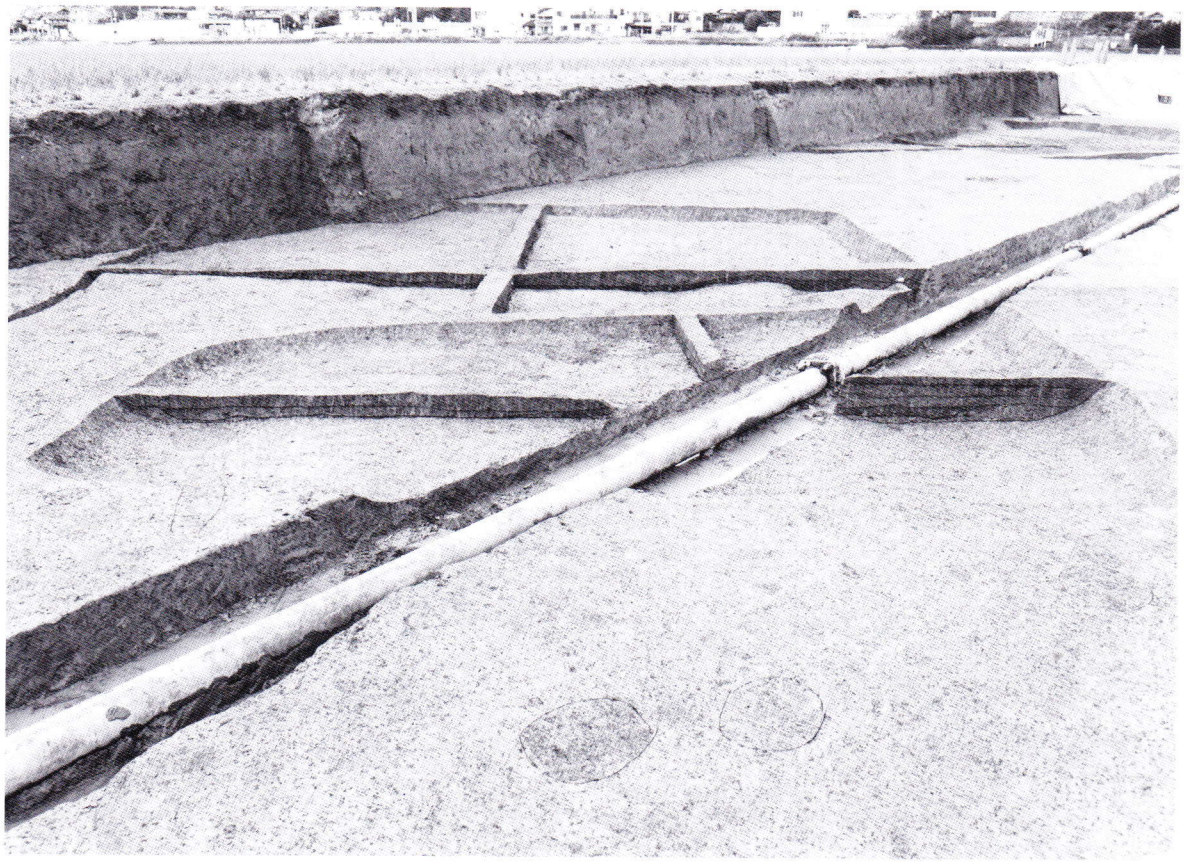
SD－14　土器３～６出土状況（西から）

SD－14　土器５・６出土状況（西から）

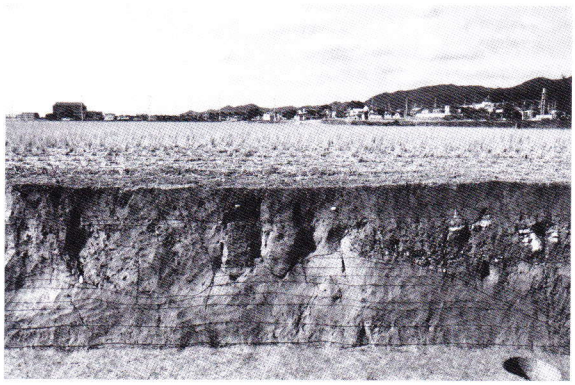


SD－２（西から）

SD－２土層堆積状況（西から）



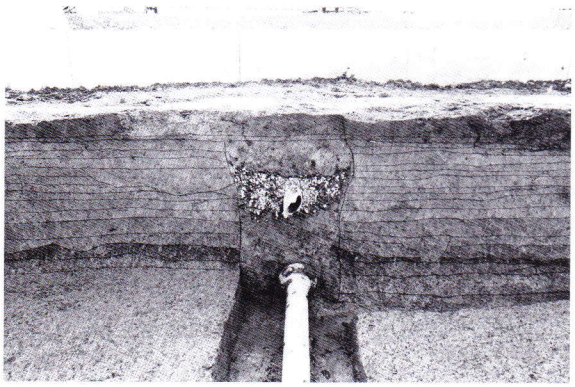
SK－８土層堆積状況（南東から）



調査区西壁X＝－192640m付近土層堆積状況（東から）

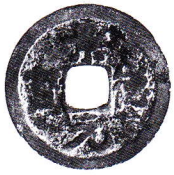
調査区西壁X＝－192650m付近土層堆積状況（東から）

調査区西壁X＝－192708m付近土層堆積状況（東から）

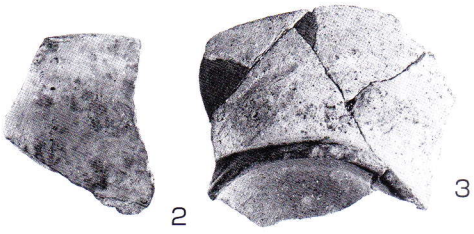


調査区南壁Y＝－71760m付近土層堆積状況（北から）

図版18

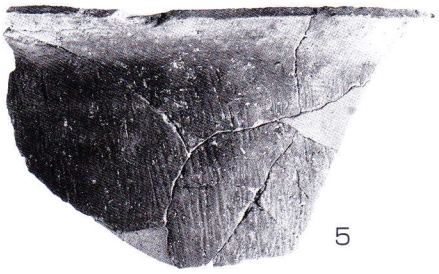


第２次 第４層出土遺物　１銭貨

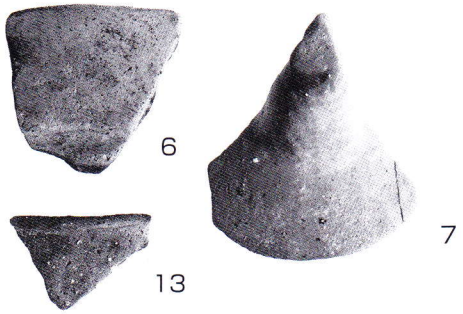


第２次 第６層出土遺物　土師器（２・３杯）

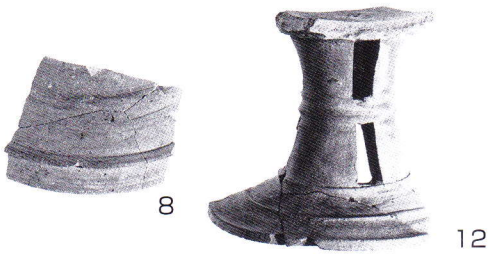
第２次 第６層出土遺物　土師器（４杯）



第２次 第６層出土遺物　土師器（５甕）

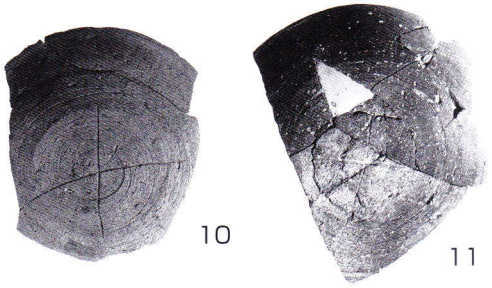


第２次 SD－８出土遺物　土師器（６壺、７高杯、13鉢）

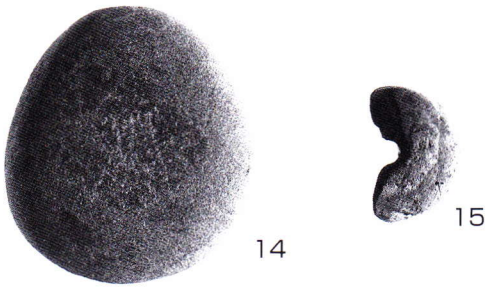


第２次 SD－８出土遺物　須恵器（８杯蓋、12高杯）

第２次 SD－８出土遺物　須恵器（９杯蓋）

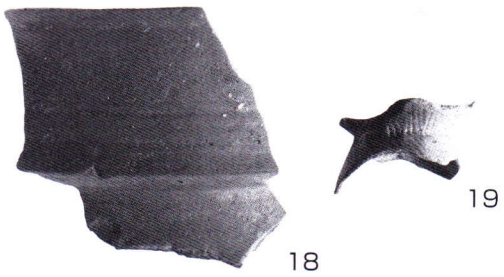


第２次 SD－８出土遺物　須恵器（10・11杯身）



第2次 SD－8出土遺物　石器（14叩石）、土製品（15紡錘車）

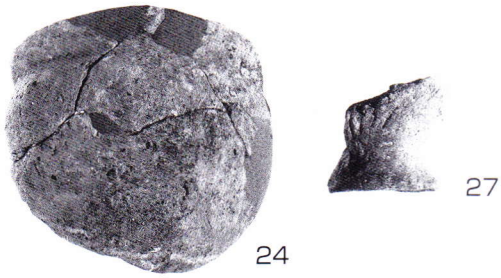
第2次 SD－9出土遺物　土師器（16高杯）
第2次 SD－12出土遺物　須恵器（17杯蓋）



第6次第5層出土遺物　土師器（18壺、19甕）

第6次第5層出土遺物　中国製白磁（21碗）

SI－2出土遺物　土師器（22・23高杯）



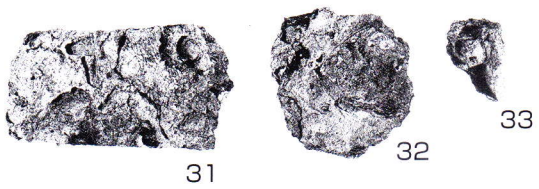
SI－2出土遺物　土師器（24鉢）、製塩土器（27脚台Ⅲ式）

SI－2出土遺物　土師器（26低脚杯）

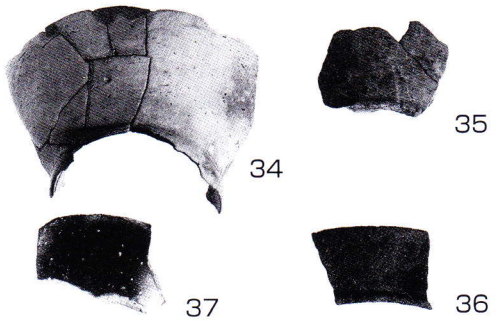
SD－17出土遺物　石器（28砥石）

図版20

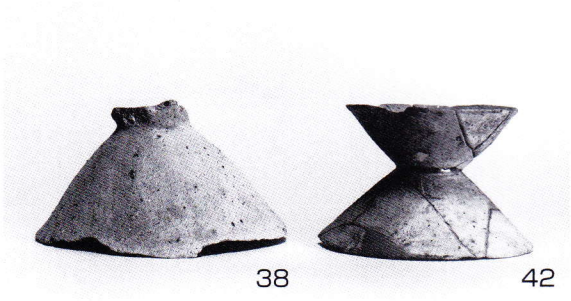
P－189出土遺物　鉄器（29・30刀子）



SD－17出土遺物　鉄器（31～33鎌）

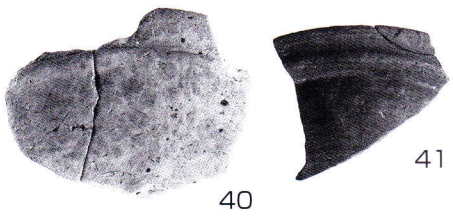


SD－１出土遺物　土師器（34・35壺、36甕、37器台）



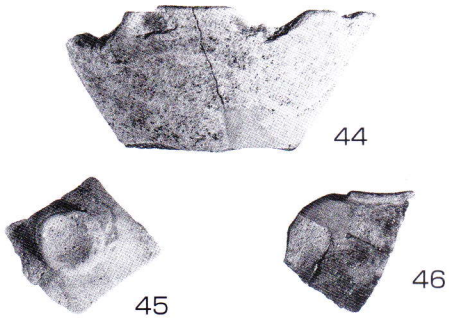
SI－１出土遺物　土師器（38器台）
SD－19出土遺物　土師器（42器台）

SI－１出土遺物　製塩土器（39脚台Ⅲ式）



SD－19出土遺物　土師器（40・41鉢）

P－261出土遺物　ガラス製品（43玉）



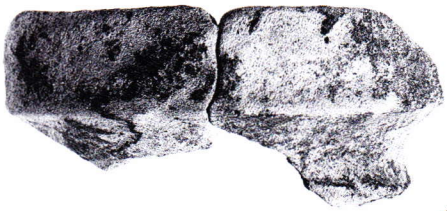
SD－22出土遺物　土師器（44・45壺）
P－232出土遺物　土師器（46甕）

47

SK－10出土遺物　土製品（47高杯）

48

SI－4出土遺物　石器（48砥石）



49

SD－20出土遺物　土師器（49壺）

50

SD－20出土遺物　石器（50叩石）

51

SD－23出土遺物　土師器（51甕）

52

SD－23出土遺物　製塩土器（52底部）

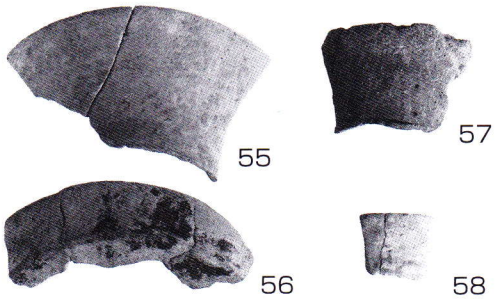
53

SD－23出土遺物　石器（53砥石）

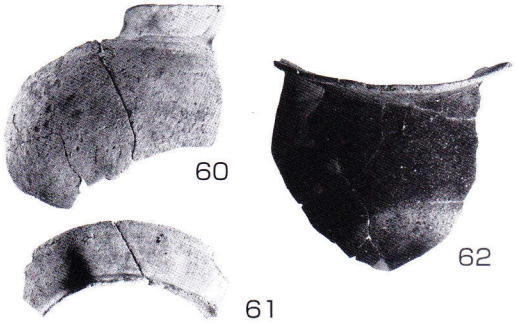
54

SD－23出土遺物　石器（54叩石）

図版22

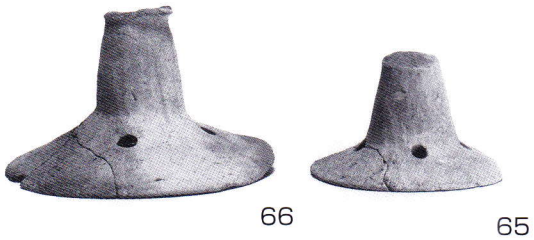


SD－14出土遺物　土師器（55～58壺）

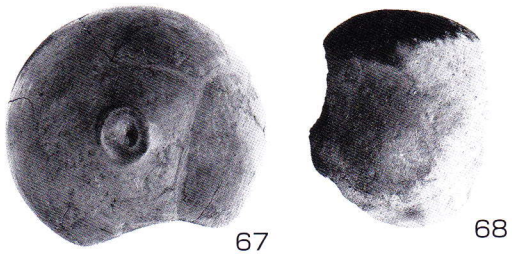


SD－14出土遺物　土師器（60～62甕）

SD－14出土遺物　土師器（63高杯）



SD－14出土遺物　土師器（65・66高杯）



SD－14出土遺物　土師器（67高杯・68鉢）

SD－14出土遺物　土師器（69鉢）

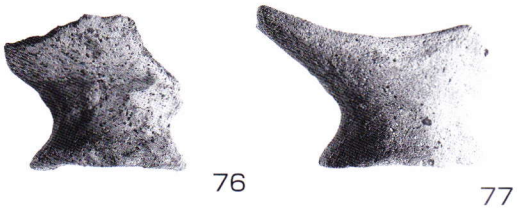
SD－14出土遺物　土師器（70高杯）

SD－14出土遺物　土師器（72脚部）

SD－２出土遺物　土師器（73壺）

SD－２出土遺物　土師器（74高杯）

SD－６出土遺物　土師器（75壺）



SD－11出土遺物　製塩土器（76・77脚台Ⅲ式）

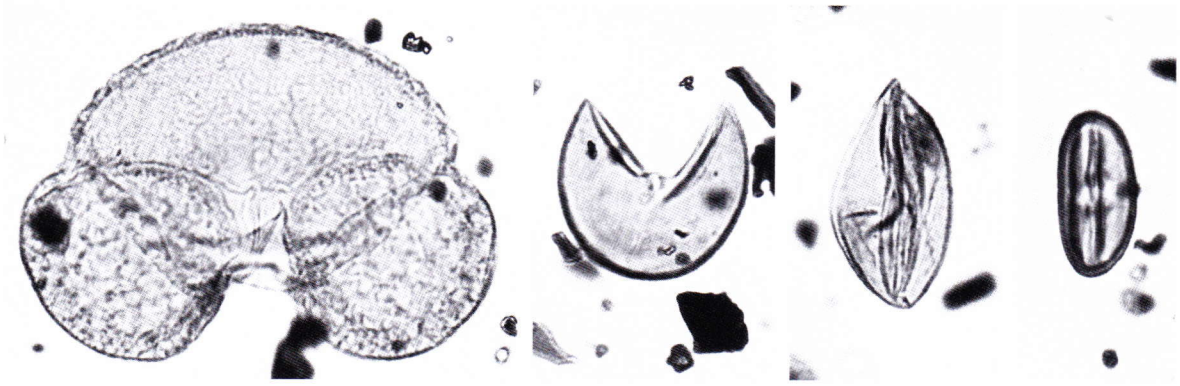
SX－１出土遺物　土師器（78甕）

SX－１出土遺物　製塩土器（79～81脚台Ⅲ式）

SX－１出土遺物　土製器（82有孔土錘）

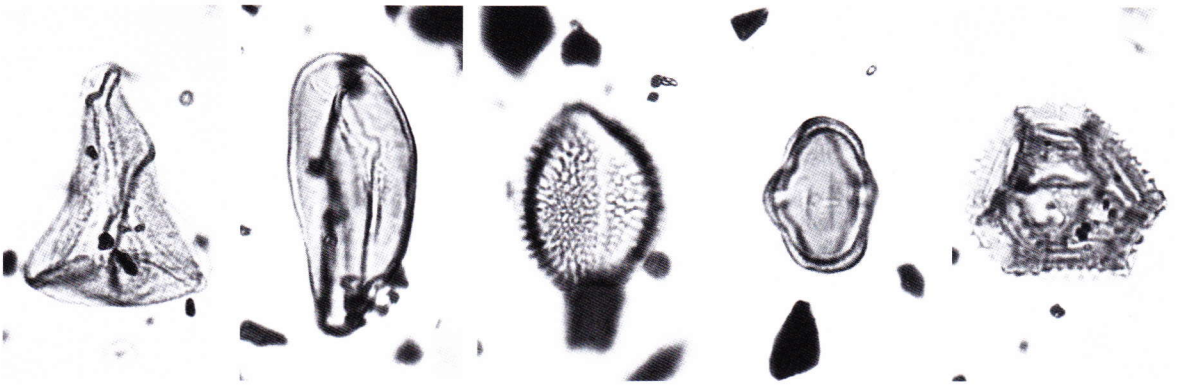
P－96出土遺物　石器（83石鏃）

田屋遺跡第6次調査の花粉・胞子

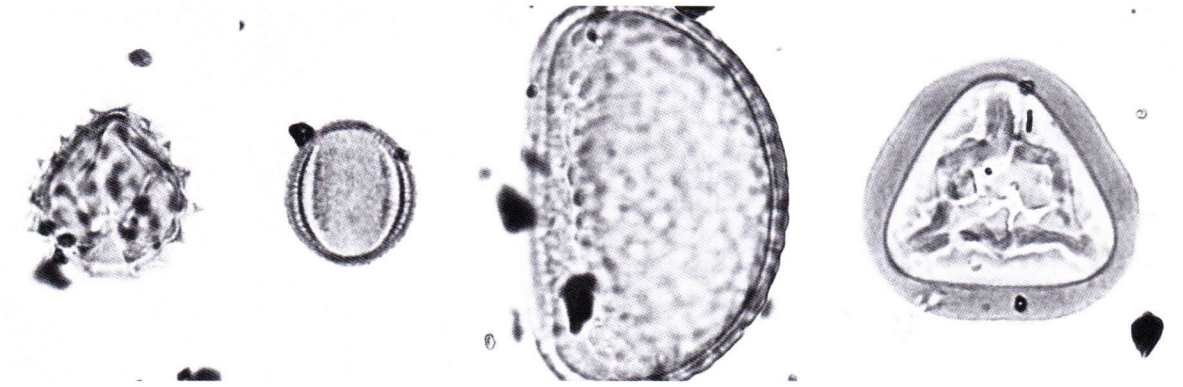


1 マツ属複維管束亜属　2 スギ　3 イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科　4 シイ属

5 コナラ属コナラ亜属　6 コナラ属アカガシ亜属　7 オモダカ属　8 イネ属型



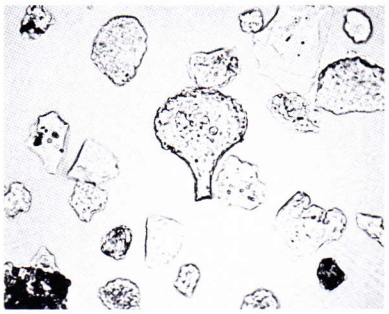
9 カヤツリグサ科　10 ミズアオイ属　11 アブラナ科　12 チドメグサ亜科　13 タンポポ亜科



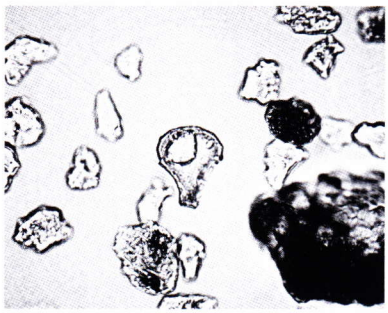
14 キク亜科　15 ヨモギ属　16 シダ植物単条溝胞子　17 シダ植物三条溝胞子

10μm

田屋遺跡第６次調査のプラント・オパール

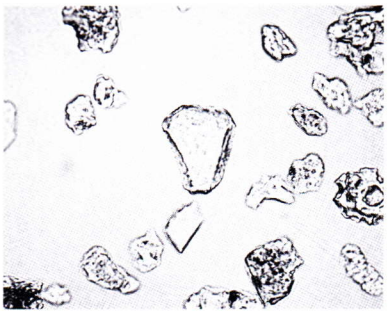


イネ

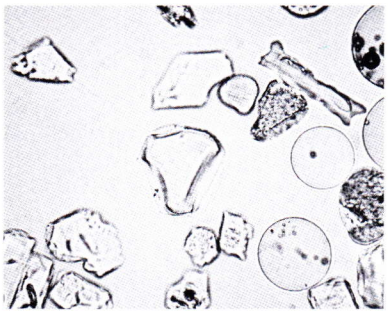


イネ

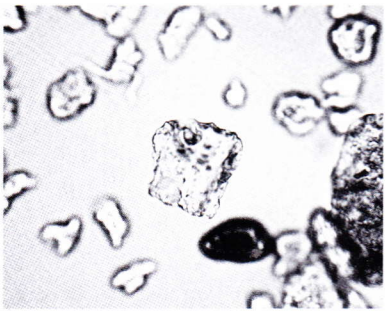
イネ



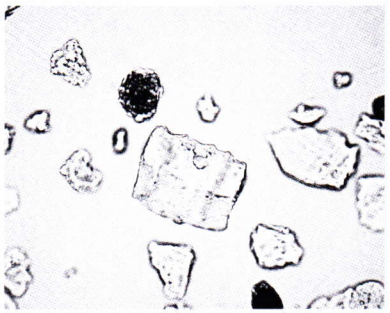
ススキ属型



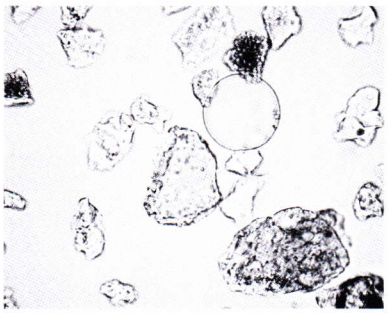
ススキ属型



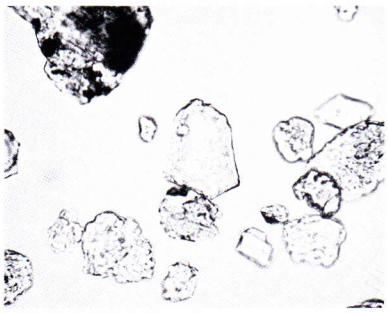
ネザサ節型



ネザサ節型



チマキザサ節型



チマキザサ節型

50μm

平成24年３月16日発行

田屋遺跡　第６次発掘調査報告書

編集・発行　財団法人　和歌山市都市整備公社

印　　刷　株式会社和歌山印刷所

©財団法人 和歌山市都市整備公社2012

和歌山市教育委員会

文化振興課